

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2011

多賀城跡



宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

当研究所は、特別史跡多賀城跡の発掘調査事業と環境整備事業を継続的に実施している。発掘調査事業では、多賀城の歴史的意義を解明し、環境整備事業では、発掘調査成果に基づく史跡公園の整備、活用を目指している。

発掘調査事業は、多賀城跡の外郭線の解明を目的として外郭南西部の五万崎地区で調査を実施した。調査では、外郭南辺の区画施設である築地塀跡を発見し、外郭南辺の区画施設はほぼ直線的に約870m延びており、一貫して築地塀であった可能性が高まった。また、五万崎地区の丘陵部を対象として実施した第28次調査で検出していた建物群がさらに南側へ展開することや、多賀城創建以前の掘立柱建物跡や堅穴住居跡などがこの地区に存在することが判明した。これらの調査成果は、多賀城跡を解明するうえで重要な成果である。

環境整備事業は、政庁跡について、これまで未表示であった脇殿・楼・後殿・北殿等の整備を順次進めており、今年度は東脇殿と東楼の基壇を復元した。平成26年度には政庁跡の再整備が完了する予定である。

本書の刊行にあたり、日頃からご指導をいただいている多賀城跡調査研究委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会の関係者、調査を支援してくださった他の多くの皆様方に感謝申し上げる次第である。

また、平成23年3月11日の東日本大震災に際しては多くの方々にご支援を賜り、たくさんのお見舞や激励の言葉を頂いた。所員一同心から御礼申し上げます。

平成24年3月

宮城県多賀城跡調査研究所

所長 佐藤 則之

目 次

I. 東日本大震災の被害状況とその対応	1
II. 調査研究事業の計画変更	1
III. 第 83 次調査	3
1. 調査の目的と経過	3
2. 調査の成果	7
3. 総括	56
IV. 付章	63
1. 震災被害の発生状況	63
2. 関連研究・普及活動	64
3. 組織と職員	66
4. 沿革と実績	67

調査要項

調査主体 宮城県教育委員会（教育長 小林 伸一）
調査担当 宮城県多賀城跡調査研究所（所長 佐藤 則之）
調査員 佐藤則之・古川一明・三好壯明・吉野 武・三好秀樹・廣谷和也
調査期間 平成 23 年 6 月 14 日～平成 23 年 11 月 8 日
調査面積 約 640m²
調査参加者 佐藤一郎・鈴木 昇・蛇澤 敦・相沢秀太郎
伊藤とし子・佐藤寿子・菅原みづ枝・峰谷みよの（多賀城跡調査研究所臨時職員）
秋山綾子・川口 亮・工藤麻衣子（東北大学大学院）
熊谷亮介（東北大学）
整理参加者 佐久間順子・木村歩・高橋里枝（多賀城跡調査研究所臨時職員）

例 言

1. 本書は、平成 23 年度に実施した多賀城跡第 83 次調査成果と、多賀城跡環境整備、普及活動の概要を収録したものである。
 2. 当研究所の発掘調査と環境整備事業は多賀城跡調査研究委員会の指導と承認のもとに実行している。
 3. 測量原点は政府正殿跡身寄南側柱列中央に埋め込み、この原点と政府南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線とする座標軸を定めている。南北の基準線は真北に対しておよそ 1° 04' 東に偏っている。
- 政府正殿と政府南門の測量原点の平面直角座標値は、昭和 61 年の改測・改算結果により以下のとおりである。
- | | |
|------|---|
| 政府正殿 | 日本測地系（第 10 系） X 座標 : -188276.1240 m, Y 座標 : 13857.2850 m, 標高 : 33.268 m |
| | 世界測地系 X 座標 : -187967.2834 m, Y 座標 : 13557.1698 m |
| 政府南門 | 日本測地系（第 10 系） X 座標 : -188654.5100 m, Y 座標 : 13850.8870 m |
| | 世界測地系 X 座標 : -188345.6730 m, Y 座標 : 13550.7795 m |
- 日本測地系は旧日本測地系（T.D.）を、世界測地系は日本測地系 2000（J.G.D.2000）を意味する。
- * 東日本大震災による基準点の変動量の確認およびその補正については来年度に再測量を実施する予定である。
4. 瓦の分類基準は『多賀城跡 政府跡 図録編』、『多賀城跡 政府跡 本文編』による。
 5. 土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖 11 版』日本色研事業株式会社（1996 年）にもとづいた。
 6. 本調査で得られた資料は、宮城県教育委員会で保管している。
 7. 本調査の成果の一部は、「現地説明会資料」、「平成 23 年度宮城県遺跡調査成果発表会資料」、「第 38 回古代城柵官衙遺跡検討会資料」で紹介しているが、本書の内容が全てに優先する。
 8. 本書は、所員で討議と検討を行い、古川一明・三好秀樹・廣谷和也が分担して執筆し、三好が編集した。

【表紙題字は大塚懇一郎氏の揮毫による。表紙写真：調査地区を南西より撮影】

I. 東日本大震災の被災状況とその対応

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災とその後の一連の余震は、特別史跡多賀城跡附寺跡の所在する宮城県沿岸部の多賀城市域にも多くの被害をもたらした。とりわけ、市域南側のおよそ 3 分の 1 が津波の浸水による極めて甚大な被害を受けた。

海岸線から離れた多賀城市北部に位置する特別史跡多賀城跡附寺跡周辺は、津波による被害は免れたものの、史跡内各地で施設の破損・亀裂などの地震被害が発生し、地割れ・陥没・噴砂などが生じた場所もあった。史跡内で発生した地震被害のうち、復旧を要すると判断された箇所は 11 箇所にのぼる（第 1 表）。これら被害状況の把握とその復旧にあたっては、史跡の管理団体である多賀城市と当研究所が協議しながら分担して作業を進めており、当研究所としては、平成 23～24 年度の調査・整備計画の内容を変更し、復旧事業に優先的に取り組んでいる。

番号	地 区	施 設 名	破損部位・数量	状 況	復旧分担
1	全体	基準点	35 点	地震による変動	研究所
2	政庁地区	正殿・南門基壇	上面アスファルト舗装	歪み・亀裂	研究所
3	南門地区	トイレ	合併浄化槽・屋根瓦・石垣	破損・使用不能	研究所
4	東門地区	トイレ	合併浄化槽	破損・使用不能	研究所
5	作貫地区	露出展示覆屋・東屋	廂支柱・石敷	基部破損・亀裂・崩れ	研究所
6	大久保地区	園路・東屋	舗装・石段・柱基礎	縫ぎ目の剥離・割れ	多賀城市
7	六月坂地区	遊歩道	歩道	岩盤崩落・亀裂	多賀城市
8	多賀城廢寺	園路・トイレ	石段・排水溝	ズレ・漏水	多賀城市
9	館前遺跡	遺跡	斜面	亀裂	多賀城市
10	柏木遺跡	園路・擁壁・U字溝	園路・擁壁の縫ぎ目	亀裂	研究所
11	収蔵庫	博物館収蔵庫	遺物納取棚	倒壊・整理箱転倒	博物館

第 1 表 特別史跡多賀城跡附寺跡関係施設等の主な被害状況

II. 調査研究事業の計画変更

当研究所では、多賀城跡の発掘調査、多賀城跡の環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査などの各事業を計画的・継続的に実施している。しかし、平成 23～24 年度は、前述した東日本大震災の被害に対応するため、各事業の計画を変更して実施した。ここでは、主要事業である多賀城跡の発掘調査事業の内容について記し、その他事業の概要については付章に収録する。

多賀城跡の発掘調査は、昭和 44 年の研究所設立以後は多賀城跡調査研究指導委員会、平成 17 年度からは多賀城跡調査研究委員会の指導の下で、5 カ年計画を立案し実施している。今年度は第 9 次 5 カ年計画（第 2 表 A）の 3 年度目に当たり、五万崎地区を対象に第 83 次調査を実施した。来年度は災害復旧作業に伴う正殿跡の再調査を緊急に実施するため、計画を第 2 表 B のように変更した。

氏名		職	専門分野
委員長	須藤 隆	東北大学名誉教授	考古学
副委員	今泉 隆雄	東北大学名誉教授	古代史学
委員	飯淵 康一	宮城学院女子大学教授	建築史学
委員	鈴木 三男	東北大学大学院教授	植物学
委員	佐藤 信	東京大学大学院教授	古代史学
委員	近江 隆	東北大学名誉教授	都市工学
委員	平川 南	大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館 館長	古代史学
委員	進士五十八	東京農業大学名誉教授	造園学
委員	松村 恵司	独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所長	考古学

多賀城跡調査研究委員会（任期：平成23年4月1日～平成25年3月31日）

年度	次数	発掘調査対象地区	調査面積	調査の目的
平成21年	81次	外郭南辺（鴻ノ池・政庁南西地区）	900m ²	外郭南辺の検討・政庁地区補足調査
平成22年	82次	外郭東辺（伊保石地区）	580m ²	外郭東辺の検討
平成23年	83次	外郭南辺（五万崎地区）	640m ²	外郭南辺の検討（本年度）
平成24年	84次	外郭北辺（丸山地区）	1,000m ²	外郭北辺の検討
平成25年	85次	外郭北辺（六月坂地区）	1,000m ²	外郭北辺の検討

第2表A 第9次5ヵ年計画（変更前）

年度	次数	発掘調査対象地区	調査面積	調査の目的
平成21年	81次	外郭南辺（鴻ノ池・政庁南西地区）	900m ²	外郭南辺の検討・政庁地区補足調査
平成22年	82次	外郭東辺（伊保石地区）	580m ²	外郭東辺の検討
平成23年	83次	外郭南辺（五万崎地区）	640m ²	外郭南辺の検討（本年度）
平成24年	84次	外郭南辺（五万崎地区）	1,000m ²	創建期外郭南辺の検討
	85次	政庁正殿（政庁地区）		正殿跡の再検討
平成25年	86次	外郭北辺（六月坂地区）	1,000m ²	外郭北辺の検討

第2表B 第9次5ヵ年計画（変更後）

III. 第83次調査

1. 調査の目的と経過

(1) 調査の目的

平成23年度は多賀城跡発掘調査第9次5カ年計画の3年目にあたる。本計画は外郭施設の調査データを更に集積し、その様相を明らかにした上で本報告書を作成することを目的としており、今年度は外郭南辺西端部を対象に五万崎地区の調査を実施した（図版1・2）。

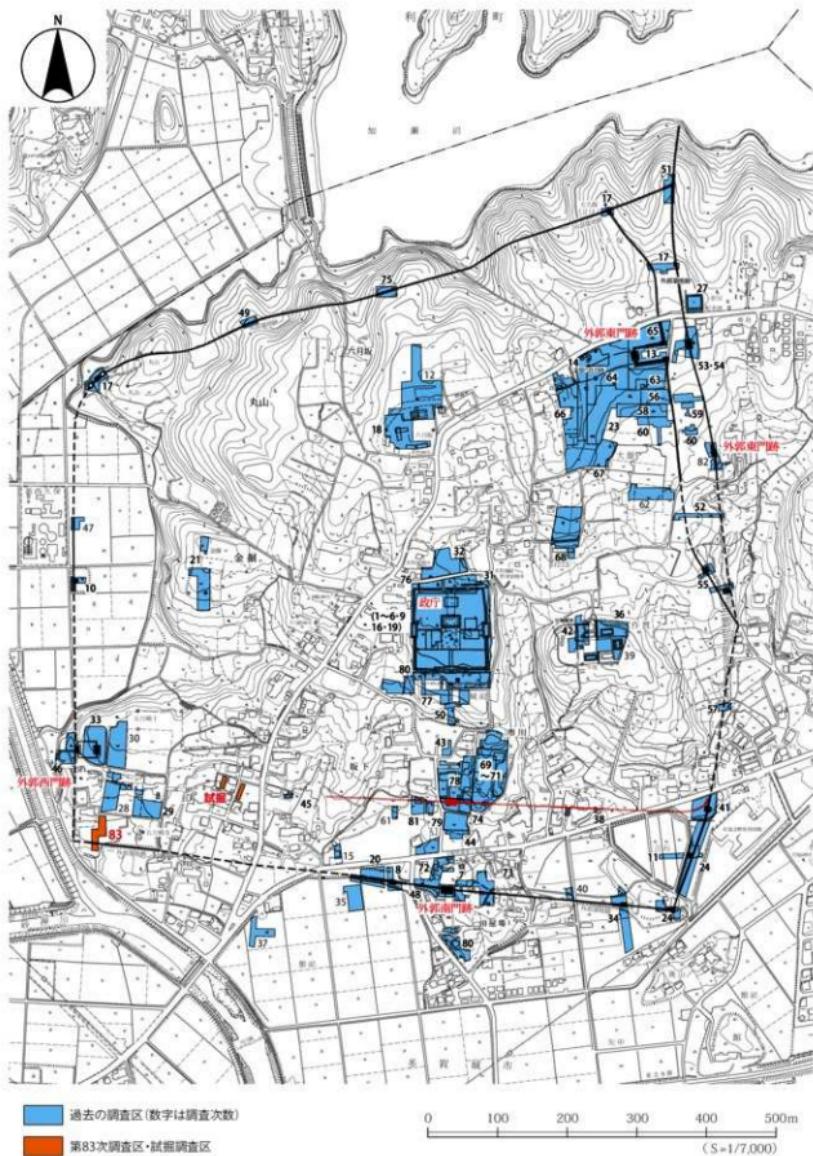
調査地点は政府跡の南西方約500mに所在し、外郭西門跡の南約130mで、推定される外郭南西隅からはやや東に位置している。この場所は、城内の地形を二分するように北東から南西の沖積地へ下る丘陵尾根の末端から西側へ張り出した小丘陵の南斜面にあたり、調査区東側の林の中には外郭南辺築地塀跡とみられる土手状の高まりが残る（図版1）。

本調査の目的は、この土手状の高まりの延長線上に想定している外郭南辺西端部で区画施設の位置を確認し、その構造や変遷、橈の有無など、外郭南西隅の状況を把握することである。また、第28次調査（年報：1977）で検出している掘立柱建物群の南側への拡がりを捉え、区画内部に配された施設の様相を把握することも調査目的の一つである。

なお、今年度は本調査区から北東方約200mの地点（図版2の「試掘」地点）を対象とした試掘調査も行っている。この場所は、近年の調査で発見した掘立式八脚門（SB2776）とこれに接続して東西に延びる塀の西側延長線上にあたる。この区画線の延びを確認し、その時期や塀の構造を明らかにするための予備調査である。



図版1 第83次調査区_遠景



図版2 第83次調査区の位置

(2) 調査の経過 (図版2・3)

調査期間は6月14日から11月8日までである。

まず、五万崎地区の南部に埋設されている「五万崎II」、「五万崎II X」、「五万崎II Y」の基準点を使用して調査対象地区的発掘座標を算出し、調査の基準杭を設置した。

対象地（五万崎38-1・9番地）は丘陵裾部の緩やかな南斜面で、その南端部は高さ1.2m程の段が付いて低くなっている。段より南の低い部分は昭和20年代に実施された砂押川の一次河川改修の際に土取りされた結果生じたもので、段の法面の東側には外郭南辺築地壠跡とみられる土手状の高まりが残っている。公有地化される以前は、対象地の大半が畑地として利用されていた。

外郭南辺の推定線を横切り、その北側（内側）へ延びる南北に長い調査区を基準杭に基づいて設定し、6月14日から手作業で表土除去を開始した。表土除去は調査区の南北中央線上をトレンチ状に掘り下げ、遺構面までの深さや遺構の残存状況を把握することから始めた。この段階で、北半部に礫群や柱穴群、南半部に整地層や堆積層が分布することを確認していたが、区画施設の存在は確認できていなかった。

その後、6月21・22日に重機で残りの表土除去を行い、6月28日から全体の遺構精査に着手した。調査区北半部は表土下が地山面、南半部は表土下に暗褐～黒褐色の堆積層が残存しており、精査は北端から南へ向かって進めたが、外郭南辺の推定線上にあたる南半部では区画施設の有無を確認するため先行して調査区東・西の壁際を約1.0m幅で断ち割り（東・西壁トレンチ）、地山面まで掘り下げた。

その結果、調査区南端近くの法面で確認していた整地層が築地壠跡（SF3050 a）の基底部積土であることが判明した。築地壠は東西方向に延び、ほぼ外郭南辺の推定線上に位置することから外郭南辺の区画施設と判断されるが、本体の大半が削平によって失われており、地表面ではその存在を認識できない状況であった。この築地壠の南北両側では、整地層や溝など区画施設に関係する遺構を検出し、さらに北側（城内側）の堆積層下では土壤群が複雑に重複していることも判明した。また、築地壠よりも古い竪穴住居跡や柱穴、溝などの存在も確認している。そこで、築地壠と整地層や内溝の関係、土壤の重複関係などをより詳細に把握する目的で調査区南半の中央を南北に縦断する中央トレンチを設け、遺構の掘り下げや断ち割りを実施した。

遺構の分布状況をみると、調査区南端部に外郭南辺築地壠とこれに伴う整地層や溝などが存在する。築地壠の内側から調査区中央にかけては竪穴住居や竪穴遺構、土壤が集中し、中央から北部は大型の掘立柱建物跡を中心とした建物群と多数の溝が展開している。中央付近で検出した掘立柱建物（SB3093～3095）は竪穴住居や土壤群などと重複し、基本的にこれらより新しいが、双方の埋土の土質・色調が近似していたために柱穴を認識するのに時間を要した。なお、当初は礫群と捉えていた北半部の遺構は不整形に掘り込まれた窪みの中に礫が集中するものであったため、集石遺構（SX3105）として扱った。

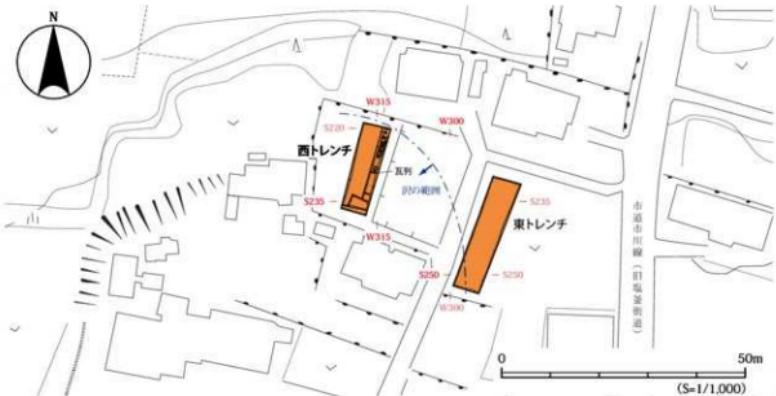
これらの遺構については必要に応じて詳細な調査を行い、その記録は1/20図面の作成とデジタルカメラによる写真撮影を行った。11月8日には精査および記録作業のすべてが終了した。調査区

の埋め戻しは、重機を用いて遺構面を山砂で保護した上に調査時の残土を戻すかたちで行い、11月25日に終了している。調査面積は約640m²で、検出した遺構には整理作業の段階で仮番号を改め、3040番から遺構番号を付した。

その間、10月12日にラジコンヘリによる航空写真的撮影、10月13日に報道機関への発掘調査成果の公表を行い、10月15日には一般を対象とした現地説明会を開催している。現地説明会では約100名の参加者が得られた。さらに、10月20日には多賀城跡調査研究委員会を開催し、調査成果に関する指導を受けた。その他、調査終了後の12月10日には平成23年度宮城県遺跡調査成果発表会、平成24年2月25日には第38回古代城柵官衙遺跡検討会において成果の概要を報告した。

また、調査期間中に五万崎地区北東部（五万崎28-1～4番地、図版3）の試掘調査を実施している。この場所は、第83次調査区が立地する小丘陵と城内の地形を二分して北東から南西の沖積地へ下る丘陵尾根との接続部にあたる南斜面で、現在の階段状に切り盛りされた地形は宅地造成によつて生じたものと考えられる。この南斜面を対象として8月2・3日に重機で南北方向に長いトレンチ2本を東西20m程の間隔で設け、旧地形や遺構の残存状況を確認する予備調査を行った。その結果、各地点の旧地形は西トレンチが南から入り込む沢の内部、東トレンチはその沢に向かって南西方向に傾斜する丘陵斜面であることが判明した。

沢の内部に位置する西トレンチの東壁際を約2.0m幅で深掘りすると、深さ1.6m程掘り下げた中央部で瓦を東西方向に隙間なく並べた瓦列を検出した。この瓦列を境に北側は旧表土が削り取られて盛土整地されており、整地によって造り出された平坦面（平場）が2面残る。各面では一辺1.0m前後の柱穴や溝などを確認しているが、これより下層および瓦列の南側では遺構は検出されず、目的としていた区画施設の存在を確認することはできなかった。なお、検出した平場の上部には灰白色火山灰（10世紀前葉頃降灰）の堆積が認められる。東トレンチでは、厚さ0.3m程の表土直下で柱穴や土壤、溝、整地層、堆積層などを検出した。確認作業をこの面で止めたために下層の状況が未確認で、区画



図版3 試掘調査区の位置

施設の存在については判然としない。

試掘の結果、いずれのトレーニングでも区画施設の存在を確認することはできなかったが、東トレーニング周辺は旧地形が緩やかな南北斜面で、表土下に古代の堆積層を残すなど後世の削平が下層まで及んでいない箇所もみられることから区画施設を探す上で条件が良い。そこで、来年度は東トレーニング周辺を対象に範囲を拡張して本調査（第84次調査）を実施する予定である。

2. 調査の成果

（1）基本層序（図版4）

五万崎地区は外郭南西隅に位置し、域内を北東から南西へ下る尾根筋から西側へ張り出した小丘陵が台地状の地形を形成している。この台地の南北裾部に調査区を設けており、遺構検出面の標高は11.1～16.0mである。調査区内の地形をみると、全体に緩やかに南側へ傾斜しており、南部北半でやや傾きが強くなる。また、南部南半は後世に大きく削り取られ、高さ1.2m程の段が付いて低くなっている。調査区から南へ下りきった約100m先では、外郭西側の西側を南流する砂押川と名古曾川の二つの河川が合流している。

調査区内の基本層序は8層に大別される。北半部は削平を受けて表土（第I層）直下がほぼ地山面（第VII層）となっており、第II・III層は主に南半部に分布している。第IV～VII層は南半部に設けた3つのトレーニング内で確認した堆積層、旧表土で各層の括りや前後関係を十分には捉えられていない。以下に層序の特徴を記す。

【第I層】 暗褐～黒褐色（10YR3/4～7.5YR2/2）シルトの表土層で、調査区全体を覆う。厚さは0.2～0.5mで、暗褐色の盛土（第Ia層）とそれ以前の表土・耕作土（第Ib層）に細分される。

【第II層】 暗褐～黒褐色（10YR3/3～10YR3/2）のシルト～砂質シルト層で、調査区中央からSF3050 築地跡北側にかけてとSF3050 南側の西部に分布する。厚さは0.05～0.35mで、層上端部が部分的に第Ib層と攪拌されている。本層の上面で検出したSK3116 土壌は、素掘りの井戸もしくは井戸枠材の抜取穴の可能性があり、その堆積土上位から近世磁器片が出土している。また、東壁トレーニングの断面観察では本層下に位置するSK3072 土壌の堆積土上位で灰白色火山灰層を確認した。このことから、第II層が形成されたのは、古代末以降、近世以前と考えられる。

【第III層】 黒褐色（10YR3/1）シルト層で、調査区南部のSF3050 北側に分布する。層中に焼土・炭化物粒を含み、厚さは0.1～0.5mで、南西側へ向かって徐々に厚みを増す。西壁トレーニングの断面観察では、第II層下に位置し、広範囲に括がるSK3072の上部を覆って堆積しており、古代末頃の形成年代が想定される。

【第IV層】 黒褐色（7.5YR2/2～10YR2/2）シルト層で、調査区南東部のSF3050 北側から中央南寄りにかけてと中央部の北西端に分布するとみられる。中央・西壁トレーニングでは検出してないが、東壁トレーニングの断面観察で確認しており、SK3072・3085 土壌より古く、地山面

で検出した SK3069・3086 土壌と SX3051 b 整地層の上部を覆って堆積している。また、SK3068 は本層の形成途中で掘り込まれており、この掘り込み面を境にして上位の第IV a 層と下位の第IV b 層に細分される。厚さは 0.1 ~ 0.3 m で、層中に炭化物の薄層と炭化物粒を含む。旧表土などの間層が認められず、直接地山面に堆積していることから、本層が形成される前に当時の地表面は地山面まで削平を受けていると考えられる。

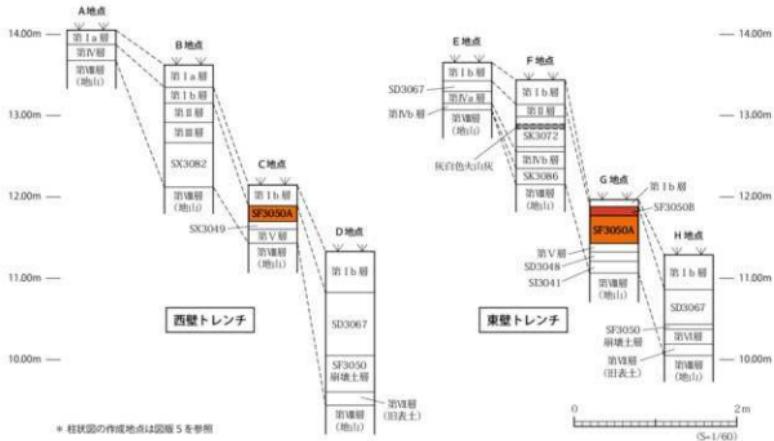
【第V層】暗褐色 (10YR3/3 ~ 10YR3/2) シルト層で、調査区南部の SF3050 下に残存している。東壁・中央・西壁トレーニングの断面観察で確認しており、SF3050・SX3049 整地層より古く、地山面で検出した柱穴や土壌・溝などの上部を覆って堆積している。厚さは 0.1 ~ 0.3 m で、層中に砂の小ブロックと炭化物粒を含む。本層も地山面に直接堆積しており、形成以前の地表面が地山面まで削平を受けている可能性がある。

【第VI層】黒褐色 (10YR3/2) シルト層で、東壁トレーニング内の SD3060 溝と SD3067 溝の間でのみ確認している。旧表土（第V層）直上に堆積しているが、第V層との前後関係や分布範囲については捉えられていない。厚さは 0.2 m 程度で、層中に地山ブロックを含む。

【第VII層】黒褐色 (7.5YR2/2) シルトの旧表土で、東壁トレーニング内の SD3060 溝北側の僅かな範囲と SD3060・3067 両溝の間、西壁トレーニングの南端部で確認している。厚さは 0.1 ~ 0.25 m で、地形に添って南側へ傾斜し、厚みを増す。調査区内にはほとんど残存しないとみられる。

【第VIII層】主に黄褐色 (10YR5/8) の粘土質シルト層で、地山土である。これより下層はぶい黄橙色 (10YR6/3) の砂層、明黄褐色 (10YR6/6 ~ 10YR7/6) の粘土層となっている。

本調査区とすぐ北側に位置する第 28 次調査区（年報：1977）との基本層序の対応関係をみると、双方の第I層は表土で共通している。第II層も土質・色調が近似し、同様に古代末（中世）以降、近



図版 4 第 83 次調査区_基本層序柱状図

世以前に形成された堆積層と考えられることから、ほぼ対応するとみられる。第28次調査区の南半部に分布する地山直上に積まれた盛土整地層（第Ⅲ層）の続きは、本調査区では確認できなかった。本区北半の表土（第Ⅰ層）下が著しく削平されているためとみられる。但し、層として分布範囲を捉えることはできなかったが、北部の第Ⅰ層下には褐色シルトとにぶい黄褐色粘土のブロック混じり土（焼土の混入なし）が局部的に残っており、第28次調査の第Ⅲ層は本区北部まで拡がっていた可能性がある。

（2）発見遺構と出土遺物（図版5）

発見した遺構には、築地塀跡1、掘立柱建物跡12、柱穴列跡1、竪穴住居跡6、竪穴遺構1、杭列跡1、集石遺構1、土壙31、溝14、溝状掘り込み2、整地層7、ピット多数などがある。調査区の北部から中央にかけては大型の掘立柱建物跡を中心とした建物群が展開し、集石遺構や溝などがみられる。中央から南部にかけては竪穴住居跡や竪穴遺構、土壙が集中し、南端部で確認した築地塀跡や整地層、溝などは外郭南辺の区画施設に関係するものである。

各遺構や堆積層、表土からは、弥生土器、土師器、須恵器、須恵系土器、綠釉・灰釉陶器、中世陶器、瓦質土器、近世陶磁器、硯、軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、隅切瓦、鉄製品、鐵滓、木製品、土製品、石製品、石器などが出土している。

以下では、主な遺構とその出土遺物についてまとまりごとに概要を記載し、堆積層や表土から出土した主な遺物についても説明を加える。

i. 外郭南辺の区画施設

調査地点は、東から延びてきた土手状の高まりが途切れ、地表面で区画施設の存在を確認できない場所である。しかし、調査の結果、これまでに判明している外郭南辺築地塀の西側延長線上で東西に延びる築地塀跡を発見し、整地層や溝、溝状掘り込みなど区画施設に関係する遺構を検出している。

【SF3050 築地塀跡】（図版6～12）

調査区南部を精査した結果、東西方向に延びるSF3050 a築地塀跡とその基礎整地であるSX3049整地層、北側（城内側）の犬走りとみられるSX3051 a整地層を検出した。また、SF3050 aの上部を削り取って新たにSF3050 b築地塀跡を積み直したとみられる版築上、築地塀の北側を嵩上げしたSX3051 b・3052・3053整地層とその上面から掘り込まれたSD3057・3058・3071溝、南側を嵩上げしたSX3054整地層を検出し、築地本体の南北両肩を壊すかたちで東西に延びるSX3055・3056溝状掘り込みを確認している。これらの遺構の存在から築地塀が修築や改築を繰り返しながら長期間に渡って維持されていたことが窺われるが、後世の削平が著しく、明確に確認できた築地本体は1時期（SF3050 a）のみである。

築地塀部分の掘り下げ、断ち割りは東壁・中央・西壁トレチおよび中央小・西小トレチで実施している。各トレチの断面観察を踏まえると、SF3050 bはSX3051 a・SX3051 b・SD3057と組み合う可能性が高い。また、SX3052・SD3058と組み合うSF3050 c築地塀跡、SX3053・



図版5 第83次調査区全体図

SD3071 と組み合う SF3050 d 築地壠跡の存在が予想される。

SF3050 築地壠は SD3062・3063・3064 溝より古く、SI3040・3041・3042 住居跡、SK3110 土壙、SD3047・3048 溝より新しい。

《SF3050 a 築地壠跡、SX3049・3051 a 整地層》(図版 6 ~ 10)

築地壠造営以前の地形をみると、調査区南部では竪穴住居や土壙、溝などの古い遺構が埋没し、南部南半にはこれらの上部を覆う第V層の分布も認められ、全体に北から南へ向かって緩やかに傾斜している。この傾斜地の斜面上方にあたる北側を段状に削り出して南北幅 5.3 ~ 7.5 m の比較的平坦な面を造成し、そのほぼ中央に SF3050 a 築地壠跡が築成されている。築地下までの断ち割りを実施した各トレチで断面を観察すると、東壁トレチでは削り出した面に SF3050 a 本体が直接積まれており、他のトレチでは削り出した面を均すかたちで盛られた SX3049 整地層上に SF3050 a 本体が認められる。SX3049 は地山ブロックと炭化物粒を含む灰黄褐～暗褐色シルト層で、厚さは 0.05 ~ 0.2 m あり、南側の斜面下方に向かって厚さを増している。

SF3050 a の大半は削平により失われているものの、調査区を東西に横断して延びる築地基底部の積土が幅 2.2 ~ 2.4 m、高さ 0.3 m 程で残存していた。しかし、この基底部についても南北両壁は SX3055・3056 溝状掘り込みによって壊されており、正確な基底幅や方向を捉えることは難しい。但し、東壁トレチの断面観察(図版 8 の断面①)では基底幅は最大でも 2.8m 以下となり、2.7m 前後の可能性が高い。築地壠の方向は、残存する基底部の中軸線でみると発掘基準線に対し、西で約 5° 北に偏している。積土の版築は細かい単位で行われており、5 ~ 15cm の厚さに大別できる。大別層は明褐～黄褐色シルトと暗褐～黒褐色シルトを主体とする層が互層をなす。積手の違いは W 507・W 510 付近の 2箇所で確認し、双方の間隔は概ね 3.2 m である。

また、SF3050 a の北側には同様に SX3049 直上もしくは削り出した面に直接盛土整地した厚さ 0.15 ~ 0.3 m の SX3051 a 整地層が認められる。SX3051a は地山土を主体とした黄褐～暗褐色の粘土質シルト層(中央トレチ内ではやや砂質)で、SF3050 a に沿って幅約 1.0 m で東西方向に延びており、上面の標高が 11.9 m でほぼ一定している。両者の関係は、接合部を SX3055 に壊されているため判然としないが、同一面上に積まれており、底面の高さが一致していること、双方の間に間層が認められないことなどから、SX3051a は SF3050 a を版築した後にその北側に寄せ付けて設けられた犬走り状の整地層と考えられる。その結果、SX3051a 北端と最初に削り出された北端の法面との間が溝状に低くなっている。なお、SF3050 a は底面から連続して細かい単位で丁寧に版築されており、SX3051a とは積土の状況が大きく異なることから、その積土全体を築地本体と捉えた。

SF3050 a の北側では、SX3051a 上で黄褐～褐色土ブロックを多量に含む褐灰～灰黄色シルトの築地崩壊土層(a 層)を確認している。また、東壁トレチ内の削り出し面北端部には黒褐色シルト層の堆積が認められた。

南側では、削り出し面もしくは SX3049 上に直接載り、そこから斜面下方にかけて分布する明褐～黄褐色土ブロック主体の層と暗褐～黒褐色土ブロック主体の層が互層状に堆積した築地崩壊土層を

確認している。また、西壁トレンチ内ではこの崩壊土中に瓦片が集中する層（図版9の断面①と写真、瓦片は未採取）も認められた。しかし、この崩壊土層とSF3050 aとの間がSX3056によって壊されて断絶しており、SX3051 aに対応する整地層も存在しないため、その詳細な帰属を捉えることができない。

遺物は、築地積土から土師器壺・甕、須恵器甕が出土している。また、削り出し面北端部の堆積層から平瓦II B類が1点出土している。いずれも小破片で、図示できるものはない。

なお、帰属期を特定できないが、西壁トレンチ内のSF3050 南側斜面に位置する瓦集中層を検出した際に取り上げた遺物として、丸瓦II類が4点、平瓦II B類が8点、平瓦II C類が1点ある。

《SF3050 b 築地壙跡、SX3051 a・b 整地層》（図版6～10）

SF3050 a 築地本体の上部をほぼSX3051 a 整地層上面の高さまで削り取り、新たにSF3050 b 築地本体を積み直したとみられる版築層を検出した。この版築層はSF3050 a直上の南東部に位置し、SF3050 aの積手の違い（W 507付近）を覆って東西3.5m以上、南北0.7mの範囲に残存している。東壁トレンチの断面観察（図版8の断面①）では、この版築層がSF3050 aの上部全体に東西幅1.7mで認められ、厚さは0.05～0.1mで、積土の版築は細かい単位で行われている。積土は5cm前後の厚さに大別され、褐色シルト層と黒褐色シルト層の互層である。築地本体とみた場合、南北両壁はSX3055・3056溝状掘り込みによって壊されている。

SF3050 bの版築以前にSF3050 aとその北側崩壊土層（a層）がほぼSX3051 a上面の高さまで削り取られている状況（図版8の断面①・②）を踏まえれば、SX3051 aもしくはその上部に残る崩壊土層上面がSF3050 b期にも犬走り面として利用されていたと考えられる。また、この時期にはSF3050 a構築の際に削り出した北側の段を埋め戻すかたちで行われたSX3051 b 整地層が東壁・中央トレンチ内で確認されており、このSX3051 bとSX3051 aの間には築地北側の排水を目的としたSD3057溝が設けられていた。SX3051 bは地山ブロックを多量に含む黄褐色～暗褐色の粘土質シルト層（中央トレンチ内ではやや砂質）で、東西5.6m以上、南北1.4～1.9mの範囲に分布しており、厚さは東壁トレンチでみると0.15m前後である。

SF3050 bの築成が広範囲に及ぶ築地壙の修築であったか、もしくは部分的な補修であったかを判断することは難しいが、西壁トレンチ内ではSF3050 a築地本体がSX3051 a上面から0.2m程の高さで残存し、SX3051 bも認められないことから、この場所まではSF3050 bの築成が及んでいなかった可能性が高い。

SF3050 bの北側では、SX3051 b上に築地崩壊土と周辺から流入した砂や暗褐色～黒褐色シルトが混じり合った状態で堆積している。また、東壁トレンチ東壁断面で確認したSX3051a上に堆積する黄褐色～褐色土ブロックを多量に含む褐灰色シルト層（図版8の断面①のb層）はSF3050 b期の築地崩壊土とみられる。南側については、前述の通り崩壊土層の詳細な帰属を捉えることができない。

遺物は、SX3051 b中から土師器甕、平瓦II B類aタイプ、土鍤が出土している。また、SX3051 b上の堆積層から土師器壺・甕、須恵器壺・蓋・甑・甕、丸瓦II類、平瓦II B類aタイプが出土し



図版6 第83次調査区_分割図(南部)

ている。いずれも小破片で、図示できるものはない。

《SF3050 c 築地壙跡、SX3052 整地層》(図版 6 ~ 12)

SF3050 a・b 築地本体の北側にあたる SX3051 a・b 整地層上を 0.3 m 前後嵩上げした SX3052 整地層を東壁・中央トレーニング内で検出した。この嵩上げに伴って新たに築成された SF3050 c 築地壙跡の存在が想定されるが、削平されて現存しない。また、SX3052 を南北に二分するかたちでその上面から掘り込まれた SD3058 溝を検出しており、築地北側の排水を目的とする溝と考えられる。この SD3058 が SD3057 溝とほぼ重なる位置で東西方向に延びている状況から、SF3050 c の築成位置は SF3050 a・b とほぼ同位置であった可能性が高いと思われる。

SX3052 は SX3051 a・b 上に残る築地崩壙土や堆積土層の上に地山ブロック主体のにぶい黄褐色シルトを用いて盛土整地したもので、東西 5.7 m 以上、南北 2.6 m の範囲に、厚さ 0.1 ~ 0.25 m で残存している。SX3055 溝状掘り込みとの前後関係は判然としないが、東壁トレーニングの断面(図版 8 の断面①)をみると、SX3052 の方が古いと考えられる。

SX3052 の直上(SD3058 上部を含む)には、SF3050 c 築地本体の崩壙土とみられる黄褐色シルト層と砂の小ブロックが混じり合った状態で堆積しており、中央トレーニングではこの層中から多量の瓦片が出土した(図版 10 の断面①の c 層、写真下)。これより上には、主に褐灰~黒褐色シルト層が堆積しており、砂や炭化物の薄層も認められる。築地崩壙土とみられる黄褐色シルト層の含有量は減少する。

遺物は、SX3052 中から土師器壺・甕、須恵器壺・蓋・甕、丸瓦 II 類、平瓦 II B 類 a タイプの破片が出土している。

また、SX3052 直上の崩壙土層(c 層)からは、土師器壺・甕、須恵器壺・大型塊(図版 11-8)・蓋・甕と多量の瓦類が出土している。瓦には、型番不明の重圓文軒丸瓦(図版 11-2)、單弧文軒平瓦 640a タイプ(図版 11-3・4)、丸瓦 II 類、平瓦 I A 類 a タイプ(図版 11-5)・II B 類 a タイプ(図版 11-6)・II C 類がある。平瓦は II B 類 a タイプが主体で、「物」(図版 11-7)の刻印がみられるものが 1 点出土している。

これより上の堆積層からは、土師器壺(図版 12-7~9)・甕、須恵器壺(図版 12-3)・高台壺(図版 12-4)・高台皿(図版 12-5)・蓋・瓶(図版 12-6)・甕、丸瓦 II A 類・II B 類、平瓦 I A 類・I C 類 a タイプ(図版 12-2)・II B 類 a タイプ・II C 類が出土しており、瓦類を中心に関連性が多い。平瓦は II B 類 a タイプが主体で、丸瓦には「田」(図版 12-1)の刻印がみられるものがある。

《SF3050 d 築地壙跡、SX3053 整地層》(図版 6 ~ 10)

SX3052 整地層上を 0.4 m 前後嵩上げした SX3053 整地層を表土(第 I b 層)直下で検出した。この整地層は北側を SK3072 土壌に壊され、南側を後世の削平で失った結果、南北幅 0.6 ~ 1.5 m で東西方向に延びている。また、この SX3053 北側の SK3072 下では東西方向に延びる SD3071 溝が検出されており、中央トレーニングの断面観察(図版 10 の断面①)によると、SD3071 は SX3053 上か



外郭南辺の区画施設（東から）



SF3050 a・b（東から）



SF3050 a の積手の違い（W510 付近、東から）

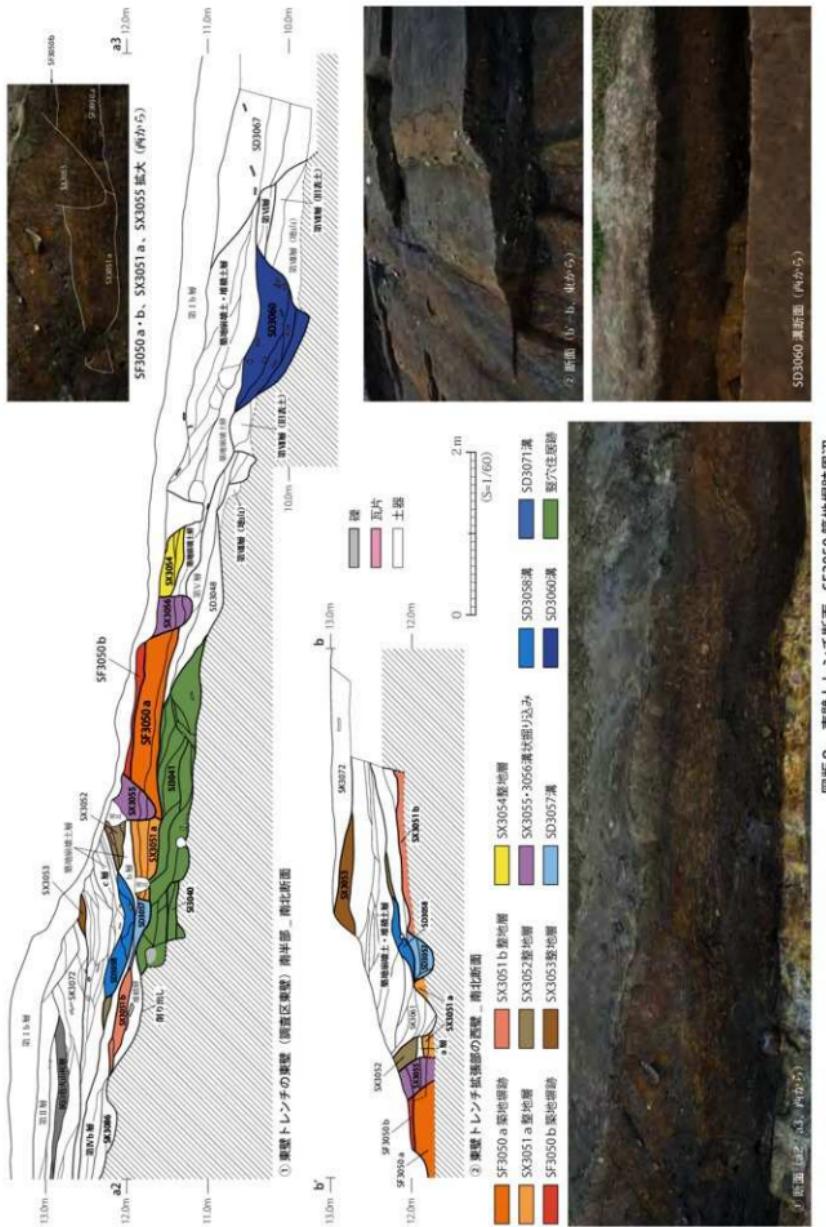


SF3050 a・b と SX3055（東から）

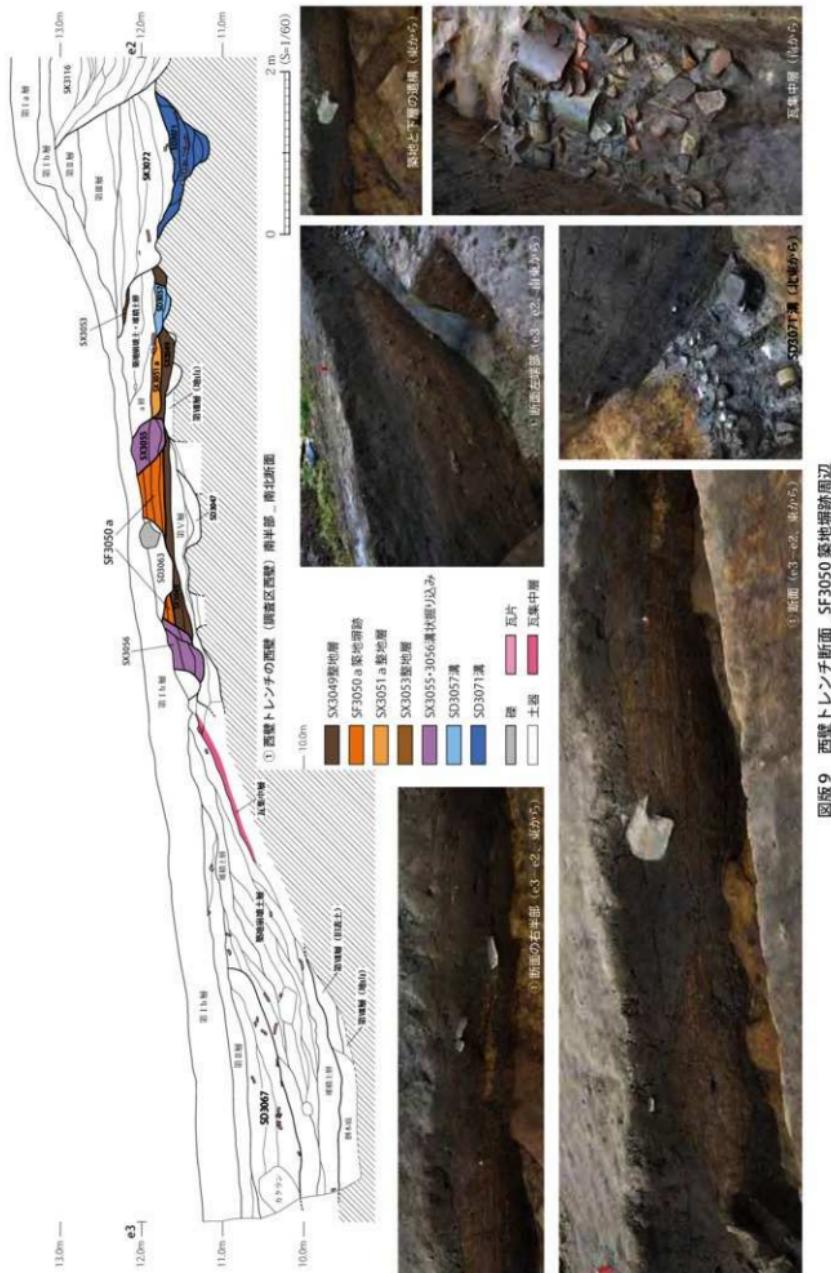


SX3054 西半部の状況（南から）

図版 7 外郭南辺の区画施設（SF3050 築地壠跡ほか）_写真



圖版 8 素面 | 8-2-1 面材 | 31330 案件號碼/問題

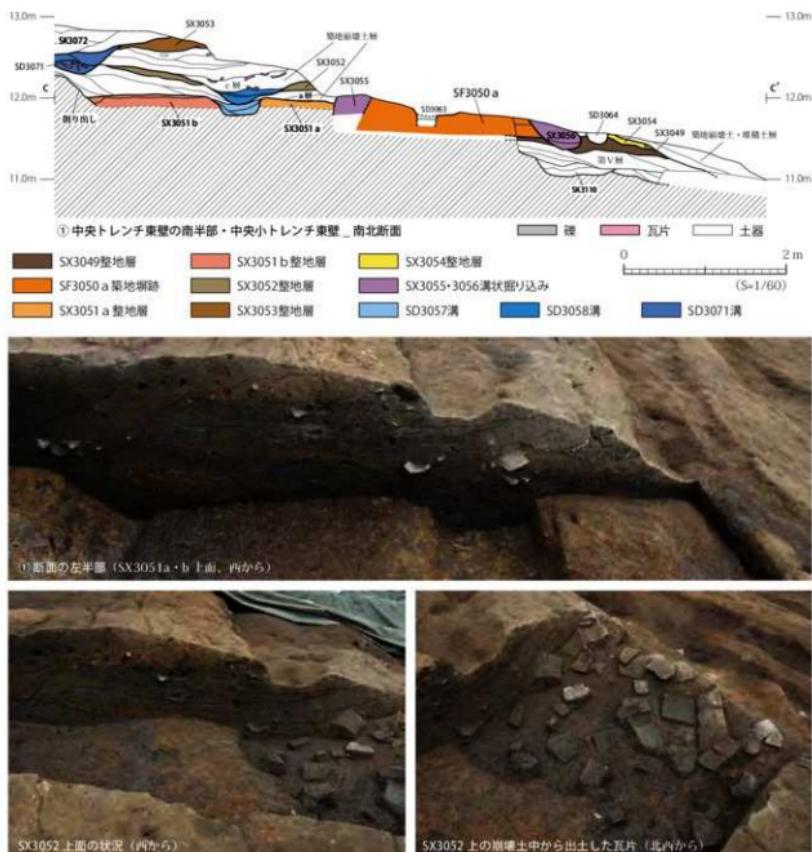


図版9 西壁トレシチ断面_SF3050 築地埋跡周辺

ら掘り込まれている。このような状況は下層にみられる整地層と溝の関係と共に通しており、同様に嵩上げに伴って新たに築成されたSF3050 d 築地壠跡の存在が想定される。SF3050 d が存在する場合、SD3071 の位置が SD3057・3058 よりも北へ 2.0 m 程移動していることから、築地本体もやや北側へはずれた位置に構築されていた可能性がある。

SX3053 は SX3052 上に残る築地崩壊土や堆積土層の上に明赤褐色土ブロック（近辺にはない地山土か？）と凝灰岩の小片を多量に含むにぶい赤褐色粘土質シルトを用いて盛土整地したもので、厚さ 0.1 ~ 0.2 m で残存する。

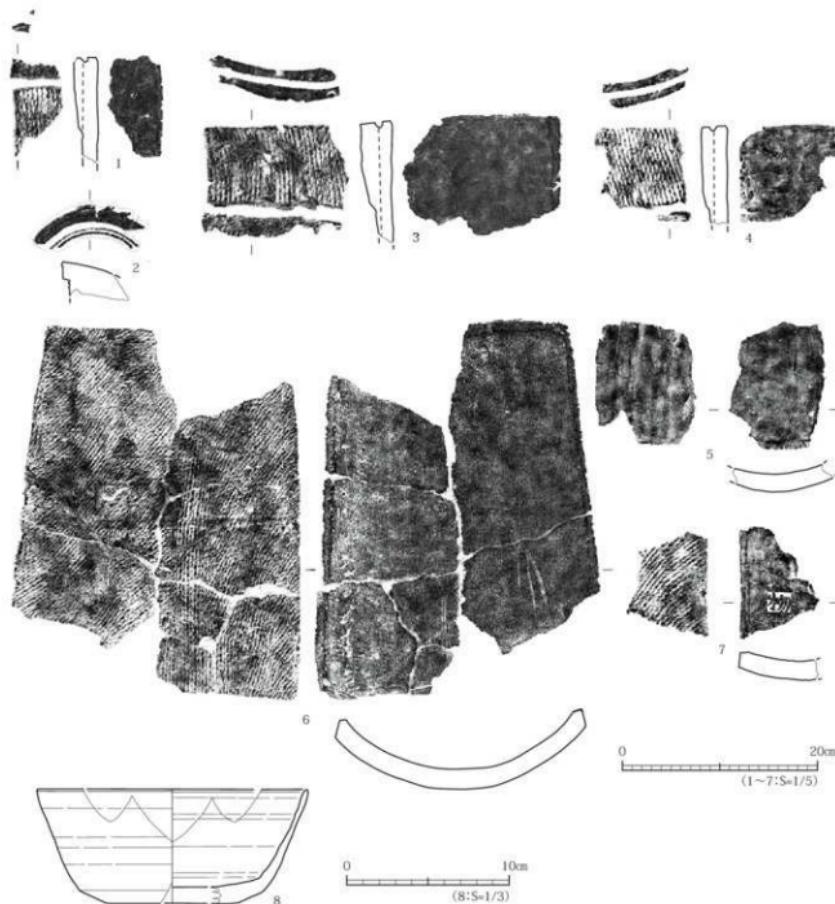
遺物は、SX3053 中から土師器環・甕、須恵器環・蓋・瓶・甕、丸瓦 II 類、平瓦 II B 類・II C 類が出土している。いずれも小破片で、図示できるものはない。



図版 10 中央・中央小トレンチ断面_SF3050 築地壠跡周辺

【SX3054 整地層】(図版6~8・10・11)

調査区南部でSF3050 築地壠跡の南側を嵩上げしたとみられる SX3054 整地層を検出した。SF3050 a を構築する際に削り出した面に残る築地壠土層の上を盛土整地したもので、SF3050 の南側で確認

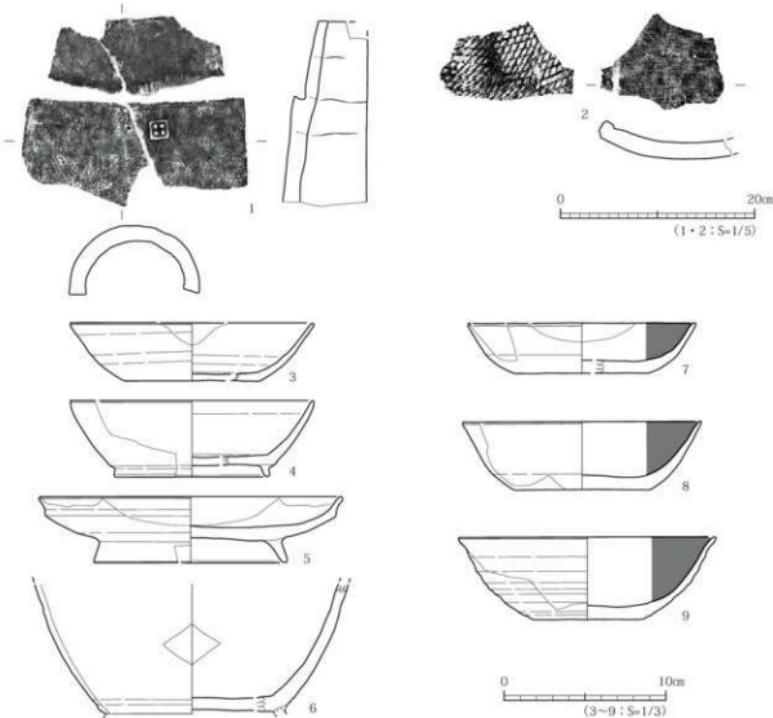


No.	出土遺構・層位	種類	船形	残存	長さ	幅 狭端	幅 広端	厚さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SX3054 上・崩壊土層	軒平瓦	直当破片	—	—	—	—	2.4	単弧文640-aタイプ	R.17	B15159	
2	SX3052 上・c層	軒丸瓦	直当破片	—	—	—	—	—	重腹文型面不明	R.8	B15159	
3	SX3052 上・c層	軒平瓦	直当破片	—	—	—	—	3.0	単弧文640-aタイプ	R.9	B15159	
4	SX3052 上・c層	軒平瓦	直当破片	—	—	—	—	2.6	単弧文640-aタイプ	R.10	B15159	
5	SX3052 上・c層	平瓦	破片	—	—	—	—	1.7	I A類-aタイプ	R.11	B15159	
6	SX3052 上・c層	平瓦	ほぼ完形	38.5	24.8	1.9	BB類-aタイプ1	—	—	R.13	B15159	
7	SX3052 上・c層	平瓦	破片	—	—	—	—	1.9	BB類-aタイプ1凹面広左側に削出「物」A	R.12	B15159	
No.	出土遺構・層位	種類	船形	残存	L径	底径	高さ		特徴	写真図版	登録	箱番号
8	SX3052 上・c層	圓底器 大型壺	1/3 (16.6)	(8.0)	7.1	底: ?→側面へラケツリ				R.18	B15159	

図版 11 SF3050 築地壠跡_崩壊土層出土遺物

できた整地層はこれのみである。SX3054については、SF3050との間がSX3056溝状掘り込みによつて壊され、本整地層より上がほとんど削平されていることから、どの時期の補修に帰属するかを特定できない。SX3056溝状掘り込み、SD3064溝より古く、SI3042住居跡、SK3110土壙、SD3048溝より新しい。

東西8.0m以上、南北1.5mの範囲に、厚さ0.05~0.25mで残存しており、東側ほど残りが良い。西壁トレーニチ内では未検出である。整地に用いられた土は明赤褐~明褐色土ブロック主体のにぶい褐色粘土質シルトで、土色・土質の特徴がSX3053整地層と類似しているが、凝灰岩の小片を含まない。



No.	出土遺構・位相	種類	残存	長さ	幅	厚さ	特徴	写真回数	登録番号
1	SX3052上・堆積土	丸瓦	1/3	—	—	—	1.5 BB類 凸面中央に刻印田/A	R-7	B15160
2	SX3052上・堆積土	平瓦	—	—	—	—	1.7 IC類+aタイプ 凸面格子印き目	R-14	B15160
3	SX3052上・堆積土	須恵器 环	1/2	(15.0)	89.30	3.6	—	R-20	B15160
4	SX3052上・堆積土	須恵器 高台环	1/4	(15.0)	89.41	4.7	底:斜正系切り	R-19	B15160
5	SX3052上・堆積土	須恵器 高台环	3/4	(18.6)	—	—	底部と皿底に墨付苔	32-1	B15160
6	SX3052上・堆積土	須恵器 瓢	1/4	—	(11.4)	—	外底に暗熱剥落、火炎が見しい。	R-68	B15160
7	SX3052上・堆積土	土師器 环	1/2	(14.0)	85.21	3.1	ロクロ調整 内面黒色処理	R-22	B15160
8	SX3052上・堆積土	土師器 瓢	1/2	(14.6)	88.41	4.2	ロクロ調整 内面黒色処理 底: ?→手持ちケズリ	R-21	B15160
9	SX3052上・堆積土	土師器 环	1/2	(15.8)	85.61	5.1	ロクロ調整 内面黒色処理 底: ?→手持ちケズリ	R-32	B15160

図版12 SF3050築地壠跡_SX3052上堆積層出土遺物

い点で異なり、現状で両者の上面には 1.0m 程の比高差がある (SX3054 の方が低い)。また、本整地層の西部には瓦片が比較的多く含まれていた (図版 7 の写真右下)。

SX3054 上面から南側の斜面下方にかけて明赤褐色～黄褐色土ブロックを多く含む褐～暗褐色シルト層が堆積しており、SF3050 築地本体の崩壊土層とみられるが、本整地層と同様にその帰属期を特定できない。

遺物は、SX3054 上から南側の斜面下方にかけて堆積する崩壊土層から土師器壺・甕、須恵器壺・甕、單弧文軒平瓦 640a タイプ (図版 11-1)、丸瓦 II 類、平瓦 I B 類・II B 類 a タイプ・II C 類が出土している。平瓦は II B 類 a タイプが主体で、土器はいずれも小破片である。

なお、SX3054 の層中に含まれる瓦は取り上げていない。

【SX3055 溝状掘り込み】(図版 6 ~ 10)

調査区南部で SF3050 a・b 築地壠跡に沿ってその北肩を壊すかたちで東西方向に延びる SX3055 溝状掘り込みを検出した。表土直下もしくは SD3062 溝を掘り上げた段階で平面プランを確認しており、さらに調査区の東西両側へ続く。各トレンチの断面観察によると、本遺構は少なくとも SX3052 整地層より上部から掘り込まれていたとみられ、底面は SF3050 a 築地本体の基底下まで及んでいる。また、掘方内を版築状に突き固めて埋め戻しているが、柱や材の痕跡は検出できなかった。いわゆる溝とは性格が異なる遺構と考えられるが、その性格については判然としない。SD3062 溝より古く、SF3050 a・b 築地壠跡、SX3049・3051 a・3052 整地層、SI3041 住居跡より新しい。なお、SF3050 a・b を挟んで対となる位置には築地本体の南肩を壊す同様の遺構 (SX3056 溝状掘り込み) が認められ、同時存在の可能性も考えられる。但し、両者の底面には 0.5 m 前後の比高差がある (SX3055 の方が高い)。

規模は、長さが 9.6 m 以上で、上端幅は 0.3 ~ 0.55 m、深さは 0.4 m 前後である。断面形はやや南側へ傾く「U」字状を呈し、断ち割りを実施した東・西壁トレンチでみると底面の標高は 11.7 m 前後で一定している。版築状の埋土は 10 ~ 20cm の厚さで層の違いが認められ、黄褐色シルトと暗褐色シルトを主体とする層が互層をなしている。

遺物は出土していない。

【SX3056 溝状掘り込み】(図版 6 ~ 10)

調査区南部で SF3050 a・b 築地壠跡に沿ってその南肩を壊すかたちで東西方向に延びる SX3056 溝状掘り込みを検出した。表土直下で平面プランを確認しており、さらに調査区の東西両側へ続く。各トレンチの断面観察によると、本遺構は少なくとも SX3054 整地層より上部から掘り込まれていたとみられ、底面は SF3050 a 築地本体の基底下まで及んでいる。また、掘方内を版築状に突き固めて埋め戻しているが、柱や材の痕跡は検出できず、その性格については判然としない。SF3050 a・b 築地壠跡、SX3049・3054 整地層、SI3042 住居跡、SK3110 土壙、SD3048 溝より新しい。なお、SF3050 a・b を挟んで対となる位置の SX3055 溝状掘り込みとの同時存在も考えられるが、両者の

底面には 0.5 m 前後の比高差がある (SX3056 の方が低い)。

規模は、長さが 9.6 m 以上で、上端幅は 0.35 ~ 0.9 m、深さは 0.4 ~ 0.5 m である。断面形はやや北側へ傾く「U」字状を呈し、断ち割りを実施した各トレンチでみると底面の標高は 11.2 m 前後で一定している。また、西壁トレンチの断面観察では、この掘り込みが 2 つ重なっているようにみえたが、平面ではその違いを捉えることができなかった。版築状の埋土は 10 ~ 25 cm の厚さで層の違いが認められ、黄褐色シルトと暗褐色シルトを主体とする層が互層をなしている。

遺物は出土していない。

【SD3057 溝】(図版 6 ~ 10)

調査区南部の東壁・中央・西壁トレンチ内で検出した東西方向の溝で、SF3050 a・b 築地本体に平行してその 1.0 m 程度北を東西方向に延びており、さらに調査区の東西両側へ続く。各トレンチの断面観察によると、本溝の壁は SX3051 a・b 整地層上面まで立ち上がっており、SF3050 b 築地堆跡に伴う内溝と考えられる。SX3053 整地層、SK3072 土壌、SD3058 溝より古く、SI3040・3041 住居跡より新しい。

規模は、長さが 9.6 m 以上で、上端幅は 0.6 m 前後、深さは 0.2 ~ 0.35 m である。断面形は「U」字形を呈し、底面の標高は概ね一定しているが、詳細にみれば中央トレンチで最も高く、東・西壁トレンチへ向かって僅かに傾斜する。堆積土は築地崩壊土とみられる黄褐色土や褐色土ブロックを含む暗褐色シルト層を主体としており、中央トレンチ内の溝下位には砂と粘土の薄い互層が認められた。

遺物は、堆積土から土師器环・甕、須恵器环・平瓦Ⅱ類が出土している。いずれも小破片で、図示できるものはない。

【SD3058 溝】(図版 6 ~ 8・10・13)

調査区南部で東壁・中央トレンチを SX3051 a・b 整地層上面まで掘り下げた際にトレンチ壁面で存在を確認した溝で、平面プランを捉えられていない。SD3057 溝とほぼ重なる位置を東西方向に延びているとみられ、SF3050 a・b 築地本体との距離は 0.8 m 程度である。本溝はさらに調査区東側へ続くが、西壁トレンチ内では未検出のため、西側への延びは判然としない。両トレンチの断面観察によると、本溝は SX3052 整地層上面から掘り込まれておらず、想定される SF3050 c 築地堆跡に伴う内溝と考えられる。SX3053 整地層、SK3072 土壌より古く、SI3040・3041 住居跡、SD3057 溝より新しい。

規模は、長さが 5.7 m 以上で、上端幅は 1.0 ~ 1.5 m、深さは 0.3 m 前後である。断面形は皿形を呈し、底面の標高はほぼ一定している。堆積土は築地崩壊土とみられる黄褐色土や褐色土ブロックを含む暗褐色シルト層を主体としている。中央トレンチ内の溝下位には砂と粘土がラミナ状に堆積しており、最上位の窪みは瓦片を多量に含む築地本体側からの崩壊土 (c 層) に覆われていた。

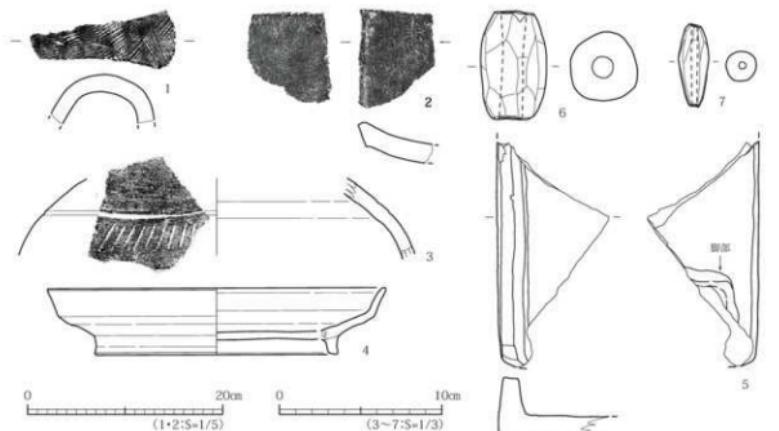
遺物は、堆積土から土師器环・甕、須恵器环・瓶 (図版 13-3)、丸瓦Ⅱ B 類 c タイプ (図版 13-1)、平瓦 I 類・II B 類が出土している。

【SD3071 溝】(図版 6・7・9・10・13)

調査区南部を東西方向に延びる溝で、西壁・中央トレンチ内で検出している。さらに調査区西側へ続くが、東壁トレンチ内では未検出のため、東側への延びは判然としない。いずれのトレンチでも溝上部を SK3072 土壌に大きく壊されているが、中央トレンチの断面観察(図版 10 の断面①)で SX3053 整地層上面からの掘り込みを確認しており、想定される SF3050 d 築地跡に伴う内溝と考えられる。SK3072 土壌より古い。

規模は、長さが 5.6 m 以上で、上端幅は 1.0 ~ 1.9 m、深さは 0.35 ~ 0.65 m である。断面形は外側に開いた「V」字状で、壁にはやや凹凸がみられ、底面は全体として西側へ強く傾斜している。堆積土は上下 2 層に大別され、上層は築地削壠土とみられる黄褐色土や褐色土ブロック、炭化物粒を含む暗褐~黒褐色のシルト層、下層は同様の黄褐色土や褐色土ブロックと土器・瓦片、礫を多量に含む黒褐色のシルトもしくは粘土質シルトである。下層の遺物は溝底面から離れた上位に集中する傾向がみられ、周辺部から一度に流入したかもしくは人為的に投入されたものの可能性がある。

上層から出土した遺物には、土師器環・甕、須恵器環・高杯・蓋・甕、丸瓦 II B 類、平瓦 I A 類 a タイプ(図版 13-2)・II B 類・II C 類、土錘(図版 13-6・7)がある。



No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	幅 狭端 広端	厚さ	特徴	写真図版	登録番号
1	SD3058・堆積土	丸瓦	破片	—	—	—	1.7 II B 類 c タイプ		R.37 B15160
2	SD3071・上層	平瓦	破片	—	—	—	2.0 I A 類 a タイプ		R.50 B15160
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録番号
3	SD3058・堆積土	須恵器 瓢	筒形破片	—	—	—	断面に列山文が認められる		R.36 B15160
4	SD3071・下層	須恵器 高台組	1/4	(11.8)	(14.9)	4.1			R.73 B15160
No.	出土遺構・層位	種類	残存	法量	厚さ		特徴	写真図版	登録番号
5	SD3071・下層	須恵器 風字紋	破面側面部	—	—	—	直線的な側面部	33-1	R.74 B15160
No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	直径	孔径	特徴	写真図版	登録番号
6	SD3071・上層	土錘	完形	6.7	4.0	1.3		33-2	R.71 B15160
7	SD3071・上層	土錘	完形	5.0	1.9	0.5		33-3	R.72 B15160

図版 13 SD3058・3071 溝_出土遺物

下層からは、土師器坏・甕、須恵器坏・高台皿（図版13－4）・甕、硯、丸瓦II B類・平瓦II B類・II C類が出土しており、遺物量が多い。硯は風字硯（図版13－5）で、大型のものである。

【SD3060溝】（図版6・8）

調査区南端部の東壁トレント内で検出した東西方向の溝で、SF3050 a・b築地本体に平行してその2.6m程南を東西に延びるとみられる。上部に堆積したSF3050南側崩壊土や堆積土層の掘り下げを実施していないため、東壁トレント以外ではその延びを捉えられていない。なお、西壁トレント内ではSD3060の続きを検出できていないが、想定される溝の位置には瓦集中層が存在し、これより下層の掘り下げを行っていないため、下層に本溝が存在する可能性は残る。東壁トレントの断面観察（図版8の断面①）では、北壁は第VII層上面から、南壁は第VI層上面から掘り込まれている。SD3067溝より古い。

規模は、長さが0.8m以上で、上端幅は約2.1m、深さは0.8m程である。断面形は外側に開いた「V」字状で、南壁に軽い段が付く。堆積土はこの段を境に上下2層に大別されることから、上層下の段階で溝が一度浸透している可能性がある。上層は炭化物粒や築地崩壊土とみられる黄褐色土ブロックを含む褐灰～暗褐色の粘土質シルト層で、瓦片の含有量が多い。下層は築地崩壊土とみられる黄褐色土や黒褐色土の大ブロックを多く含む褐色粘土質シルト層である。

遺物は、トレント断面で瓦片が上下層に含まれることを確認したが、取り上げは行っていない。

ii. 掘立柱建物跡と柱穴列跡

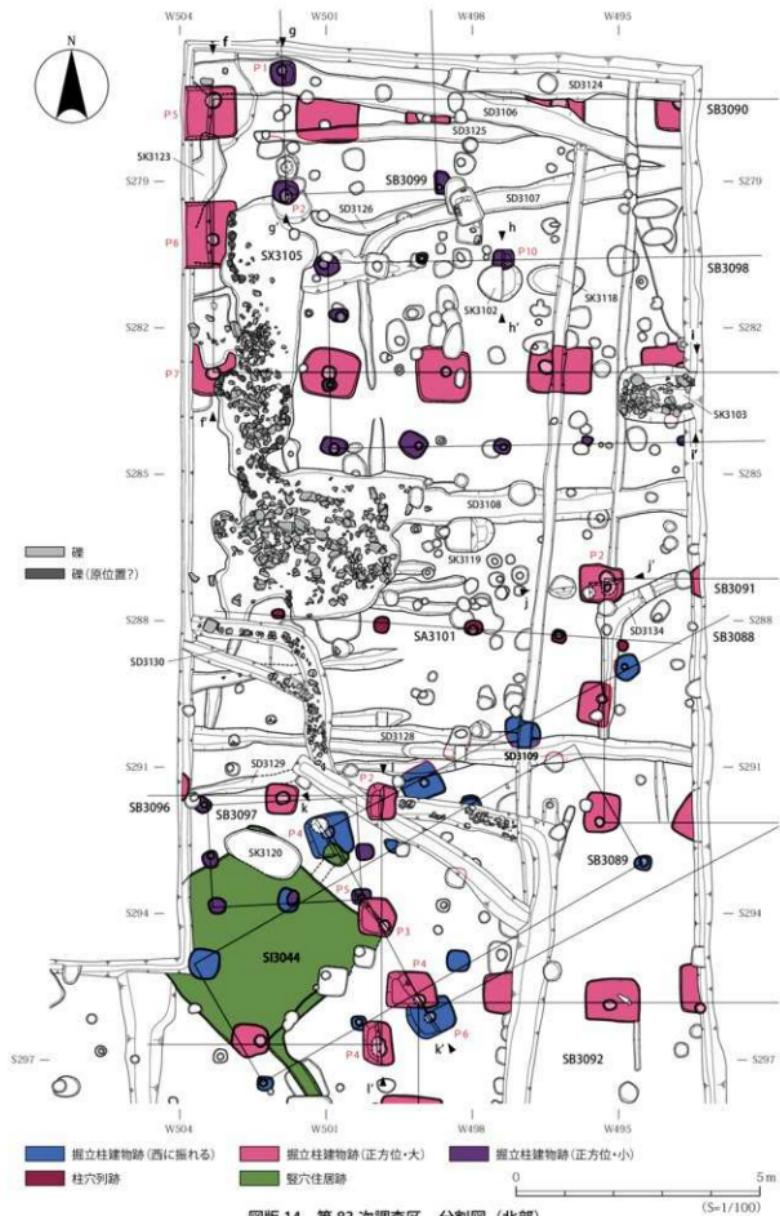
【SB3088建物跡】（図版15・17・20）

調査区中央のやや北寄りに位置する東西3間以上、南北2間の東西棟とみられる掘立柱建物跡である。西妻の両端と北側柱列の柱穴計5個を地山面で検出している。西妻中央の柱穴はSB3096建物跡の柱穴掘方に壊されて残存しないと考えられる。また、隅柱を除く北側柱列の柱穴の残りが悪いことから上部の削平が著しいとみられ、この削平により南側柱列の柱穴は失われた可能性がある。建物の方向は、北側柱列でみると発掘基準線に対し、西で約28°南に偏している。SB3089・3092・3096・3097建物跡、SI3044住居跡、SD3109・3128・3129・3134溝より古い。SB3091建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

北側柱列の西から2間目以外の柱穴で柱痕跡を確認している。桁行については、北側柱列で総長7.0m以上、柱間は西より2.3m・(2.2m)・(2.5m)である。梁行については、西妻で総長4.3m、柱間は北より(2.0m)・(2.3m)である。桁・梁行とも柱間間に多少のばらつきがみられる。

柱穴は一辺0.8～0.9mの方形を基調とするが、特に残りの悪い北側柱列の西から2・3間目の柱穴は不整形で規模もやや小さくなっている。壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴(P4・6)でみると、深さは0.2m前後で、埋土は黄褐色砂質シルトや褐色シルトである。柱痕跡は直径0.2m前後の円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器坏・甕、中世陶器甕の小破片が出土している。中世陶器甕は柱穴



最上部の浅い窪みに溜まった堆積層から出土しており、後世の遺物が混入したものと考えられる。

【SB3089 建物跡】(図版 15・17・20)

調査区中央のやや北寄りに位置する東西 4 間、南北 1 間の東西棟掘立柱建物跡である。新しい暗渠溝と SD3109 溝に壊されたと考えられる柱穴（南側柱列の西から 3 間目と北東隅）を除く計 9 個の柱穴を検出している。確認面は SI3044 住居跡の堆積土上面もしくは地山面である。建物の方向は、南側柱列でみると発掘基準線に対し、西で約 30° 南に偏している。SB3096・3097 建物跡、SD3109 溝より古く、SB3088 建物跡、SI3044 住居跡より新しい。SB3091・3092 建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

南側柱列の両端と西から 1 間目の柱穴で柱痕跡を確認している。これ以外の柱穴はやや規模が大きく、形状が不整なものもみられることから、柱抜取穴の可能性がある。検出した柱痕跡を基に規模を推定すると、桁行については、南側柱列で総長 9.0 m、柱間は西より 2.3 m・(2.4 m)・(2.0 m)・(2.3 m) である。梁行については、西妻で総長・柱間ともに 2.8 m 前後とみられる。

柱穴は一辺 0.3 ~ 0.6 m の方形を基調とするが、柱痕跡を確認した柱穴の規模は一辺 0.3 ~ 0.4 m である。深さや埋土の状況は断ち割りを実施していないため不明である。柱痕跡は直径 0.15 m 程の円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器環、須恵器環・甕の小破片が出土している。

【SB3090 建物跡】(図版 14・17・20)

調査区北端部に位置する東西 4 間以上、南北 2 間の東西棟掘立柱建物跡である。西妻と北・南側柱列の柱穴計 11 個を地山面で検出しており、建物はさらに東側へ延びている。建物の方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。SB3098 建物跡、SX3105 集石遺構、SK3102・3103・3123 土壙、SD3106・3107・3124・3125 溝より古い。SB3099 建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

柱穴は良好に残存しており、そのうちの大半（北側柱列の西から 1・2 間目以外）で柱痕跡を確認している。桁行については、南側柱列で総長 9.6 m 以上、柱間は西より 2.4 m・2.4 m・2.1 m・2.7 m である。梁行については、西妻で総長 5.6 m、柱間は 2.8 m 等間である。桁行の柱間隔に多少のばらつきがみられる。

柱穴は一辺 1.1 ~ 1.3 m の方形または長方形の比較的大きなもので、壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴（P 5・6）でみると、深さは 0.6 ~ 0.8 m あり、埋土は黄褐色砂質シルトと暗褐～黒褐色シルトの互層で、丁寧に突き固められている。柱痕跡は直径 0.25 ~ 0.35 m の円形を呈し、その痕跡中の上部には焼土粒が含まれる。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器環・甕、須恵器環の小破片が出土している。

【SB3091 建物跡】(図版 14・17・20)

調査区北部の南東寄りに位置する東西 1 間以上、南北 2 間の東西棟とみられる掘立柱建物跡である。



図版 15 第 83 次調査区_分割図（中央部東）

西・北・南側の柱列の柱穴計5個を地山面で検出しており、建物はさらに東側へ延びている。建物の方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。SD3109・3134溝より古い。SB3088建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

西側の柱列で柱痕跡を確認しており、断ち割りを行ったP2の柱穴上部には柱抜取痕が認められる。西側の柱列の柱間は2.5m等間で、総長は5.0mとなる。北・南側柱列の柱間は2.2m前後とみられる。

柱穴は一辺0.8～1.0mの方形または長方形を呈し、壁はほぼ垂直に掘られている。P2でみると、深さは0.45mで、埋土は地山ブロックを多量に含む褐色シルトである。柱痕跡は直径0.2m前後の円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器環・甕、須恵器甕、縁軸陶器碗、鉄滓が出土している。土器はいずれも小破片で、図示できるものはない。

【SB3092 建物跡】(図版15・17)

調査区中央部の北東寄りに位置する東西3間以上、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。西妻と北・南側柱列の柱穴計9個を地山面で検出しており、建物はさらに東側へ延びている。建物の方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。SB3088建物跡より新しい。SB3094建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

柱穴は良好に残存しており、そのうちの大半（北側柱列の西から1・3間目以外）で柱痕跡を確認している。桁行については、南側柱列で総長5.8m以上、柱間は西より2.0m・1.9m・1.9mである。梁行については、西妻で総長4.9m、柱間は北より2.3m・2.6mである。

柱穴は一辺0.9～1.2mの方形または長方形の比較的大きなもので、壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴（P4）でみると、深さは0.9mで、埋土は締まりが強く地山上に近い黄褐色シルトである。柱痕跡は直径0.2～0.25mの円形を呈し、その痕跡中の上部には焼土粒が含まれる。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器環・甕、須恵器環・蓋・甕の小破片が出土している。

【SB3093 建物跡】(図版16・18)

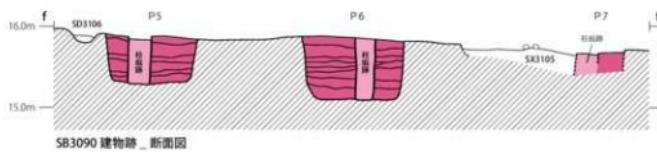
調査区中央部の北西寄りに位置する東西1間以上、南北2間の東西棟とみられる掘立柱建物跡である。東・北・南側の柱列の柱穴計5個をSI3045住居跡、SK3046・3073・3074・3079土壌の堆積土上面で検出しており、建物はさらに西側へ延びると推定されるが、南側柱列の柱穴（P5）は平面プランを明確に捉えられていない。東側の柱列が北から2間目で西へ折り返さず、さらに南へ1間延びる（P6まで）可能性も残るが、その先の展開が判然としないことから南北2間の建物と考えておきたい。建物の方向は、東側の柱列でみると発掘基準線に対し、北で約1°西に偏している。SB3095建物跡より古く、SI3045住居跡、SK3046・3073・3074・3079土壌、SD3080溝より新しい。

北東隅の柱穴とそこから西・南へ1間目の柱穴で柱痕跡または柱押圧痕を確認した。東側の柱列では柱間が1.9mで、総長は3.8mになると推定される。北側柱列の柱間は1.8mである。

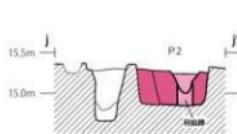
柱穴は一辺0.9～1.1mの方形または長方形を呈し、壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱



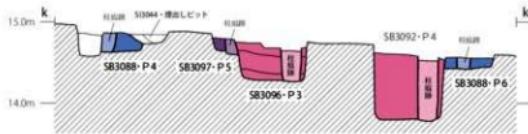
図版 16 第 83 次調査区_分割図（中央部西）



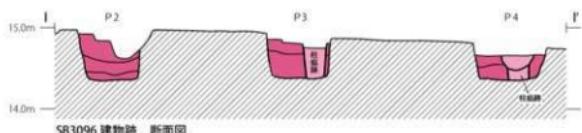
SB3090 建物跡_断面図



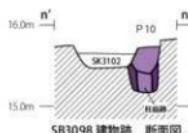
SB3091 建物跡_断面図



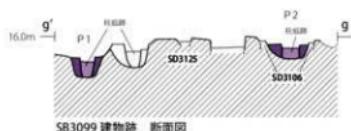
SB3088・3092・3096・3097 建物跡 断面図



SB3096 建物跡_断面図



SB3098 建物跡 断面図



SB3099 建物跡 - 断面図

※ 西に振れる建物	-----		掘方埋土		柱痕跡、柱切、抜取痕
※ 正方位・大の建物	-----		掘方埋土		柱痕跡、柱切、抜取痕
※ 正方位・小の建物	-----		掘方埋土		柱痕跡、柱切、抜取痕



SB3090 • P.5 (7/03/01)



SB3090・P6 (西から)



九



SB3088-P4 (10/25)



SB3097・P5 と SB3096・P3 (南西から)



583097・P4 と 583088・P6



SR2006 - R1



ER3000 - R1 2014-5



SB2001-B2-145-2

図版 17 SB3088・3090～3092・3096・3097・3099 建物跡 断面

穴（P 3）でみると、深さは 0.3 m で、上部の削平が著しいと考えられる。埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色の砂質シルトである。柱痕跡は直径 0.3 m 前後の円形を呈する。P 3 では柱抜取痕が底部まで及び、底面に柱押圧痕が残る。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器環・甕、須恵器環・甕、丸瓦 II 類、平瓦 II C 類、鉄釘が出土している。いずれも破片で、図示できるものはない。

【SB3094 建物跡】（図版 18・19）

調査区中央部に位置する東西 5 間、南北 2 間の東西棟掘立柱建物跡である。全ての柱穴を検出しておらず、確認面は SI3043 住居跡、SK3075・3076・3077・3087 土壌の堆積土上面もしくは第IV層上面、地山面である。建物の方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。SB3095 建物跡、SK3078 土壌より古く、SI3043 住居跡、SK3074・3075・3076・3077・3087 土壌より新しい。SB3092 建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

ほとんどの柱穴で柱抜取痕を確認しており、柱穴自体が SB3095 の柱穴掘方に墳されているものもある。柱穴下部に残る柱痕跡や柱抜取痕の位置から規模を推定すると、桁行については、南側柱列で総長約 12.4 m、柱間は西より (2.6 m)・(2.5 m)・(2.5 m)・(2.4 m)・(2.4 m) である。梁行については、東妻で総長 4.7 m、柱間は北より 2.4 m・2.3 m である。

柱穴は一辺 0.8 ~ 1.3 m の方形または長方形を基調としており、一辺 0.8 ~ 0.9 m のものが多い。壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴（P 6~8）でみると、深さは 0.5 ~ 0.6 m あり、埋土は黄褐色粘土質シルトや地山ブロックを含む暗褐～黒褐色シルトで、2 ~ 3 層に突き固められているがさほど丁寧ではない。柱穴下部に残る柱痕跡は直径 0.2 m 前後の円形を呈する。

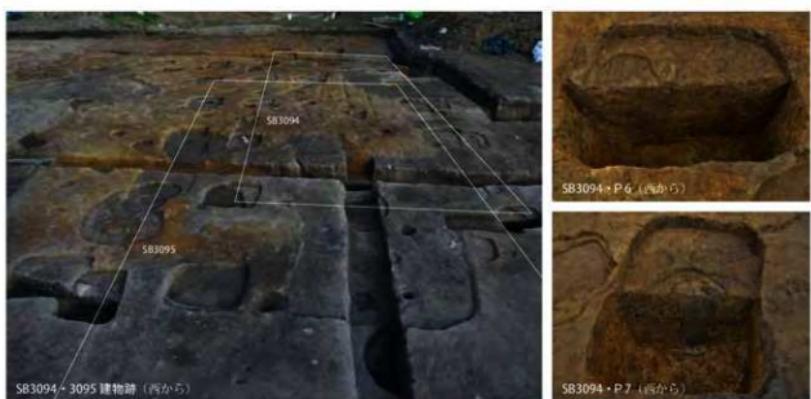
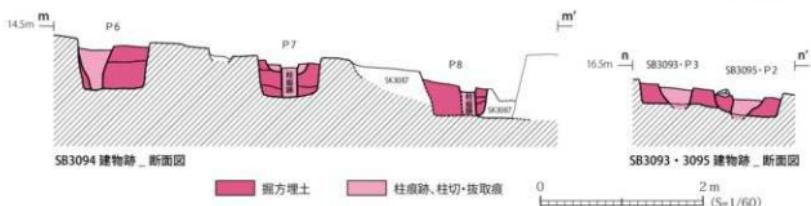
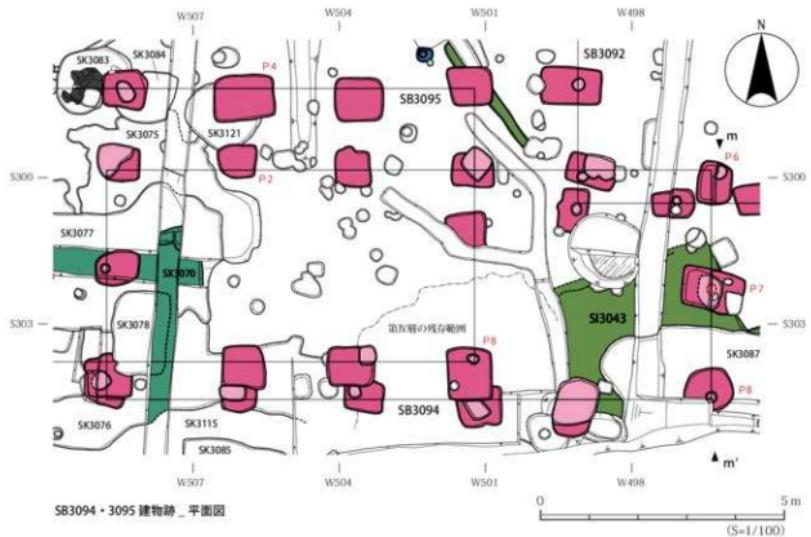
遺物は、柱抜取痕中から土師器甕、須恵器環・甕、丸瓦 II 類、平瓦 II B 類の破片が出土している。

また、柱穴の確認段階で土師器環・耳皿（図版 19-1）・甕、須恵器環・蓋・瓶・甕、平瓦 II B 類、II C 類が出土している。土師器耳皿の底部内面には焼成後に刻書された「介」の文字が認められる。

【SB3095 建物跡】（図版 18・19）

調査区中央部に位置する東西 5 間、南北 2 間の東西棟掘立柱建物跡である。西壁トレチの掘削により失われたとみられる西妻の柱穴 2 個（北から 1 間目と南西隅）と南側柱列の西から 1 間目以外の柱穴計 11 個を検出している。本建物では、北・南側柱列両端の柱穴（四隅の柱穴）の位置が他の柱穴よりやや外側へずれる特徴が看取され、この特徴から西妻の柱穴 2 個を欠くものの、東西 5 間の建物と判断した。確認面は SK3073・3074・3076・3083・3084・3121 土壌の堆積土上面もしくは、第IV層上面、地山面である。建物の方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。SK3078 土壌より古く、SB3094 建物跡、SI3044 住居跡、SK3073・3074・3075・3076・3077・3083・3084・3121 土壌、SD3080 溝より新しい。

5 個の柱穴で柱抜取痕もしくは柱痕跡を確認しているが、残りの柱穴ではこれらを明確に捉えることができず、柱穴全体に抜取痕が及んでいる可能性もある。柱抜取痕の位置を参考に規模を推定する



図版 18 SB3093~3095 建物跡

と、桁行については、北側柱列で総長約 12.0 m、柱間はおよそ 2.4 m 等間である。梁行については、東妻で総長約 5.6 m、柱間はおよそ 2.8 m 等間となる。

柱穴は一辺 0.9 ~ 1.2 m の方形または長方形を基調としており、一辺 1.0 m 前後のものが多い。壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴 (P 1・2) でみると、深さは 0.3 ~ 0.35 m で、上部の削平が著しいと考えられる。埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色や黒褐色のシルトである。柱穴に柱痕跡が残存するものはほとんど認められないが、掘方底面に残る柱押圧痕から柱の径は 0.2 m 程度であったと推定される。

遺物は、柱抜取痕中から土師器環・甕、須恵器環・蓋・甕の小破片が出土している。

また、柱穴の確認段階で土師器環・甕、須恵器環 (図版 19-2)・稜塊・甕、丸瓦、平瓦 I A 類・II B 類、鉄釘 (図版 19-3) が出土している。

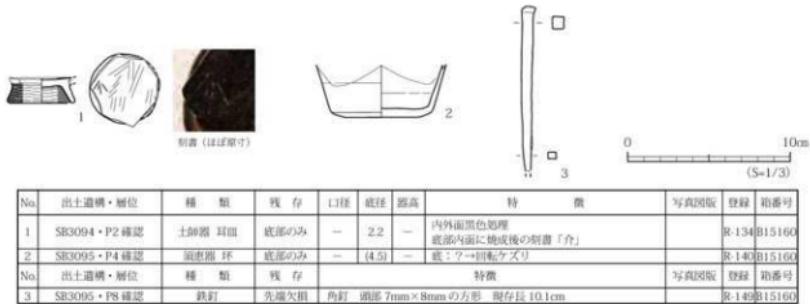
【SB3096 建物跡】(図版 15・17・20)

調査区北部の南西寄りに位置する東西 2 間以上、南北 2 間の東西棟とみられる掘立柱建物跡である。東・北・南側の柱列の柱穴計 6 個を SI3044 住居跡の堆積土上面もしくは地山面で検出しておらず、建物はさらに西側へ延びると考えられるが、調査区内に位置する南側柱列では東から 1 間目以降の柱穴を捉えることができなかった。建物の方向は、ほぼ発掘基準線に一致する。SB3088・3089・3097 建物跡、SI3044 住居跡より新しい。

北東隅とそこから西へ 2 間目以外の柱穴で柱痕跡を確認しており、断ち割りを行った P 4 の柱穴上部には柱抜取痕が認められる。東側の柱列は総長約 5.1 m で、柱間は北より (2.6 m)・2.5 m となる。北・南側柱列の柱間は 2.1 ~ 2.5 m とみられ、間に多少のばらつきがある。

柱穴は一辺 0.7 ~ 0.9 m の方形または長方形を呈し、壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴 (P 2~4) でみると、深さは 0.45 ~ 0.6 m で、柱穴底面の標高が 14.4 m 前後でほぼ一定している。埋土は褐色砂質シルトや地山ブロックを含む褐灰~黒褐色シルトで、2~3 層に突き固められているがさほど丁寧ではない。柱痕跡は直径 0.25 m 前後の円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器環・甕、須恵器環・蓋、平瓦 II C 類の破片が出土している。



図版 19 SB3094・3095 建物跡_出土遺物

【SB3097 建物跡】(図版 15・17・20)

調査区北部の南西寄りに位置する東西2間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。新しい暗渠溝とSB3096 建物跡の柱穴掘方によって壊されたとみられる北東隅とそこから西へ1間目の柱穴を除く計6個の柱穴を検出している。確認面はSI3044 住居跡の堆積土上面もしくは地山面である。建物の方向は、南側柱列でみると発掘基準線に対し、西で約3°南に偏している。SB3096 建物跡より古く、SB3088・3089 建物跡、SI3044 住居跡より新しい。

3個の柱穴で柱痕跡を確認しているが、残りの柱穴では柱痕跡を明確に捉えることができず、柱穴全体に柱抜取痕が及んでいる可能性もある。確認した柱痕跡の位置を基に規模を推定すると、桁行については、南側柱列で総長約3.2m、柱間はおよそ1.6m等間である。梁行については、西妻で総長約2.1m、柱間はおよそ1.05m等間となる。

柱穴は一辺0.3～0.4mの方形を基調とし、壁はほぼ垂直に掘られている。断ち割った柱穴(P5)でみると、深さは0.2mで、埋土は暗褐色砂質シルトである。柱痕跡は直径0.15m前後の円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器坏・甕、須恵器坏・甕、瓦の小破片が出土している。

【SB3098 建物跡】(図版 14・17・20)

調査区北部に位置する東西4間以上、南北3間の東西棟掘立柱建物跡である。西妻と北・南側柱列の柱穴計10個（北側柱列の西から3・4間目は未検出）をSB3090 建物跡の柱穴埋土上面もしくは地山面で検出しており、建物はさらに東側へ延びると考えられる。建物の方向は、南側柱列でみると発掘基準線に対し、西で約1°南に偏している。SK3102 土壙より古く、SB3090 建物跡より新しい。

検出した柱穴の大半（南側柱列の西から3・4間目以外）で柱痕跡を確認しており、断ち割りを行ったP10の柱穴上部には掘方



図版 20 調査区北部の建物群_写真

全体に及ぶ柱抜取痕が認められる。桁行については、南側柱列で総長7.1m以上、柱間は西より1.8m・1.7m・(1.7m)・(1.9m)である。梁行については、西妻で総長3.8m、柱間は北より1.1m・1.4m・1.3mである。桁・梁行とも柱間間隔に多少のばらつきがみられる。

柱穴は一辺0.25～0.6mの隅丸方形または長方形を基調としており、柱穴の大きさにもばらつきがみられる。壁はほぼ垂直に掘られている。P10でみると、深さは0.65mで、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径0.2m前後の円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器壺の小破片が出土している。

【SB3099 建物跡】(図版14・17・20)

調査区北端部に位置する南北1間以上、東西1間の南北棟とみられる掘立柱建物跡である。南・西側の柱列の柱穴計3個（東側の柱列の南から1間目は未検出）をSD3106溝の堆積土上面もしくは地山面で検出しており、建物はさらに北側へ延びると考えられる。建物の方向は、西側の柱列でみると発掘基準線に対し、北で約2°西に偏している。SD3106・3124・3125溝より新しい。SB3099建物跡とも重複するが、切り合い関係は認められない。

検出した柱穴の全てで柱痕跡を確認しており、西側の柱列の柱間は2.5m、南側の柱列の柱間は3.1mである。

柱穴は一辺0.5m程の隅丸方形または長方形を呈し、壁は外側へやや開いて立ち上がる。断ち割った柱穴(P1・2)でみると、深さは0.3～0.45mで、埋土は暗褐色シルトである。柱痕跡は直径0.15～0.2mの円形を呈する。

遺物は、柱穴の確認段階で土師器壺・甕、須恵器壺・甕、丸瓦II B類、平瓦II B類・II C類の破片が出土している。

【SA3101 柱穴列跡】(図版14・20)

調査区北部に位置する東西方向4間以上の柱穴列跡である。確認面は地山面で、さらに東西へ延びる可能性がある。柱穴列の方向は、発掘基準線に対し、西で約4°北に偏している。2個の柱穴で柱痕跡を確認しており、これを基に規模を推定すると、柱間は東より(1.4m)・1.8m・(1.9m)・(2.1m)で、総長は7.2m以上とみられる。柱穴は一辺0.25～0.4mの隅丸方形または長方形を呈し、柱痕跡は直径0.15～0.2mの円形である。柱穴の深さや埋土の状況は断ち割りを実施していないため不明である。

遺物は出土していない。

iii. 積穴住居跡

【SI3040 住居跡】(図版6・8・21)

調査区南部の東壁トレーニング内で積穴住居の北壁とみられる掘り込みと床、周溝を検出した。確認面は地山面で、住居南側の大半がSI3041住居跡によって壊されており、北壁から0.7m程が残る。

SX3051 a・3051 b・3053 整地層、SD3057・3058・3062 溝、SK3072 土壌より古い。

地山を壁としており、壁は床面から外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は0.4m程で、壁の直下には上幅0.2m前後の周溝が認められる。また、粘土層の地山を床としており、床面はほぼ平坦である。堆積土は主に炭化物粒を含む黒褐色シルト層で、床面直上にはカキを中心とした薄い貝層が分布していた。

貝類以外の遺物は出土していない。

【SI3041 住居跡】(図版6・8・21・22)

調査区南部の東壁トレチ内で検出した。東壁トレチは本住居を約1.0m幅で南北に縦断しており、住居北壁と床、カマドが捉えられた。住居南部はSD3048溝によって壊されて残存せず、北壁から2.8m程の範囲が残る。SI3040 住居跡と一緒に床面近くまで掘り下げた段階で両者が重複していることを確認したが、本来、本住居の北壁はSI3040の堆積土上面から掘り込まれている。SF3050 a・b 築地跡、SX3051 a・3052 整地層、SX3055 溝状掘り込み、SD3048・3057・3058・3062 溝より古く、SI3040 住居跡より新しい。

残存する北壁の壁高は0.35mで、床面から外側へやや開き気味に立ち上がる。また、粘土層の地山を床としており、床面は多少の凹凸をもちらん南側へ緩やかに傾斜している。カマドは燃焼部と煙道からなる。燃焼部側壁は灰黄色粘土質シルトを積み上げて構築されており、その左焚き口部には芯材として用いられたと考えられる土師器窯(図版22-1)の体下半部が残る。燃焼部底面では使用による明瞭な赤変は認められなかったが、直上に薄い灰層が堆積しており、原位置をとどめていないものの石製支脚も検出された。煙道は先端に向かってほぼ水平に延び、長さ1.1m、幅0.25m程である。

堆積土は3層に大別され、1層は炭化物粒を含む黒褐色シルト層

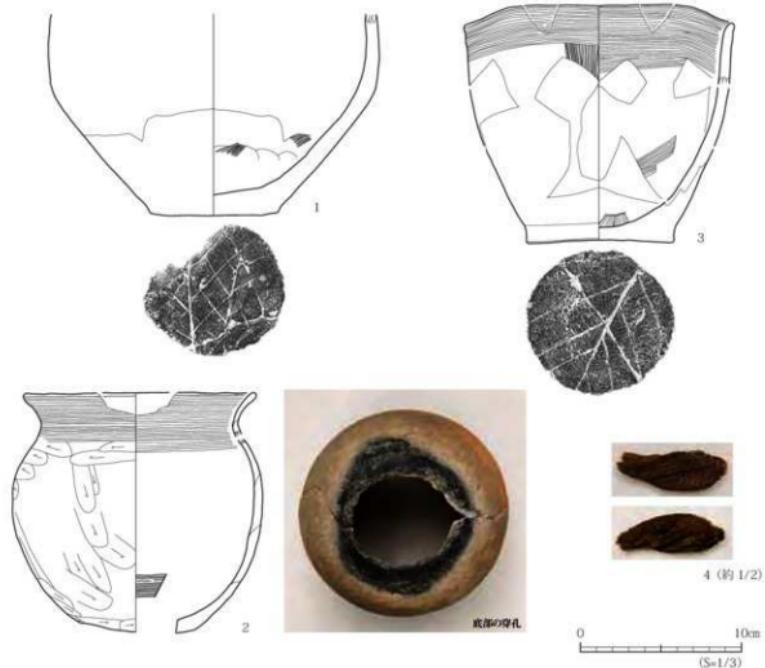


図版21 SI3040・3041 住居跡_写真

で、住居中央部を中心に分布する自然流入土である。2層は地山ブロックを多く含む暗褐～黒褐色シルト層で、床面を覆うかたちで分布し、中央部は薄く、壁寄りで厚くなっている。人為的な堆積土とみられるが、屋根の葺き土や周堤の一部が崩落したものの可能性もある。3層は煙道内に堆積した暗褐～黒褐色シルト層で、上位に一部が赤変した地山ブロック、下位に焼土・炭化物粒が多く含まれる。

遺物は、カマド燃焼部左側壁の芯材として用いられた土師器甕（図版22-1）があり、カマド焚き口部の床面からは完形に近い胴張形の土師器甕（図版22-2）と鉢形の土師器甕（図版22-3）が出土している。胴張形の甕の底部は穿孔されていた。

また、堆積土1層から土師器坏、須恵器坏の小破片と漆の滤し布（図版22-4）が出土している。



No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録	番号
1	SI3041・カマド左袖中	土師器 甕	体下平部	—	(8.0)	—	内面：ハケ目 底部：木葉痕 加熱を受け黒色化 外面：ケズリ 内面：ハケ目→内外共に口縁付近ヨコナデ 底部に穿孔	R-3	B15161	
2	SI3041・床面	土師器 甕	ほぼ完形	(14.2)	(7.0)	(14.9)		33-5	R-1	B15161
3	SI3041・床面	土師器 甕	2/3	(16.0)	(9.0)	14.7	外縁？切目 内面：ハケ目→内外共に口縁付近ヨコナデ 底部：木葉痕 炭化物付着	33-6	R-2	B15161
No.	出土遺構・層位	種類	残存				特徴	写真図版	登録	番号
4	SI3041・1層	漆漉し布	破片	現存長	4.8cm				R-4	B15161

図版22 SI3041 住居跡_出土遺物

【SI3042 住居跡】（図版6）

調査区南部の西小トレンチ内で竪穴住居の西壁とみられる掘り込みと床、周溝を検出した。確認面は地山面で、上部は第V層に覆われていた。SF3050 a 築地壈跡、SX3049・3054 整地層、SX3056 溝状掘り込み、SD3064 溝より古い。

地山を壁としており、壁は床面から外側へやや開き気味に立ち上がる。壁高は0.3m程で、壁の直下には上幅0.1～0.15mの周溝が認められる。また、地山粘土ブロックを主体としたにぶい黄褐色粘土質シルトの掘方埋土を床としており、床面はほぼ平坦である。堆積土は地山粘土の大ブロックを多く含む黒褐色シルト層で、人為的に埋め戻されていると考えられる。

遺物は出土していない。

【SI3043 住居跡】（図版15）

調査区中央部の南東寄りに位置する。確認面は地山面で、住居南半部がSK3087 土壌に壊されている。平面形は東西3.7m以上×南北2.1m以上の方形を基調としており、方向は、東辺でみると発掘基準線に対し、北で約24°西に偏している。SB3094 建物跡、SK3087 土壌より古い。第IV層との前後関係は、重複部が新しい暗渠溝に壊されて判然としない。

本住居の断面をそのほぼ中央を南北方向に縦断する新しい暗渠溝の壁面で観察すると、上部が著しく削平されており、堆積土は残存しない。北辺では上幅0.15～0.3m、深さ0.2m程の周溝が認められ、その断面は住居外側へ向かって斜めに抉り込まれた形状を呈する。周溝堆積土は綿まりのない黒褐色砂質シルトで、壁材の抜取痕（溝）の可能性がある。また、地山粒を縞状に含む黒褐色砂質シルトの掘方埋土を床としていたとみられ、東辺の中央付近ではカマドの煙道とみられる長さ1.4m、幅0.5m程の溝を確認している。

遺物は出土していない。

【SI3044 住居跡】（図版15）

調査区中央部の北寄りに位置する。確認面は地山面で、住居北西隅が調査区外へ及ぶ。平面形は東西3.7m×南北3.7mの方形を呈し、方向は、西辺でみると発掘基準線に対し、北で約43°西に偏している。SB3089・3095・3096・3097 建物跡、SK3120 土壌より古く、SB3088 建物跡より新しい。

掘り下げを実施していないため詳細は不明であるが、地山を壁としており、削平が著しい南辺では壁に沿って延びる上幅0.15～0.2mの周溝が観察できる。この周溝は住居南西隅から南東方向に延びる長さ約3.4m、上幅0.2～0.3mの外延溝と接続している。掘方埋土を床としていたとみられ、南辺の壁際を除く住居内には暗褐～黒褐色の堆積土が残存する。また、住居東辺中央から外側へ0.5m程離れた位置で長軸0.5mの不整な梢円形を呈するピットを検出している。深さは0.15mで、堆積土に炭化物粒が多く含まれる。このピットは、位置や堆積土の状況からカマドの煙出しピットと考えられ、東辺中央にカマドが付設されていることが窺われる。

遺物は出土していない。

【SI3045 住居跡】(図版 16)

調査区中央部の北西寄りに位置する。確認面は地山面で、住居南部が調査区にかかる。平面形は東西約 4.3 m × 南北 2.5 m 以上の方形を基調としており、方向は、南辺でみると発掘基準線に対し、西で約 32° 南に偏している。SB3093・3095 建物跡、SK3046・3079・3083 土壌、SD3080 溝より古い。

掘り下げを実施していないため詳細は不明であるが、地山を壁としており、削平が著しい南辺では壁に沿って延びる上幅 0.1 ~ 0.15 m の周溝が観察できる。また、この周溝上面では壁柱穴の可能性がある径 0.2 ~ 0.3 m のビット 2 個を確認している。地山ブロックを主体としたにぶい黄褐色シルトの掘方埋土を床としており、調査区北壁際には床面直上に堆積した炭化物粒を多く含む黒褐色シルト層が残存する。

遺物は出土していない。

iv. 竪穴遺構

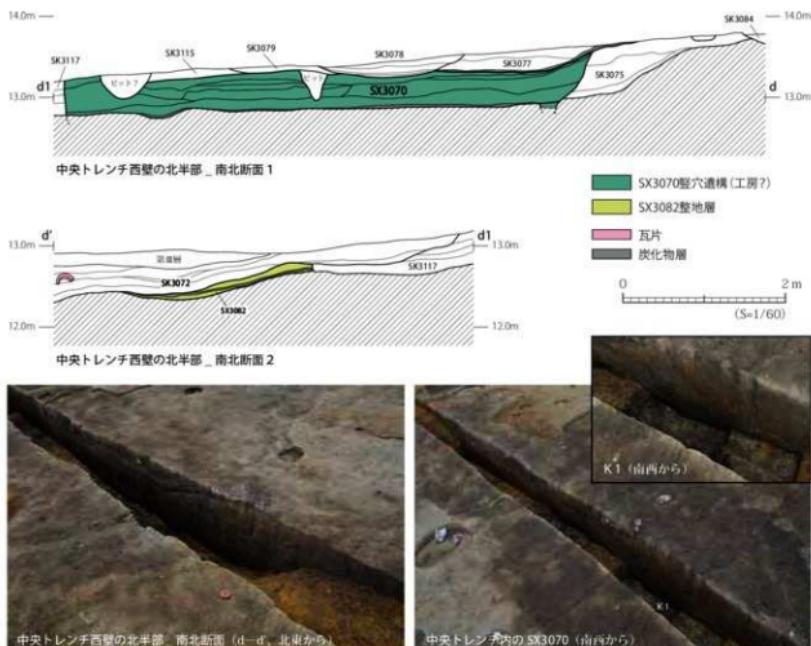
【SX3070 竪穴遺構】(図版 16・23 ~ 25)

調査区中央部の西寄りに位置する竪穴遺構で、主に中央トレンチ内で確認している。竪穴住居としたものに比べ規模が大きく、床面が炭化物の薄層に覆われ、埋土から鉄滓（椀型滓）が出土していることなどから鍛冶工房跡の可能性が考えられる。中央トレンチは本竪穴遺構を約 0.5 m 幅で南北に縦断しており、南北の壁と床、周溝、床面から掘り込まれたビット（K 1）が捉えられた。北壁は SK3075 土壌、南壁は SK3117 土壌の上面から掘り込まれており、南壁の平面プランはトレンチ両脇でも部分的に確認できる。また、南壁の延長線上にあたる西壁トレンチの壁面（図版 25 の断面②・③）には小溝とその北側に人為的な埋土（直上に炭化物の薄層あり）が認められ、本竪穴遺構に伴う南壁下の周溝と掘方埋土の可能性がある。SB3094・3095 建物跡、SK3073・3074・3076 ~ 3078・3115 土壌より古く、SK3075・3117 土壌より新しい。西壁トレンチの状況も踏まえれば、さらに SK3112 土壌よりも新しい。

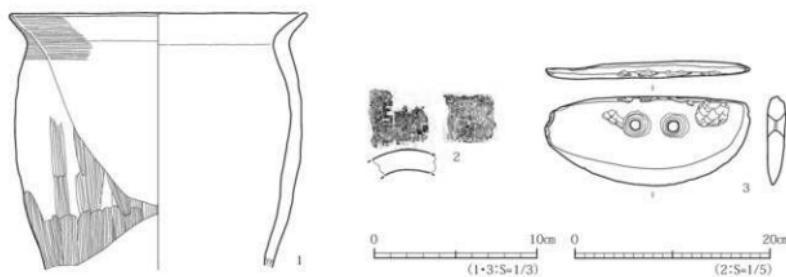
平面形は東西 5.6 m 以上 × 南北 6.4 m の方形を呈するとみられ、西壁トレンチまで含めれば、東西は 6.9 m 以上となる。残存する北壁の壁高は 0.6 m、南壁は 0.4 m で、北壁は床面から外側へやや開き気味に立ち上がり、南壁はほぼ垂直に立ち上がる。掘方埋土を床としており、床面は多少の凹凸をもちらながら南側へ緩やかに傾斜している。中央トレンチ内では、北壁の直下で上幅 0.2 m 程の周溝を検出しており、南壁近くの床面には東西 0.3 m 以上 × 南北 0.8 m の方形を基調とする深さ 0.2 m 程の K 1 が認められる。堆積土は 7 層に分けられ、最下層は床面直上に堆積した厚さ 1 ~ 3 cm の炭化物粒を多量に含む黒色粘土質シルト層で、機能時の堆積とみられる。この層は K 1 の底面直上にも認められた。これより上は地山ブロックを多量に含む暗褐～にぶい黄褐色のシルト層で、一度に埋め戻されている可能性がある。

遺物は、K 1 の埋土から土師器甕（図版 24-1）が出土している。

また、竪穴遺構の埋土から土師器甕、須恵器杯、丸瓦の破片と鉄滓、弥生時代の遺物の混入品とみられる石包丁（図版 24-3）が出土している。丸瓦には「占」（図版 24-2）の刻印がみられるも



図版 23 中央トレンチ北半部 _SX3070 穫穴遺構・土壤・SX3082 整地層



No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録	番号
1	SX3070・K1 墓土	土師器 壺	1/4	—	(8.0)	—	外面：粗いヘラナデ、口周付近ヨコナデ	33-7	R-69	B15162
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	厚さ	特徴	写真図版	登録	番号
2	SX3070・埋土	丸瓦	破片	—	—	—	2.0 ⅡB類 口面に削印(?)A	写真	I-180	B15162
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録	番号
3	SX3070・埋土	石臼	ほぼ完形	12.7	5.5	1.1		33-8	R-70	B15162

図版 24 SX3070 穫穴遺構 _ 出土遺物

のが1点ある。鉄滓は椀型滓である。

v. 杭列跡

【SA3065 杭列跡】(図版6)

調査区南端部の東壁トレンチ内で検出した東西方向の杭列跡で、0.6 mにわたって確認しており、さらに東西両側へ延びる。東壁トレンチを地山面まで掘り下げた段階でその存在を認識したが、トレンチ壁面の観察から掘方をもたないことは明らかで、打ち込みの杭列であったと考えられる。少なくとも第VII層（旧表土）よりも上部から打ち込まれているが、打ち込み面は判然としない。

トレンチ内では、径0.1 m前後の杭材の痕跡4本が0.05～0.1 mの間隔でほぼ連続して並んでおり、杭の並びにはやや凹凸がみられる。杭列の大まかな方向は、発掘基準線に対し、西で8～11°南に偏している。

この杭列に伴う遺物は出土していない。

vi. 集石遺構

【SX3105 集石遺構】(図版14)

調査区北部の西半に位置する遺構で、東西最大3.8 m、南北最大8.6 mの範囲が不整形に掘り窪められ、その中に大小の礫が集中する状態であった。確認面は地山面で、北端部から南へ5.0 m程までは東西幅1.5 m前後のいびつな溝状を呈し、その先で一度括れた後、南端部は径3.0 m前後の不整形に膨らんで、東へ延びるSD3108溝、南へ延びる3130溝と接続している。SB3090建物跡より新しい。

掘り下げを実施していないため詳細は不明であるが、黒褐色シルトの遺構堆積土中には径5～40 cmの礫が多量に含まれている。遺構縁辺に沿って規則的に並べられた可能性がある礫（図版14の濃い灰色の塗りで示した礫）もみられるが、大半の礫の分布に規則性は見出せない。また、礫の種類や形状、大きさに関しても統一的な規格は認められない。

遺物は、礫に混じって土師器、須恵器、瓦の小破片が出土している。

vii. 土壌

検出した土壤については第3表にまとめた。以下では、主なものについて説明を加える。

【SK3072 土壌】(図版6・8～10・23・25・26)

調査区南部で検出した大土壌で、SF3050築地壙跡北側の第III層下に位置している。確認面はSX3053整地層およびSK3085・3117土壤堆積土の上面で、調査区の東西両側へさらに拡がる。SK3116土壤より古く、SX3051 b・3052・3053・3082整地層、SK3085・3117土壤、SD3057・3058・3071溝より新しい。

平面形は東西に長い不整形を呈し、規模は東西10.0 m以上、南北7.2 m以上である。断ち割りを実施した東壁・中央・西壁トレンチで断面（図版8～10・23・25）を観察すると、深さは0.45 m程度で、底面にはやや凹凸があり、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は炭化物粒を含む褐～黒褐色のシ

ルト層もしくは砂質シルト層からなり、調査区東壁付近では堆積土の上位に灰白色火山灰層が認められる。いずれの層も自然流入土である。

遺物は、堆積土中から土師器、須恵器、須恵系土器、瓦、鉄製品、石製品が出土しており、土師器、須恵器と瓦の量が多い。

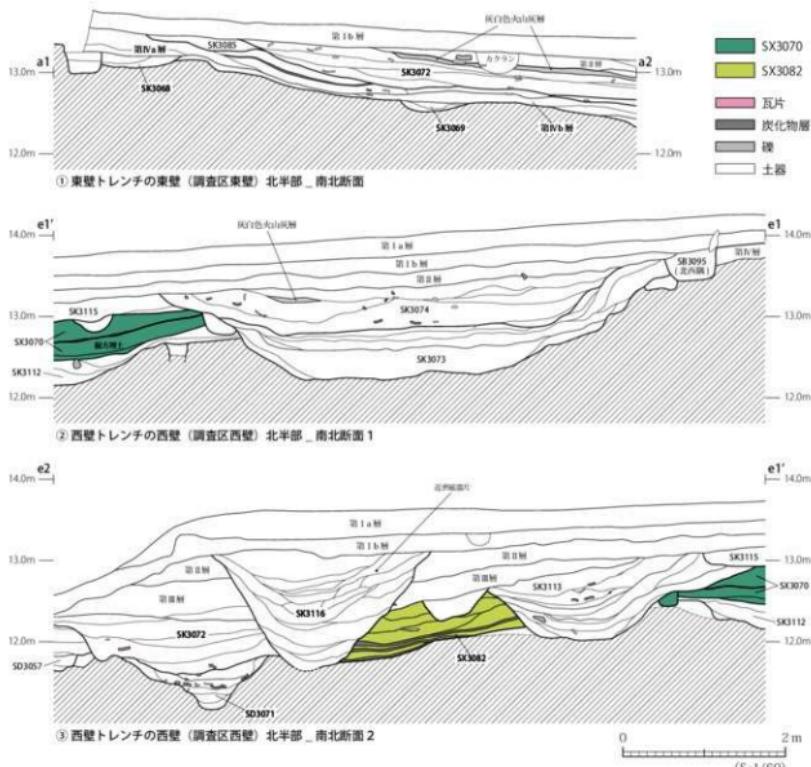
土師器には壺(図版 26-7~10)・高台壺・甕(図版 26-11)があり、須恵器には壺(図版 26-1~2)・高台壺(図版 26-4)・高台皿(図版 26-5)・蓋(図版 26-3)・瓶(図版 26-6)・甕(図版 26-7)がある。須恵系土器は高台壺(図版 26-12)が出土している。

瓦は、類別できるものを見ると、丸瓦 II B 類・平瓦 I A 類・I B 類・II B 類 a タイプ・II C 類があり、平瓦は II B 類 a タイプが主体である。平瓦には「物」(図版 26-15・16)の刻印がみられるものが 2 点ある。

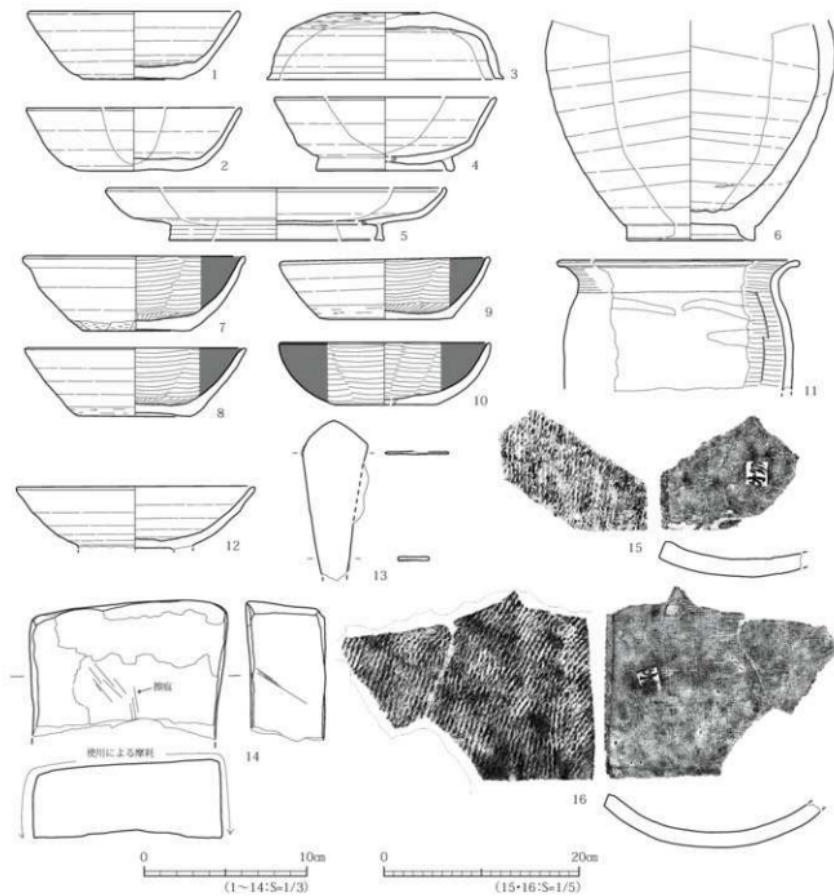
図版 26-13 は用途不明の鉄製品で、厚さ 2 mm 程度の扁平な菱形を呈している。石製品は砥石(図版 26-14)が 1 点出土している。

遺構番号	位置・確認番号	主要発掘場所	平面形・寸法	断面形・深度	種類	備考
SK03030	中央部内側面	SK03030-3051, SK03030, SK03030より古	方形状	断面幅 0.1m × 高さ 0.7m 以上	土師器	斜上部は褐色砂シルト層
SK03042	地盤上部	SK03042より古	方形状	断面幅 0.1m × 高さ 0.7m 以上	土師器	斜上部は褐色砂シルト層
SK03061	南側斜面(1)より古	SK03061より古	方形状	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03062	南側斜面(1)より古	SK03062より古	方形状	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03063	中央部斜面(1)より古	SK03063より古	方形状	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03069	南側斜面(1)より古	SK03069より古	方形状	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03072	南側	SK03072-3116, SK03072-3052-3013-30482, SK03072-3117, SK03072-3058-3071より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.7m 以上	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03073	南側	SK03073-3050, SK03073-3112より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.7m 以上	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03074	中央部内側面	SK03074-3049, SK03074-3077より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.6m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03075	中央部内側面	SK03075-3049, SK03075-3078より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.6m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03076	中央部内側面	SK03076-3051-3076-3076より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.6m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03077	中央部内側面	SK03077-3049, SK03077-3077より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.6m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03078	中央部内側面	SK03078-3049, SK03078-3079-3077より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.6m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03079	中央部内側面	SK03079-3049, SK03079-3078より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.6m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03080	中央部内側面	SK03080-3049, SK03080-3078より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.6m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03084	中央部内側面	SK03084より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 1.0m	土師器	斜上部は褐色砂シルト層
SK03085	中央部内側面	SK03085より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 1.0m	土師器	斜上部は褐色砂シルト層
SK03100	北側-地山	SK03100-3049-3051より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.8m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03103	北側斜面(1)より古	SK03103より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	土壁付斜面-底付灰層
SK03105	北側斜面(1)より古	SK03105-3049-3051より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	土壁付斜面-底付灰層
SK03107	北側斜面(1)より古	SK03107より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	土壁付斜面-底付灰層
SK03108	北側斜面(1)より古	SK03108より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	土壁付斜面-底付灰層
SK03109	北側斜面(1)より古	SK03109より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	土壁付斜面-底付灰層
SK03110	北側-地山	SK03110-3049-3051より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.8m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03111	北側-地山	SK03111より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	土壁付斜面-底付灰層
SK03112	北側-地山	SK03112より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	土壁付斜面-底付灰層
SK03113	北側-地山	SK03113より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	二重柱跡-民賀色シルト層
SK03115	中央部内側面	SK03115-3049-3050より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	柱跡-民賀色シルト層
SK03116	中央部内側面	SK03116より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	柱跡-民賀色シルト層
SK03117	中央部内側面	SK03117より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 1.2m	土師器	柱跡-民賀色シルト層
SK03118	北側-地山	SK03118より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.6m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03119	北側-地山	SK03119より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.6m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03120	北側斜面(1)より古	SK03120より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.6m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03121	中央部-地山	SK03121より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.6m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03122	南側内側面	SK03122より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.6m	土師器	昭和-民賀色シルト層
SK03123	北側内側面	SK03123より古	不整形	断面幅 0.1m × 高さ 0.6m	土師器	昭和-民賀色シルト層

第 3 表 第 83 次調査検出土壙一覧



図版 25 東・西壁トレンチ北半部断面_SX3070 窓穴遺構、土壤、SX3082 整地層



No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SK3072・堆積土	須恵器 环	1/3	13.2	6.4	4.2	底部：手持ちケズリ	R-98	B15162	
2	SK3072・堆積土	須恵器 环	2/3	(15.2)	(6.8)	3.9	底部：回転くつ切り	R-102	B15162	
3	SK3072・堆積土	須恵器 环	1/2	(14.6)	—	4.1	天井部：回転ケズリ	R-107	B15162	
4	SK3072・堆積土	須恵器 高台环	1/3	(13.6)	(8.4)	4.5	底部：?→回転ケズリ	R-104	B15162	
5	SK3072・堆積土	須恵器 高台環	1/4	(20.8)	(13.2)	3.2		R-105	B15162	
6	SK3072・堆積土	須恵器 瓶	1/4	—	(7.8)	—		R-103	B15162	
7	SK3072・堆積土	土師器 环	2/3	13.7	6.8	4.6	外面部下半から底部：手持ちケズリ	R-110	B15162	
8	SK3072・堆積土	土師器 环	3/4	(13.8)	(6.8)	4.2	底部：削軋系切→外面部下半削軋ケズリ	R-114	B15162	
9	SK3072・堆積土	土師器 环	1/3	13.0	8.2	3.8	底部：削軋系切→外面部下半削軋ケズリ	R-119	B15162	
10	SK3072・堆積土	土師器 环	1/4	(14.1)	(6.0)	3.8	外面部削軋処理 内外面具にミガキ	R-112	B15162	
11	SK3072・堆積土	土師器 瓶	1/3(4.5)	(15.)	—	—	内面ヘラナード→外面部縫付ヨコナヂ	R-113	B15162	
12	SK3072・堆積土	須恵器 高台环	2/3	14.8	—	—		32-16	B120	B15162
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	特徴	写真図版	登録	箱番号	
13	SK3072・堆積土	不明焼製品	(9.6)	3.9	0.2	用途不明	写真図版	登録	箱番号	
14	SK3072・堆積土	砾石	1/3	—	12.2	4.7	表面は使用による摩耗の痕跡がある。	36-1	R-126	B15162
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	特徴	写真図版	登録	箱番号	
15	SK3072・堆積土	平瓦	破片	—	—	1.8	四面広端右側に刻印物A	R-78	B15162	
16	SK3072・堆積土	平瓦	破片	—	—	1.5	四面広端左側に刻印物A	R-77	B15162	

図版 26 SK3072 土壌 - 出土遺物

【SK3073 土壌】(図版 16・25・27)

調査区中央部の西端に位置する土壌で、北縁以外の上部が SK3074 土壌に壊されている。確認面は地山面で、調査区西側へさらに拡がる。SB3093・3095 建物跡、SK3074 土壌、SD3080 溝より古く、SX3070 穫穴遺構より新しい。

平面形は南北に長い楕円形を基調とし、規模は東西 2.7 m 以上、南北 6.4 m 以上である。断ち割りを実施した西壁トレンチで断面(図版 25 の断面②)を観察すると、深さは 1.5 m 程で、底面には多少の凹凸がみられるものの、概ね平坦である。壁は外側に向かって斜めに開いて立ち上がる。堆積土は上下 2 層に大別され、上層は炭化物粒や砂ブロックを含む暗褐～黒褐色のシルト層で、自然流入土である。下層は木製品や木片、樹皮などを多量に含む黒色粘土層で、遺物の廃棄層とみられる。

遺物は、下層から木製の網針(図版 27-2)が出土している。断ち割りを実施した西壁トレンチでは、本土塙下層の土壌をすべて採取しているが、未洗浄のため他の遺物については後に報告する。

【SK3074 土壌】(図版 16・25・27)

調査区中央部の西寄りで検出した土壌で、第 II 層下に位置している。確認面は SK3073・3076 土壌の堆積土上面もしくは地山面で、調査区西側へさらに拡がる。SB3093・3094・3095 建物跡、SK3077 土壌より古く、SX3070 穫穴遺構、SK3073・3076 土壌より新しい。

平面形は不整な方形を呈するとみられ、規模は東西 5.5 m 以上、南北 6.6 m である。断ち割りを実施した西壁トレンチで断面(図版 25 の断面②)を観察すると、深さは 0.7 m 程で、底面はほぼ平坦である。壁は外側に向かって斜めに開いて立ち上がる。堆積土は焼土粒・炭化物粒を含む暗褐～黒褐色のシルト層からなり、上位には灰白色火山灰の堆積が認められる。また、下位に比較的多く瓦片が含まれていた。いずれの層も自然流入土である。

遺物は、堆積土中から土師器甕、須恵器蓋、単弧文軒丸瓦 640a タイプ(図版 27-1)、丸瓦Ⅱ類、平瓦Ⅰ C 類 a タイプ・Ⅱ B 類が出土している。

【SK3075 土壌】(図版 16・23)

調査区中央部のやや西寄りに位置する土壌で、南西部を SX3070 穫穴遺構と SK3077 土壌に壊されている。確認面は地山面である。SB3094・3095 建物跡、SX3070 穫穴遺構、SK3077・3084・3121 土壌より古い。

平面形は不整形を呈し、規模は東西 4.0 m、南北 3.2 m 以上である。断ち割りを実施した中央トレンチで断面(図版 23 の断面)を観察すると、深さは 0.7 m 程で、底面はほぼ平坦である。壁は外側に向かって斜めに開いて立ち上がり、上端部では緩やかな傾斜となっている。堆積土はにぶい黄褐～暗褐色の砂質シルト層で、自然流入土である。遺物は出土していない。

【SK3077 土壌】(図版 16・23・27)

調査区中央部のやや西寄りに位置する土壌で、確認面は SK3074・3075・3076 土壌の堆積土

上面もしくは地山面である。SB3094・3095 建物跡、SK3078 土壌より古く、SX3070 竪穴遺構、SK3074・3075・3076 土壌より新しい。

平面形は不整な長方形を呈し、規模は東西 4.8 m、南北 3.1 m である。断ち割りを実施した中央トレンチで断面（図版 23 の断面）を観察すると、深さは 0.3 m、底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は自然流入土とみられる黒褐色の砂質シルト層を主体としており、最下位には底面から壁に添って厚さ 1 ~ 3 cm の炭化物層が認められる。

遺物は、堆積土中から土師器環（図版 27-3・4）、須恵器甕が出土している。

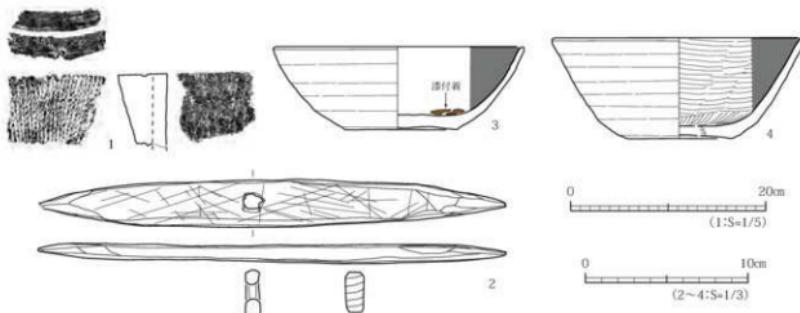
【SK3087 土壌】（図版 15）

調査区中央部の南東隅に位置する土壌である。確認面は SI3043 住居跡の掘方埋土上面もしくは地山面で、調査区の東側と南側へさらに拡がる。SB3094 建物跡より古く、SI3043 住居跡より新しい。

平面形は東西に長い不整形を呈し、規模は東西 6.0 m 以上、南北 2.3 m 以上である。断ち割りを実施した部分でみると、深さは最大 0.55 m で、底面の凹凸が著しく、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は上下 2 層に大別され、上層は褐灰色の砂質シルト層で、土壤上部の窪みに堆積した自然流入土とみられる。下層は地山ブロックと凝灰岩の岩片を含む黄褐色砂質シルト層で、人為的に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土していない。

【SK3103 土壌】（図版 14・28）

調査区北部の東端に位置する土壌である。確認面は地山面で、調査区の東側へさらに拡がる。SB3090 建物跡より新しい。



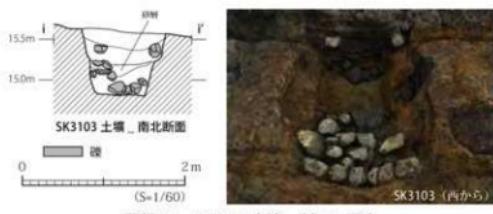
No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	幅	基盤	厚さ	特徴	写真図版	登録	番号
1	SK3074・堆積土	軒平瓦	瓦当破片	—	—	—	5.0	単弧文 640a タイプ		R-81	R15162
No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	幅	基盤	厚さ	特徴	写真図版	登録	番号
2.	SK3073・下層	木製品・網針	完形	29.8	2.9	1.2	ほほ中央に径 0.9cm の穴が穿たれている。		36-3	R-2689	R15162
No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	脚高		特徴	写真図版	登録	番号
3.	SK3077・堆積土	土師器 环	ほぼ完形	15.4	6.8	5.2		吻合調整 内面黒色施釉 底部・回転系切 内面に漆付着	32-2	R-86	R15162
4.	SK3077・堆積土	土師器 环	1/3	15.6	6.4	6.2		吻合調整 内面黒色施釉 内面に漆付 底部・回転系切		R-87	R15162

図版 27 SK3073・3074・3077 土壌 出土遺物

平面形は東西に長い長方形を呈するとみられ、規模は東西 1.8 m 以上、南北 1.2 m である。全体を 0.4 m 程掘り下げた時点で礫が集中して出土したため、掘り下げを中止して礫の分布状況を把握し、底面までの断ち割りは調査区東壁際（南北方向）で実施した。深さ

は 0.8 m で、断面形は逆台形を呈するが、壁の中位に軽い段が付く。堆積土は概ね壁に付く段を境に上下 2 層に大別され、上層は暗褐～黒色のシルト層で、自然流入土とみられる。下層は主に径 5 ～ 30 cm の礫を多量に含む黄褐色砂質シルト層で、人为的に埋め戻されていると考えられる。礫は上層にも含まれるが、下層では密に詰め込まれた状態で集中分布しており、その種類や形状、大きさに統一的な規格は認められない。なお、下層最上部の浅い窪みには褐色の砂層が堆積していた。

遺物は出土していない。



図版 28 SK3103 土壌_断面・写真

viii. 溝

【SD3047 溝】(図版 6・9)

調査区南部の西壁トレーナー内で検出した北西～南東方向に延びる溝である。確認面は地山面で、上部を第 V 層に覆われている。溝はさらに北西・南東方向へ続く。SF3050 a 築地跡・SX3049 整地層、SD3063 溝より古い。

規模は、長さが 1.7 m 以上で、上端幅は 0.4 ～ 0.7 m、深さは 0.1 ～ 0.25 m である。断面形は皿形を呈する。堆積土は炭化物粒を含む黒褐色の粘土質シルト層で、自然流入土である。

遺物は、堆積土中から土師器坏・甕、須恵器甕の小破片が出土している。

【SD3048 溝】(図版 6・8・29)

調査区南部の東壁トレーナー内で検出した遺構で、東西方向に延びる溝とみられる。検出範囲が狭いため断定は難しく、土壤などの可能性も残る。確認面は SI3041 住居跡の堆積土上面もしくは地山面で、上部を第 V 層に覆われている。SF3050 a・b 築地跡・SX3056 溝状掘り込み・SX3054 整地層より古く、SI3041 住居跡より新しい。

規模は、長さが 1.8 m 以上で、上端幅は 2.2 m 前後、深さは 0.3 m 程である。断面形は皿形を呈する。堆積土は褐色シルト層で、自然流入土である。

遺物は、堆積土中から土師器坏・甕、土錐(図版 29-1)が出土している。

【SD3062 溝】(図版 6・29)

調査区南部を東西方向に延びる溝で、SX3055 溝状掘り込み上面もしくは SF3050 築地跡北側の

堆積層上で確認した。溝はさらに調査区の東西両側へ続いているとみられるが、上部の削平が著しく、調査区東西の壁際で途切れている。SX3055 溝状掘り込み、SX3049・3051 a・3052 整地層より新しい。

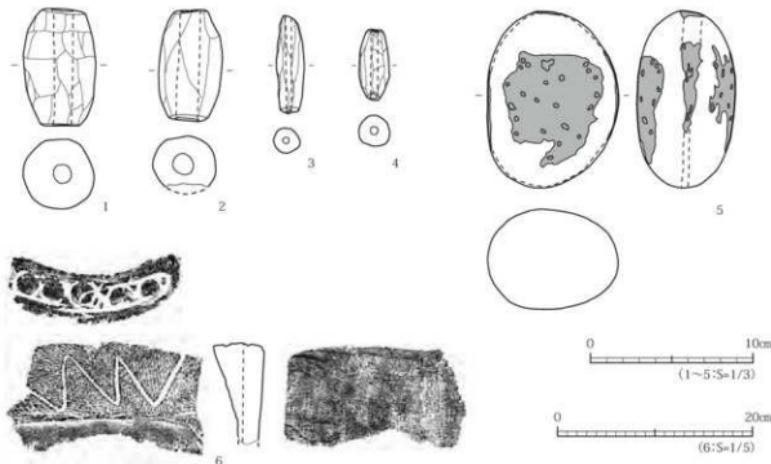
規模は、長さが約 9.0 m で、上端幅は 0.9 ~ 1.3 m、深さは 0.1 ~ 0.15 m である。断面形は皿形を呈する。堆積土は褐灰色の砂質シルト層で、自然流入土である。

遺物は、堆積土中から土師器坏、須恵器坏・蓋・甕、丸瓦 II 類、平瓦 II B 類・II C 類、土鉢（図版 29-2 ~ 4）、羽口、鉄釘、敲石（図版 29-5）が出土している。

【SD3063 溝】（図版 6・9）

調査区南部を東西方向に延びる溝で、SF3050 a・b 築地壠跡の積土上面で確認した。溝はさらに調査区の西側へ続き、東側は調査区東壁付近で途切れている。SF3050 a・b 築地壠跡、SX3056 溝状掘り込み、SX3049 整地層、SD3047 溝より新しい。

規模は、長さが 8.4 m 以上で、上端幅は 0.5 ~ 1.3 m、深さは 0.1 ~ 0.35 m である。断面形は皿形を呈し、底面はやや凹凸をもちながら全体として西側へ傾斜している。堆積土は黒褐色シルト層で、



No.	出土遺物・層位	種類	残存	長さ	直径	孔径	特徴	写真図版	登録番号
1	SD3048・堆積土	土鉢	完形	7.2	4.5	1.1			R-6 B15163
2	SD3062・堆積土	土鉢	ぼぼ完形	6.7	3.8	1.3			33-10 R-42 B15163
3	SD3062・堆積土	土鉢	ぼぼ完形	—	1.6	0.4			33-11 R-43 B15163
4	SD3062・堆積土	土鉢	完形	4.4	1.9	0.5			33-12 R-44 B15163
No.	出土遺物・層位	種類	残存	法縫	厚さ		特徴	写真図版	登録番号
5	SD3062・堆積土	敲石	完形	長軸	11.0	側輪 8.2	6.2		33-9 R-45 B15163
No.	出土遺物・層位	種類	残存	口径	底面	底面	広縫	厚さ	特徴
6	SD3107・堆積	軒平瓦	瓦当面破片	—	—	—	5.2	—	連珠文 831-a タイプ R-179 B15163

図版 29 SD3048・3062・3107 溝 出土遺物

自然流入土とみられるが、溝の西部には径 10 ~ 20cm の礫が比較的多く含まれていた。

遺物は、堆積土中から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、丸瓦 II B 類、平瓦 I A 類・I B 類・II B 類・II C 類、羽口が出土している。いずれも破片で、図示できるものはない。

【SD3064 溝】(図版 6・10)

調査区南部を東西方向に延びる溝で、SX3054 整地層上面で確認した。溝はさらに調査区の東西両側へ続いているとみられるが、上部の削平が著しく、調査区東西の壁付近で途切れている。SX3054 整地層より新しい。

規模は、長さが約 6.5 m で、上端幅は 0.15 ~ 0.3 m である。断ち割りを実施した中央小トレンチ(図版 10 の断面①)でみると、深さは 0.15 m 程度で、断面形は「U」字形を呈する。堆積土は砂の小ブロックを含む褐色シルト層で、自然流入土とみられる。遺物は出土していない。

【SD3067 溝】(図版 6・8・9)

調査区南端部を東西方向に延びる溝で、SF3050 築地跡跡南側の崩壊土層および堆積層上で確認した。西壁トレンチの断面観察では、上部を第 II 層に覆われている。調査区内に掛かるのは溝の北壁のみで、南壁の立ち上がりは未確認である。溝はさらに調査区の東西両側へ続く。SD3060 溝より新しい。

規模は、長さが 9.7 m 以上で、上端幅は 2.7 m 以上である。東・西壁トレンチで断面(図版 8 の断面①・図版 9 の断面①)を観察すると、双方の状況が異なっていた。東壁トレンチでは、深さは 1.0 m 以上で、溝の北壁上部は緩やかに傾斜し、途中から南へ向かってやや急角度に傾斜している。西壁トレンチでは、深さは 0.6 m 以上で、溝の北壁は緩やかに南側へ傾斜している。東壁トレンチの溝上層と西壁トレンチの溝堆積土の特徴は共通しており、褐色シルト層である。東壁トレンチの溝下層は黒褐色シルト層であった。いずれの層も自然流入土であるが、東壁トレンチの溝下層については別の古い溝の可能性もある。

遺物は、堆積土中から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、丸瓦 II B 類、平瓦 II B 類・II C 類の破片が出土している。

【SD3106 溝】(図版 14)

調査区北端部で緩やかに弧を描きながら東西方向に延びる溝で、SD3124 溝の堆積土上面もしくは地山面で確認した。溝はさらに調査区の東西両側へ続く。SB3099 建物跡より古く、SB3090 建物跡、SD3124・3125 溝より新しい。SD3107 溝とも東端部で重複しているが、平面精査ではその前後関係を捉えることができなかった。

規模は、長さが 10.4 m 以上で、上端幅は 0.35 ~ 0.7 m である。溝の深さや断面形、堆積土の状況は断ち割りを実施していないため不明であるが、堆積土の最上位は黒褐色の砂質シルト層であった。

遺物は、溝の確認段階で最上層から土師器坏・甕、須恵器坏、丸瓦 II B 類、平瓦 I A 類・II C 類の破片が出土している。

【SD3107 溝】(図版 14・29)

調査区北部を東－西－南方向に「L」字状に延びる溝で、地山面で確認した。溝はさらに調査区の東側へ続く。SD3126 溝より新しいが、SD3106 溝との前後関係は捉えられていない。

規模は、長さが東西 6.6 m 以上、南北 3.0 m で、上端幅は 0.2 ~ 0.7 m である。溝の深さや断面形、堆積土の状況は断ち割りを実施していないため不明であるが、堆積土の最上位は黒褐色の砂質シルト層であった。

遺物は、溝の確認段階で最上層から連珠文軒平瓦 831 (図版 29-6)、丸瓦Ⅱ B 類、平瓦Ⅱ B 類、Ⅱ C 類が出土している。

【SD3108 溝】(図版 14)

調査区北部を東西方向に延びる溝で、地山面で確認した。溝はさらに調査区の東側へ続き、西端は SX3105 集石遺構に接続している。SK3119 土壙と接するかたちで僅かに重複しているが、前後関係は判然としない。

規模は、長さが 6.3 m 以上で、上端幅は 0.5 ~ 1.0 m である。溝の深さや断面形、堆積土の状況は断ち割りを実施していないため不明であるが、堆積土の最上位は黒褐色シルト層であった。

遺物は、溝の確認段階で最上層から土師器環・甕の小破片が出土している。

【SD3109 溝】(図版 14)

調査区北部の南寄りを東西方向に延びる溝で、SD3128 溝の堆積土上面もしくは地山面で確認した。溝はさらに調査区の東西両側へ続く。SB3088・3091・3089 建物跡、SD3128・3129・3134 溝より新しい。

規模は、長さが 10.7 m 以上で、上端幅は 0.25 ~ 0.6 m、深さは 0.05 ~ 0.15 m である。断面形は「U」字形を呈し、底面は全体として東側へ緩やかに傾斜しているが、W 500 付近で軽い段が付いてそこから東側は一段深くなっている。堆積土は黒褐色シルト層で、自然流入土である。

遺物は出土していない。

ix. 整地層

【SX3082 整地層】(図版 24・25)

西壁・中央トレンチ内で検出した整地層で、調査区の中央部南寄りから南部北寄りに分布している。西側は調査区外へさらに続き、東側への延びは東壁トレンチで未検出のために判然としない。また、北側を SK3117 土壙に、南側を SK3072 土壙に大きく壊されているが、本来はさらに南北へも拡がっていたとみられる。SK3072・3113・3116・3117 土壙よりも古い。

当時の地表面を地山面まで削り出して盛土整地したもので、東西 5.7 m 以上、南北 2.7 m の範囲に、厚さ 0.05 ~ 0.55 m で残存しており、西側ほど残りが良い。整地に用いられた土は地山（粘土質シルトと砂）ブロックを多量に含む褐～暗褐色シルトで、厚さ 5 ~ 20cm の単位に分けられ、下位には

厚さ2cm前後の炭化物粒を主体とした間層が認められる。この炭化物の薄層は、西壁トレチで3層、中央トレチで1層確認されており、削り出した地山面に沿って南側へ傾斜している。この間層を境に整地時期が異なる可能性もあるが、今回の調査では炭化物層下の各層から掘り込まれた遺構は確認できなかった。

遺物は出土していない。

x. 基本層序各層の出土遺物

基本層序各層から出土した遺物について主なものを記す。土器類全体を概観すると、須恵系土器の出土量が少ない点が注目される。また、青磁、白磁は認められず、第28次調査で多量に出土した綠釉陶器、灰釉陶器も本調査では出土量が少ない。

なお、基本層序各層から出土した刻印文字瓦については第4表にまとめた。

【第I a層】(図版30)

土器、瓦、土製品、鉄製品、古銭が出土している。

土器は土師器、須恵器、須恵系土器、綠釉陶器、灰釉陶器、瓦質土器、近世陶器、近世磁器、近世鉄釉陶器、近世鉄釉磁器が出土している。土師器には壺・高台壺・塊・蓋・甕があり、須恵器には壺(図版30-1)・高杯(図版30-3)・高台壺・塊・蓋(図版30-2)・鉢・瓶・甕(図版30-4)がある。須恵系土器は壺(図版30-5~7)・高台壺・塊・蓋・甕が出土している。綠釉陶器には碗?(図版30-9)、灰釉陶器には皿(図版30-8)がみられる。

瓦は、類別できるものをみると、丸瓦I A類・II B類、平瓦I A類・I C類aタイプ・I C類bタイプ、I D類・II B類aタイプ・II B類bタイプ・II C類がある。

土製品は、先端に鉄滓が付着した羽口(図版30-10)が出土している。

鉄製品には底部の一部に銅滓が付着した坩堝(図版30-11)があり、古銭(図版30-12)は完形の洪武通宝である。

【第I b層】(図版31)

土器、硯、瓦が出土している。

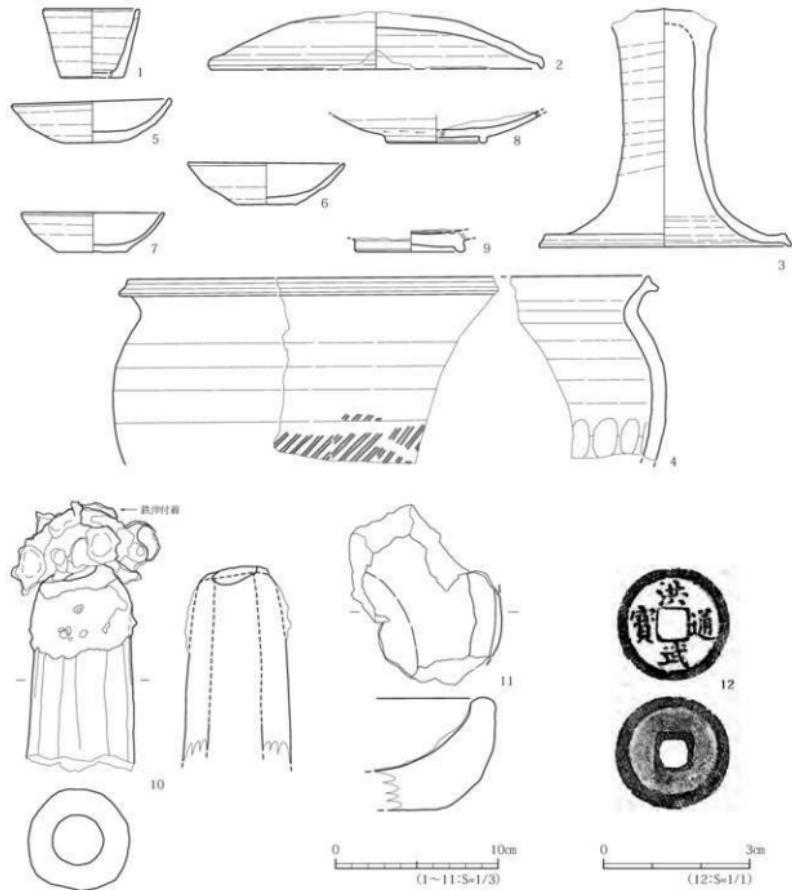
土器には土師器壺(図版31-2)・鉢(図版31-4)・壺・甕、須恵器壺(図版31-1)・壺・瓶・甕、須恵系土器壺(図版31-3)・塊・台付鉢、灰釉陶器瓶と弥生土器の小破片がある。

硯には円面硯の脚部が1点ある。

瓦は、類別できるものに、丸瓦II B類、平瓦I C類bタイプ・II B類aタイプ・II B類bタイプ・II C類がある。

【第II層】(図版31)

土器、硯、瓦が出土している。



No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録	番号	
1	第Ia層(南部)	須恵器 环	1/4 (5.8) (3.8)	4.3	—	底部:回転ケズリ		R-23	B15163		
2	第Ia層(南部)	須恵器 盆	ほぼ完形 (20.4)	—	—	天井部内面にヘラ書き「×」		R-53	B15163		
3	第Ia層(南部)	須恵器 高杯	脚部のみ	—	(15.2)	—			R-54	B15163	
4	第Ia層(西壁トレンチ)	須恵器 壺	上縁部破片	(32.0)	—	外面:平行叩き目 内面:当て具痕		R-230	B15163		
5	第Ia層(南部)	須恵器上器 环	完形	9.7	3.4	2.5	底部:回転切		32-18	R-59	B15163
6	第Ia層(南部)	須恵器下器 环	完形	9.6	3.8	2.6	底部:回転ケズリ		32-19	R-60	B15163
7	第Ia層(南部)	須恵器下器 环	完形	8.8	4.3	2.5	底部:回転ケズリ		32-17	R-61	B15163
8	第Ia層(南部)	灰陶陶器 盆	底部のみ	—	6.2	—	底部:回転ケズリ 内面全面施輪 粒状トチ痕		32-14	R-240	B15163
9	第Ia層(中央部)	疑釉陶器 瓶?	底部のみ	—	6.8	—	[内面:沈線による円]		32-8	R-242	B15163
No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	孔径	特徴	写真図版	登録	番号		
10	第Ia層(南部)	鉢?	一部破損	6.2	3.2	先端に鉄滓付着		36-4	R-58	B15163	
No.	出土遺構・層位	種類	残存	法量	厚さ	特徴	写真図版	登録	番号		
11	第Ia層(中央部)	形埴	底部破片	—	2.0	内面底部付近に脚部付着		36-5	R-267	B15163	
12	第Ia層(北部)	古鏡	完形	直徑 2.3mm	—	武周通宝		R-264	B15163		

図版30 基本層序第Ia層_出土遺物

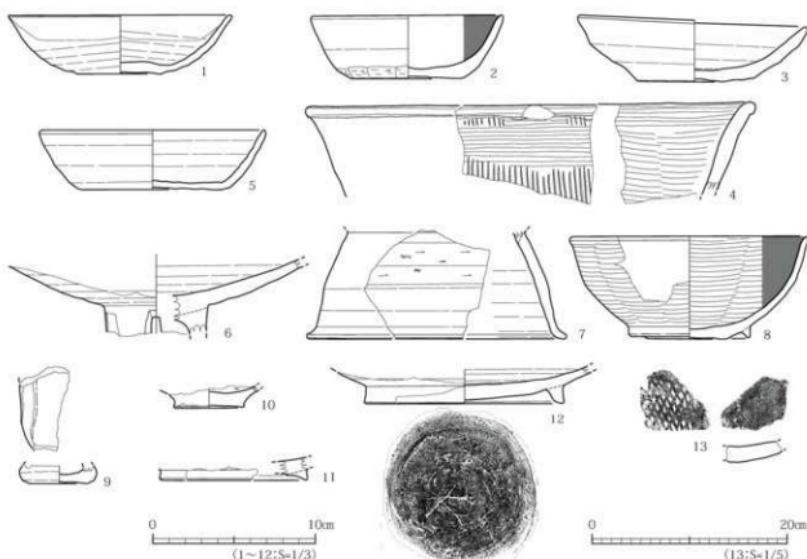
土器には土師器環・塊・甕、須恵器環（図版 31-5）・高台環・蓋・瓶・甕と弥生土器の小破片がある。硯は風字硯の側辺部が 1 点出土している。

瓦は、類別できるものに、丸瓦 II B 類・平瓦 I A 類・II B 類 a タイプ・II B 類 b タイプ・II C 類がある。

【第III層】（図版 31）

土器、硯、瓦、石器が出土している。

土器には土師器環・高台環（図版 31-8）・塊・耳皿（図版 31-9）・甕、須恵器環・高環（図版 31-6）・高台環・蓋・鉢・瓶・甕、綠釉陶器皿（図版 31-10・11）・碗、灰釉陶器皿・瓶がある。硯は円面硯（図版 31-7）の脚部が出土している。



No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録番号	
1	第 I b 層	須恵器 環	2/3	(15.7)	5.3	3.6	底部：回転系切	R-265	B15163	
2	第 I b 層	土師器 环	3/4	11.8	6.8	3.9	クロコ調質 内面黒色 底部：ヘラ切り→手持ちケズリ	R-222	B15163	
3	第 I b 層	須恵器 土師 环	2/3	14.2	7.2	4.1	底部：回転系切	32-15	R-224	B15163
4	第 I b 層	土師器 鉢	口縁部破片	(27.0)	—	—	外面：ハサワリ・L字縁部にヨコナデ 内面：ミガキ。口縁部にヨコナデ	R-229	B15163	
5	第 II 層	須恵器 环	2/3	14.0	8.6	3.6	底部：ヘラ切り	R-199	B15163	
6	第 III 層	須恵器 高环	片・脚部	—	—	—	脚部に長方形と思われる跡かし	R-186	B15163	
7	第 III 層	須恵器 円面板	脚部のみ	—	(16.0)	—	外面部：回転ケズリ→ロクロナデ	R-184	B15163	
8	第 III 層	土師器 高台環 完形	—	16.8	7.4	6.3	内面黒色 内外削：ミガキ 底部：回転系切	R-198	B15163	
9	第 III 層	土師器 耳皿	底部破片	—	(3.6)	—	内外面黒色 底部：回転系切	R-188	B15163	
10	第 III 層	綠釉陶器 瓶	底部破片	—	4.2	—	底部：回転系切 底部無輪 呼もん痕跡	32-10	R-190	B15163
11	第 III 層	綠釉陶器 瓶	底部破片	—	(8.9)	—	全面施釉 内面に文様	32-9	R-191	B15163
12	第 IV 层	須恵器 高台環	底部のみ	—	(12.4)	—	底部：回転ケズリ 底部にヘラ書き「大」	R-95	B15163	
No.	出土遺構・層位	種類	残存	長さ	幅	厚さ	特徴	写真図版	登録番号	
13	第 III 層	硯切瓦	破片	—	—	—	1.4 ID 研	R-183	B15163	

図版 31 基本層序第 I b～IV 層 出土遺物

瓦は、類別できるものに、丸瓦 II B 類・平瓦 I C 類 a タイプ・II B 類 a タイプ・II B 類 b タイプ・II C 類、隅切瓦 I D 類（図版 31-13）がある。

石器は剥片が 1 点出土している。

出土層位	刻印の種類	刻印部位	登録	番号
第 1a 層	「古」A	丸瓦 II B 類 凸面左縁	R-217	B15166
	「丸」A	平瓦 II B 類 凹面左縁	R-219	B15166
第 1b 層	「伊」A	丸瓦 II B 類 凸面	R-202	B15166
	「物」A	平瓦 II B 類 凹面左縁	R-204	B15166
	「矢」A	平瓦 II B 類 凸面右縁	R-203	B15166
第 IV 層	「丸」B	平瓦 II B 類 凹面	R-94	B15165

第 4 表 基本層序各層出土の刻印文字瓦一覧

【第 IV 層】（図版 31）

土器、瓦、鐵滓が出土している。

土器には土師器環・甕、須恵器環・高台皿（図版 31-12）・高台坏・蓋・甕がある。

瓦は丸瓦 II B 類、平瓦 I A 類・I C 類 a タイプ・II B 類・II C 類が出土している。



図版 32
(縮尺約 1/3)



SD3058・3071 满出土_遺物写真



SI3041 住居跡出土_遺物写真



SX3070 竪穴遺構出土_遺物写真



SD3062 满出土_遺物写真

図版 33 (縮尺約 1/3)

3. 総括

五万崎地区を対象に実施した第83次調査の成果を総括する。

発見した遺構には、築地壠跡、掘立柱建物跡、柱穴列跡、竪穴住居跡、竪穴遺構、杭列跡、集石遺構、土壌、溝、溝状掘り込み、整地層などがある。今回の調査では多数の遺構が複雑に重複した状態で検出され、出土遺物も弥生土器（中期中葉・楕形圓式期）から近世陶磁器までと多岐にわたるが、掘り下げをトレンチ部分に止めたことから遺構に伴う遺物は少なく、出土遺物から年代を特定できる遺構はほとんどない。そこで、外郭南辺の区画施設や掘立柱建物跡、竪穴住居跡などの主な遺構について個別にその様相を概観する。

（1）外郭南辺の区画施設について

外郭南辺の区画施設としてSF3050 築地壠跡とこれに伴う整地層、溝を検出している。築地本体はSF3050 a とその積み直しとみられる SF3050 b があり、さらに嵩上げ整地層が 2 時期認められることから SF3050 c・d の存在が想定され、区画施設の変遷は a～d 期の 4 時期に捉えられる。

i. 各期の概要

各期の概要は以下の通りである。

【a 期】

最初に築地壠が構築された時期で、SF3050 a 築地本体に SX3049 基礎整地と SX3051 a 整地層が伴う。SF3050 a は丘陵端部の南斜面を段状に削り出して南北幅 5.3～7.5 m の平坦な面を造成し、そのほぼ中央に築成されている。東部では削り出した面に直接、中央～西部では削り出し面を均すかたちで盛られた SX3049 上に築地本体が版築されており、基底幅は 2.7 m 前後とみられ、高さ 0.3 m 程で残存している。積手の違いは概ね 3.2 m 間隔で確認しているが、寄柱穴や添柱穴などは未検出である。築地本体の北側（城内側）には幅約 1.0 m の犬走り（SX3051 a）が認められ、本体を版築した後に付加されたものと理解した。

また、築地本体の南側で部分的に検出した SD3060 溝は SF3050 に伴う外溝と考えられる。築地壠構築以前の堆積層（第VI層）もしくは旧表土（第VII層）上から掘り込まれており、溝の堆積層に築地壠壊土が含まれる状況からみて、SF3050 a 築成当初から機能していた可能性が高い。溝には浚われた痕跡も認められるが、その上部全体が SX3054 整地層上から流れ込む築地壠壊土層で覆われており、d 期には機能していなかったと考えられる。

【b 期】

SF3050 a とその崩壊土層（a 層）を SX3051 a 上面の高さ近くまで削り取り、新たに SF3050 b 築地本体を積み直す補修が東部で行われており、この時期に SX3051 b 整地層と SD3057 溝が付加されている。築地本体は高さ 0.05～0.1 m と残りが悪く、基底幅も SX3055・3056 溝状掘り込みに壊されて判然としないが、SF3050 a とほぼ同位置に積み直されていたとみられる。SX3051 b は SF3050 a 構築の際に削り出した段の北部を埋め戻すかたちで行われた整地で、SD3057 は築地北側

の排水を目的とした内溝である。

【c期】

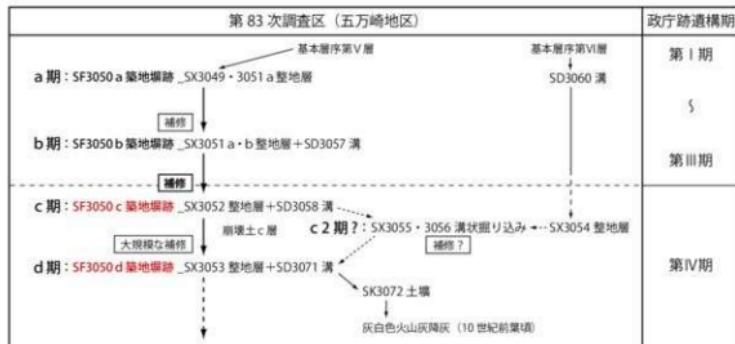
SX3051 a・b上を0.3m前後嵩上げしたSX3052整地層とその上部に堆積した築地崩壊土層(c層)を検出しており、この嵩上げに伴ってSF3050 c築地本体を構成する補修が行われたと考えられる。また、SX3052上面から掘り込まれたSD3058内溝をSD3057とほぼ重なる位置で確認しており、内溝の位置がb期と共することからSF3050 cの構成もほぼ同位置で行われたと考えられる。

なお、中央トレンチではc層から築地崩壊土に混じって多量の瓦片が出土しており、この層とその上部の堆積層に含まれる瓦が特に多い傾向は東壁トレンチや平面精査でも確認できることから、比較的広範囲でc期の途中に築地本体からの瓦崩落があったか、もしくはその終末期に不要な瓦の処理が行われたと考えられる。

【d期】

SX3052 上を 0.4 m 前後嵩上げした SX3053 整地層を検出しており、この嵩上げに伴って SF3050d 築地本体を築成する補修が行われたと考えられる。また、SX3053 上面から掘り込まれた SD3071 内溝も確認している。この内溝が c 期の内溝位置から北へ 2.0 m 程移動していることから、SF3050d もやや北側へずれた位置に築成された可能性があり、d 期の補修は大規模であったと推定される。

この他の区画施設に係わる遺構をみると、SX3055・3056溝状掘り込みとSX3054整地層がある。SX3055・3056はSF3050 a・b築地本体の両肩を壊すかたちで対となる位置を東西に延びていることから、両者の掘り込み底面に0.5m程の比高差が認められるものの、同時期の遺構である可能性が高い。SX3055・3056の埋土は、築地本体ほど細かい単位ではないが、版築状に突き固められており、その配置から築地垣補修に係わる遺構と考えられる。上部が削平されているため、具体的な性格については判然としないが、築地本体の両側を集中的に補修した掘り込みを作う遺構で、上部に積土があった可能性もある。帰属期は、東壁トレンチの断面観察からc期の補修時以降、d期の修築以前と考えられ、c期とd期の間に更に一回補修（c2期）が行われている可能性がある。SF3050



図版 34 外郭南北区画施設の変遷

*赤色は想定通りで未検出

d の築成位置はやや北側へずれる可能性があり、SF3050 a・b の南北両側に沿って検出された SX3055・3056 を d 期に伴う遺構とみるのは難しいと思われる。

SX3054 は SF3050 の南側で確認した整地層で、その帰属期を特定することは難しい。但し、SX3054 が SX3056 に壊されていることから、整地に用いられた土が SX3053 と類似し、それ以前の整地には認められない土であること、SX3053 とは上面の比高差が 1.0 m であること、西壁トレンチで検出した瓦集中層は本整地層より下位に位置すること^(註1)、瓦集中層の組成に平瓦 II C 類が含まれることなどを勘案すると、c 期以降、d 期以前で、c 2 期に属する可能性もある。

以上の内容を整理すると、SF3050を中心とした区画施設の変遷は図版 34 に示す通りである。外郭南辺の区画施設では、築地盤構築後に 3 回もしくは 4 回の補修が行われていることになる。

ii. 区画施設の年代

各期の外郭南辺区画施設について年代的な位置付けを所用瓦から検討する。外郭南辺の区画施設から出土した瓦の集計値を第 5 表に示した。

c 期にあたる SX3052 上の築地崩壊土層（c 層）から出土した多量の瓦に注目すると、類別できるものでは平瓦は II B 類 a タイプ、丸瓦は II 類が大半を占め、重圓文軒丸瓦（型番不明）、單弧文軒平瓦（640 a）、刻印瓦を含むことや胎土・焼成の特徴などから、大部分は多賀城政府跡遺構期第 II 期（以下、多賀城政府跡遺構期を略す）の瓦と考えられる。しかし、この瓦群には第 IV 期の瓦である平瓦 II C 類が約 13% 含まれている。これより古い整地層や崩壊土、堆積土中からは II C 類が出土しておらず、c 層で初めて組成に加わり、以後の堆積層や整地層にも含まれている。つまり、c 期の築地盤に葺く補修瓦として第 IV 期の瓦が用いられていることになり、その補修期は第 IV 期に位置付けられる。なお、出土した土器類の年代観にも矛盾はない。

その結果、c 2 期と d 期の補修は第 IV 期に位置付けられ、d 期の整地層と内溝の一部が堆積土上位に灰白色火山灰（十和田 a）層を含む SK3072 土壌に壊されていることから、いずれも 10 世紀前葉以前に行われた補修と考えられる。d 期の終末を特定することはできない。また、a 期の築地盤構築や b 期の補修は第 IV 期以前で、年代を特定することは難しい。

これまで南門西脇（第 20 次調査区）より以西の外郭南辺は未調査であったが、本調査区で築地盤を確認したことにより、

未調査部分を含めた外郭南辺の区画施設はほぼ直線的に延び、一貫して築地盤であった可能性が高まった。正門の付く南辺が視覚的に威厳を誇示する意味で、他辺よりも重要な意味で、要視されていたことが窺われる。

遺構名・層位	軒丸瓦		軒平瓦		丸 瓦		平 瓦						計		
	重圓文(不詳)	單弧文 640	II	II A	II B	I	I A	I B	I Ca	II	II B	II Ba	II C		
取り出しへ北端堆積層														1	1
SX3051b 壁中														1	1
SD3057 堆積土中														1	1
SX3051b 上堆積層														5	7
SX3052 壁中														4	7
SD3058 堆積土中														3	7
SX3052 上崩壊土中	1	2	12	2	1									36	82
SX3052 上堆積層			47	2	7				1		1	86	21	165	
西壁トレンチ瓦集中層			3	1								8	1	13	
SX3054 上崩壊土層	1	13						1			2	15	2	34	
SX3053 壁中			17	3								28	3	51	
SD3071 堆積土中			30	3	1							17	14	65	

第 5 表 外郭南辺区画施設_出土瓦集計表

* 計数は出土件数

(2) 五万崎地区の掘立柱建物跡について

調査区北半部では、掘立柱建物跡 12 棟と柱穴列跡 1 列を検出しており、掘立柱建物群を中心とした遺構が展開している。検出した建物はその方向が政府の中軸線を基にした発掘基準線から北でみて大きく西へ振れるもの（A 群）と発掘基準線とほぼ一致するもの（B 群）に大別され、これに建物の重複関係や配置などの諸要素を加味すると、A 群より B 群が新しい。

i. A 群

A 群は建物の方向が北でみて 30° 前後西に振れていることから、B 群の建物とは時期が大きく異なる可能性がある。確認した建物は SB3088・3089 の 2 棟のみであるが、東・西壁トレチの地山面（第 VIII 層上）で検出した柱穴は辺が同様に西へ振れており、A 群に属する建物となる可能性が高い。このような建物は五万崎地区の丘陵部を対象として本調査区のすぐ北側で実施した第 28 次調査（年報：1977）では検出されていない^(注2) ことから、本調査区の中央以南にあたる丘陵端部の南斜面に分布する建物群と考えられる。建物の柱穴からは土師器、須恵器の小破片以外の遺物が出土していないため、時期を特定することは難しい。

但し、調査区内では A 群と同様に方向が北から西へ 30° 前後振れる遺構として竪穴住居群があり、両者には直接の重複関係も認められ、SB3088 → SI3044 → SB3089 の順に新しい。これらを大きく同時期の遺構として捉えると、後述する竪穴住居群の年代観から A 群には 7 世紀前半頃の年代が想定される。

本調査区の 200 m 程南にあたる山王遺跡八幡地区（宮城県教委：1994・2001）、市川橋遺跡八幡・伏石地区（宮城県教委：2009）では、旧砂押川の南側の微高地上に展開する 6 世紀末～7 世紀中頃の集落跡が検出されている。この集落は主に竪穴住居群で構成されており、北側を旧砂押川、南側をその支流である SD100 河川跡とそれに接続する SD5160 河川跡に挟まれ、内部が SD2050 B 河川跡、SD2208・6517 区画溝によって細分されていたとみられており、その出土遺物から中央政権や広範囲な南北双方の遠隔地とも繋がりをもった有力集団による拠点的な大集落と考えられている。

今回の発見は、この集落とほぼ同時期の遺構が旧砂押川北岸にあたる五万崎地区の丘陵部にも展開していた可能性を示唆しており、その構成要素に掘立柱建物が加わる点でも注目される。

ii. B 群

B 群に属する建物は SB3090～3099 の 10 棟と SA3101 の 1 列である。調査区内で全体の規模が捉えられるものは少ないが、南北 2 間で東西棟（東西 5 間が主体か？）となるものが多い。B 群には、柱穴の規模が一辺 1.0m 前後と大きい建物と、柱穴の規模が一辺 0.6m 以下と小さく、掘方埋土が黒褐色土主体の建物がみられ、後者の方が新しくなる傾向にあるが、SB3097 のように前者より古くなるものも存在し、その在り方は一様ではない。いずれにしても、建物の方向が政府の中軸線とほぼ一致していることから、多賀城が機能していた時期の建物群と考えられる。

また、重複関係やその配置から同時存在が難しい建物も多く、柱筋を揃えて規則的に配置されているものはない。SB3090 と SB3092 は柱痕跡中の上部に焼土粒を含む点で一致しており、同時に存在した可能性も残る。なお、この 2 棟の柱痕跡中に含まれる焼土粒の量は比較的少なく、建物自体が火

災に遭っているかどうかは判然としない。

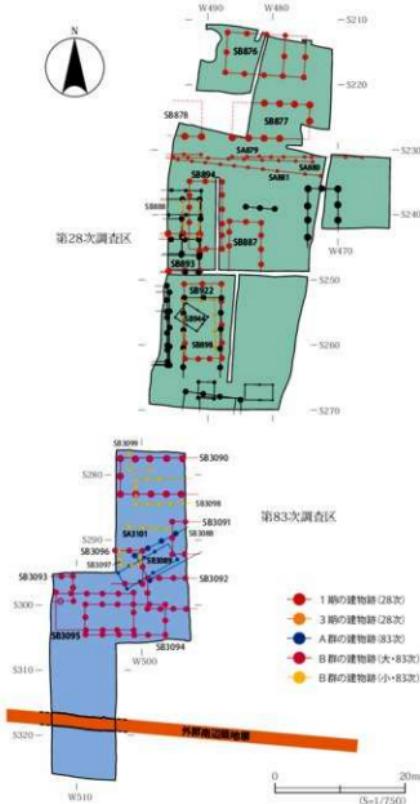
出土遺物や重複関係から年代を特定できる建物はないが、建物群の時期をある程度絞り込むことは可能である。

まず、SB3091 の柱穴から 9 世紀後半代のものとみられる縁釉陶器碗の小破片、SB3094 の柱穴から 10 世紀代のものとみられる土師器耳皿（図版 19-1）が出土しており、いずれも遺構確認段階の出土であるが、建物の時期をある程度反映した遺物とみられる。また、SB3093 ~ 3095 は堆積上の上位に灰白色火山灰層を含む SK3074 土壌よりも新しい。これらの柱穴に灰白色火山灰層との直接の切り合いが認められることや掘方埋土に灰白色火山灰が全く含まれていないこと、土壌が機能を停止した後の最終的な埋没段階に灰白色火山灰が堆積していることなどを勘案すると、SB3093 ~ 3095 の上限年代は 9 世紀末～10 世紀初頭頃と考えられる。

次に、建物群が展開する調査区北半部の表土（第 1 層）を含めた出土遺物全体をみると、須恵系土器の量が少なく、特に 10 世紀後半以降の須恵系土器はほとんど出土していない。調査区全体でみてもこの傾向は変わらず、時期的にまとまりのある遺物は第Ⅲ層から出土した 10 世紀前半代の土師器高台环（図版 31-8）・耳皿（図版 31-9）、縁釉陶器碗（図版 31-10 磐内産・11 近江産）などが最も新しい。第 1 層や確認面からは瓦質土器や中世陶器、近世陶磁器が僅かに出土しており、これらの時期まで下る新しい建物が含まれる可能性は残るが、B 群の大半はその下限が 10 世紀前半代に収まると考えられる。

なお、SB3094 から出土した耳皿は焼成後に「介」の文字が刻書されており、官職名を指す可能性がある点で注目される。この他に城内で「介」の文字が書かれた墨書・刻書土器の出土例は 1 点のみで、大畠地区の SK2167 土壌（年報：1993）出土の土師器环（9 世紀中葉頃）に墨書がある。

これらの状況を踏まえて、本調査区のすぐ北側で実施した第 28 次調査の調査成果との比較検討を試みる。第 28 次調査では、古代～中世の掘立柱建物跡や塹跡、溝、井戸跡、池状遺構などを検出し、この場所が



図版35 第28・83次調査区_掘立柱建物跡配置模式図

掘立柱建物を集中的に配置した重要な区域であったことを確認している。また、この調査区では9世紀後半～10世紀前半頃の縁釉・灰釉陶器が城内で最も多くまとまって出土している。

第28次調査で検出された建物群は、方向が政庁の中軸線と一致するものが大半を占め、その特徴と重複関係から、柱穴の掘方埋土に焼土を含まないもの（1期）と焼土を含むもの（2期）、埋土が黒色土のもの（3期）の3群に大別され、この順に新しく、多くの建物が須恵系土器を包含する整地層（第Ⅲ層）上に建てられていることが指摘されている。この1～3期の建物群はB群と方向が一致しており、柱穴の規模や埋土の特徴にも共通点がみられることから、両者はほぼ同時期に展開した建物群と考えられる。但し、本調査区では、B群の建物の掘方埋土に焼土を含むものが認められないこと、建物下の須恵系土器を含む整地層が未検出であること、須恵系土器や縁釉・灰釉陶器の出土量が少ないことなど、第28次調査区とは状況が異なる点もみられ、両者の建物群を一概に同時期とは比定できない部分も残る。

こうした建物群は外郭南辺築地塀の北側10m前後まで拡がっており、そこから築地塀までの間は建物群が機能していた時期には土壤の埋没が進み、空閑地になっていたと推定される。

（3）竪穴住居跡と土壤について

外郭南辺築地塀の北側（城内側）では、竪穴住居跡や竪穴遺構、土壤、溝などを検出している。これらの中で時期が推定できる遺構として竪穴住居跡と土壤がある。

i. 竪穴住居跡

SI3041 の床面から出土した鉢形の土師器甕（図版22-3）と胴張形の土師器甕（図版22-2）は、その器形や調整の特徴が多賀城市山王遺跡八幡地区のSI491・498住居跡（宮城県教委：1997）やSD2050 B河川跡第3・4層（宮城県教委：2001）出土のものと類似しており、同様に7世紀前半代のものと考えられる。住居に伴う遺物が少なく、須恵器や特徴が捉えられる土師器環類も出土していないため、明確には比定できないが、SI3041はこの頃の住居と考えられる。

他の住居では出土遺物から年代を特定することは難しいが、今回検出した全ての住居は方向が北から西へ振れており、その角度も概ね一致していることから、大枠で同時期の住居群として捉えられ、7世紀前半頃の年代が想定される。この住居群と同時期の可能性がある遺構としては、前述したA群の建物跡の他に、第V層下の地山面で検出したSK3110 土壙、SD3047・3048 溝などが挙げられる。

ii. 土壙

調査区中央～南部に展開する土壤群をみると、この中でも新しいSK3072・3074の両大土壤では最終的な埋没段階に灰白色火山灰が堆積している。この状況から大半の土壤は9世紀末～10世紀初頭頃には廃絶されていたと考えられる。また、土壤の分布はSF3050 築地塀跡の北側にほぼ限られており、築地塀を意識的に避けて掘られていたことが窺われることから、その上限年代もSF3050 aの構築時に求められる。土壤群の中には掘削後すぐに埋め戻されているもの（SK3087・3112）がみられ、意識的に築地塀を避けて掘られていることなどを踏まえれば築地塀構築時の土取り穴の可能性がある。その他にSK3073などの廃棄土壤もみられる。

註

註1：西壁トレント内ではSX3054は未検出で、瓦集中層との上下関係を直接確認できていないが、双方の検出面の標高や平面で追える築地崩壊土・堆積土層との上下関係からみて、瓦集中層はSX3054より下層に位置している。

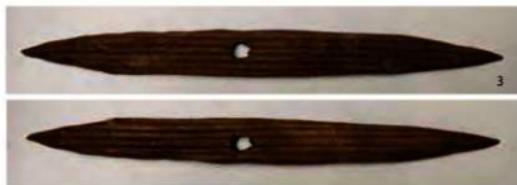
註2：第28次調査区で検出したSB044は方向が北でみて西に大きく振れているが、3期の建物より新しい小規模な建物である。

引用文献

- 宮城県教育委員会 1994 「山王道路八幡地区の調査－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅰ－」 宮城県文化財調査報告書第162集
宮城県教育委員会 1997 「山王遺跡V－第1分冊（八幡地区）・第2分冊（伏石地区・考察）－」 宮城県文化財調査報告書第174集
宮城県教育委員会 2001 「山王道路八幡地区的調査2－県道「泉－塩釜線」関連調査報告書Ⅳ－ 古墳時代後期SD2050B 河川跡編」
宮城県文化財調査報告書第186集
宮城県教育委員会 2009 「市川橋遺跡の調査 伏石・八幡地区 一県道「泉－塩釜線」関連調査報告書Ⅵ－ 第1分冊・第2分冊」
宮城県文化財調査報告書第218集
宮城県多賀城跡調査研究所 1977 「宮城県多賀城跡調査研究所年報 1976」(第28・29次調査)
宮城県多賀城跡調査研究所 1993 「宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992」(第62・63次調査)
宮城県多賀城跡調査研究所 1982 「多賀城跡 政府跡 本文編」
宮城県多賀城跡調査研究所 2002 「宮城県多賀城跡調査研究所年報 2001」(第72次調査)
宮城県多賀城跡調査研究所 2003 「宮城県多賀城跡調査研究所年報 2002」(第73次調査)



SK3072 土壤出土_遺物写真



SK3073 土壤出土_木製品写真



基本層序第1a層出土_鍛冶関連遺物写真

図版 36 (縮尺約1/3)

IV. 付 章

1. 震災被害の発生状況

平成23年3月11日に発生した東日本大震災とその後の一連の余震により、特別史跡多賀城跡附寺跡関係の施設・設備は多くの被害を受けた。地震の発生から被害確認、当研究所の対応に至るまでの経過記録は以下のとおりである。

- 3月 11日 14時46分、東北地方太平洋沖地震（震度6強、東日本大震災）発生→停電
施設・収蔵庫等の被害状況確認
- 3月 15日 停電解消
- 3月 16日 特別史跡多賀城内の被害状況確認→状況報告1回目
※ 外郭南門跡南西側トイレの屋根の棟の漆喰の剥落を確認→使用禁止措置
※ 政府正殿基壇上面のアスファルト舗装の亀裂拡大を確認
※ 作貫地区北側階段の踏み石のズレを確認
- 3月 18日 特別史跡内・収蔵庫の被害状況確認→状況報告2回目
※ 館前遺跡東側斜面に地割れを確認→シート被覆による応急処置
※ 浮島収蔵庫の収納棚の損壊を確認
- 3月 30日 特別史跡内の被害状況確認→状況報告3回目
※ 作貫地区あずま屋の敷石のズレを確認
※ 柏木遺跡の舗装道の亀裂を確認
- 4月 1~7日 調査室等の復旧・整理
- 4月 7日 特別史跡の被害状況の確認
※ 外郭南門・東門跡トイレの合併浄化槽の機能不全を確認→使用禁止措置
23時32分宮城県沖地震（震度6強）発生→停電
- 4月 8日 特別史跡の被害状況の確認→被害状況報告4回目
※ 外郭南門跡南西側トイレの屋根の棟瓦崩壊の進行を確認
※ 政府正殿基壇上面のアスファルト舗装の亀裂拡大を確認
※ 多賀城廐寺塔・中門階段のズレを確認
※ 浮島収蔵庫の収納棚の崩壊と遺物散乱を確認
- 4月 9日 停電解消
- 4月11~21日 浮島収蔵庫の復旧・整理
- 4月 11日 被害状況確認→状況報告5回目
※ 柏木遺跡の舗装道・擁壁の亀裂、「U」字溝の破損など被害拡大を確認
- 4月 12日 被害状況確認→状況報告6回目
※ 作貫地区露出展示複屋の廊柱のズレを確認
- 4月 13日 被害状況確認→状況報告7回目
※ 六月坂地区遊歩道の地割れ・陥没を確認→シート被覆による応急処置
- 6月 30日 震災関連の毀損届を一括提出（多賀城市）

今回の震災では、本震後の度重なる強い余震により被害状況が刻々と変化する状態が続いた。このため、強い余震が収まった段階で被害状況確認をその都度おこない、一部では仮の復旧処置を施した。舗装の微細な亀裂や敷石のズレは、地震以前から経年変化により生じていたものも少なくない。しかし、こうした既存の亀裂やズレは今回の一連の地震により一気に増幅拡大しており、そのうち、I章に示した11箇所については、史跡管理に影響を及ぼす規模に達したと判断されたため、次年度に復旧作業を実施する予定である。

また、国土地理院の発表資料によれば、史跡周辺の基準点の変動量は、水平変動が東南に約0.33m、上下変動が下に0.01~0.02mであり、これまで多賀城跡の調査・整備に供してきた基準点も変動しているとみられる。当研究所では史跡内各地区に3級基準点35点を設置しているが、これらについても次年度に改測もしくは再設置などの対策を講ずる予定である。

2. 関連研究・普及活動

(1) 多賀城跡環境整備事業

平成23年度の多賀城跡環境整備事業は、政庁跡の再整備を目的とする第9次5ヵ年計画の2年次目となる政府地区追加遺構表示の一環として、東脇殿・東楼の平面表示に関わる復元基壇・礎石設置等の工事を実施した。総事業費は8,104千円（国庫補助50%）である。東日本大震災の影響により工事着手時期が遅れたが、予定通りの内容で実施した。政庁跡再整備は、特別史跡を有効活用する上で最重要かつ不可欠の事業であり次年度以降も下表の計画のとおり着実に進める予定である。

年 度	整備地区	計 画 内 容	事 業 費
平成 22 年度	政庁再整備	【追加遺構表示】西脇殿・西楼平面表示	8,084 千円
平成 23 年度	政庁再整備	【追加遺構表示】東脇殿・東楼平面表示	8,104 千円
平成 24 年度	政庁再整備	【追加遺構表示】後殿・政庁内表土処理	8,000 千円
平成 25 年度	政庁再整備		8,000 千円
平成 26 年度	政庁再整備	北殿平面表示・北辺基盤整備	8,000 千円

多賀城跡環境整備事業第9次5ヵ年計画（平成23年度実績）

(2) 特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

特別史跡内の現状を変更するにあたっては、現状変更の申請者及び関係機関と遺跡保護のために慎重な協議を行い、遺跡への影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査を行っている。平成23年度における現状変更申請は東日本大震災の影響もあり皆無であった。

ただし、自然災害による史跡の毀損が多発したため、管理団体である多賀城市から毀損届が提出されている。まず、6月30日付けで、前記した東日本大震災とその後の余震に関わる毀損届が一括して出された。また、9月28日付けで、9月21~22日に東日本を横断した台風15号の豪雨被害に関わる毀損届が提出された。これらの被害に対する復旧・修復作業は、平成24年度当初予算の災害復旧事業として実施する予定である。

(3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所は、多賀城に関連する宮城県内の城柵及び官衙遺跡や生産遺跡について計画的な調査と研究を継続的に行っている。平成 21 年度からは、多賀城創建期の窯跡群について発掘調査を行い、造瓦体制とその社会的背景の諸問題を解明することを主目的とした多賀城関連遺跡発掘調査事業第 8 次 5 カ年計画に入った。本年度はその 3 年次目として、宮城県北部の大崎市大吉山窯跡について調査を実施する予定であった。しかし、東日本大震災の発生を受け、その復旧事業を優先するため、本年度予定していた多賀城関連遺跡発掘調査事業を休止した。

(4) 遺構調査研究事業

本事業は、多賀城跡及び関連遺跡の発掘調査によって検出した諸遺構の保存と活用を目的として、他遺跡の類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものであるが、本年度は東日本大震災の復旧事業を優先するために予定していた遺構調査研究事業を休止した。

(5) その他

1. 文化財レスキュー活動への参加

震災により被災した文化財のレスキュー活動に参加した。
石巻文化センター被災文化財レスキュー活動 平成 23 年 5 月 24 ~ 27 日
東松島市埋蔵文化財収蔵庫被災文化財レスキュー活動 平成 23 年 6 月 8 ~ 10 日

2. 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するために、下記の現地説明会を開催した。
廣谷和也・三好秀樹 「多賀城跡第 83 次調査現地説明会」 平成 23 年 10 月 23 日

3. 各機関・委員会などへの協力

佐藤則之 秋田市秋田城跡環境整備指導委員会委員 払田柵跡保存管理計画策定指導委員会委員 志波城跡史跡整備委員会委員 多賀城市文化財保護委員会委員 史跡伊治城跡調査整備指導委員会委員 角田市郡山遺跡調査指導委員会委員 第 38 回古代城柵官衙遺跡検討会代表世話人 ほか

4. 講演会・研究会などへの協力

古川一明 「宮城の山の寺」 山の寺研究会 寒河江市文化センター 平成 23 年 10 月 1 日
三好秀樹 「多賀城跡第 83 次調査の概要」 平成 23 年度宮城県遺跡調査成果発表会 東北歴史博物館 平成 23 年 12 月 10 日

廣谷和也 「多賀城跡第 83 次調査の概要」 第 38 回古代城柵官衙遺跡検討会

東北歴史博物館 平成 24 年 2 月 25 日

5. 連携大学院

東北大大学院文学研究科長と宮城県多賀城跡調査研究所長の協定に基づき、文学研究科文化財科学専攻の大学院生の研究と指導にあたった。

佐藤則之（客員教授） 文化財科学研究演習

佐藤則之（客員教授）・古川一明（客員准教授） 文化財科学研究実習

3. 組織と職員

〈宮城県教育委員会行政組織規則(抄)〉

第13条の四 文化財保護課の分掌事務は、次のとおりとする。

四 多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関すること。

第21条 特別史跡多賀城附寺跡(これに関連する遺跡を含む。以下同じ)の発掘、調査及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

2 多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
多賀城跡調査研究所	多賀城市

3 多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

一 特別史跡多賀城附寺跡の発掘に関すること。

二 特別史跡多賀城附寺跡の出土品の調査及び研究に関すること。

三 特別史跡多賀城附寺跡の環境整備に関すること。

四 庶務に関すること。

第24条 必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、その職務は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職 務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

2 上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は、技術職員をもって充てる。

〈職 員〉

所長 佐藤 则之
管理部長 坂本 猛

《研究班》

上席主任研究員(班長) 古川 一明
主任研究員 三好 肇明 [博物館兼務]

副主任研究員 吉野 武

副主任研究員 三好 秀樹

技 師 廣谷 和也

《管理班》

次 長(班長) 武田 榎 [博物館兼務]
主 幹 安藤 光明 [博物館兼務]

主 幹 阿部 博徳 [博物館兼務]

主 査 小野寺 愛 [博物館兼務]

4. 沿革と実績

(1) 宮城県多賀城跡調査研究所の沿革

年	月	事項
大正 11.10		多賀城跡が史跡名冊天然記念物保存法(大正 8.4 公布)により史跡指定。指定名称「多賀城跡古寺跡」
昭和 35		県教委が「多賀城跡発掘調査委員会」を組織して 5 年計画で多賀城跡の発掘調査を実施することになり、その初年度事業として多賀城跡と多賀城廢寺跡の地形図を作成
36. 8		多賀城跡古寺跡第 1 次発掘調査実施(県教委主体、多賀町役場と河北文化事業団共催。調査主任は伊東信雄東北大教授)
37. 8		多賀城跡古寺跡第 2 次発掘調査実施。主要伽藍配筋が判明
38. 8		多賀城跡政庁地区の発掘調査(第 1 次)開始。以後 40 年 8 月(第 3 次)まで実施。政庁地区の朝堂院的な建物配筋が判明
41. 4		多賀城跡古寺跡第 3 次発掘調査実施
43.11		多賀町が多賀城跡政庁地区の発掘調査(第 4 次)を内閣
44. 4		宮城県多賀城跡調査研究会設立
44. 7		多賀城跡調査研究指導委員会設置(委員長 伊東信雄) 研究所による多賀城跡調査研究事業開始
44.10		赤麻村(今山)出石城跡の発掘調査実施
45. 3		「多賀城跡調査報告書 1—多賀城废寺跡」刊行
45. 4		研究所による多賀城廢寺跡整備事業開始
48.10		金属地図を対象とした 21 次調査で計画様文書断面を発見
49. 2		外郭西北地区の追加指定が官報告示
49. 4		多賀城跡遺跡発掘調査事業開始
49. 8		桃生城跡の発掘調査に着手(昭和 50 年度まで継続)
49. 8		プレス広告から東北歴史資料館の建物に移転
51. 3		特別史跡多賀城跡附寺跡保管会計画策定
52. 7		伊治城跡の発掘調査に着手(昭和 54 年度まで継続)
53. 4		研究第一科へ開拓二科の 2 科制となる。遺跡調査研究事業開始
53. 6		漆紙文書の発見を報道発表。これより研究所が日本社・即ち事から表彰を受ける
54. 3		多賀城跡調査研究資料「多賀城漆紙文書」刊行
55. 3		「多賀城跡—政庁跡探査編一」刊行
55. 3		館前道路の追加指定が官報告示
55. 7		名生城跡の発掘調査に着手(昭和 60 年度まで継続)。初年度の調査で 8 世紀初期の官衙中軸部を検出
57. 1		現状変更に伴う緊急調査(第 40 次)により外郭南北第中央部で木橋発見
57. 3		「多賀城跡—政庁跡本編一」刊行
58.11		第 43~44 次調査で東南前門の道路構造発見
59. 3		多賀城跡南面地域の追加指定が官報告示
60. 9		名生城跡復元合戦原反塹跡の発掘調査実施
61. 8		東山城跡の発掘調査に着手(平成 4 年度まで継続)
62. 8		名生城跡官衙道路の史跡指定が官報告示
62.11		第 53 次調査で多賀城跡 1・2 期の外郭廻廊を発見
63. 3		特別史跡多賀城跡附寺跡第 2 次保存管理計画書策定
平成 2. 6		柏木城跡の追加指定が官報告示
2.11		多賀城跡調査研究指導委員会に南門・政庁間整備活用専門部会を設置
4.11		日本最高の「かな」漆紙文書について報道発表
5. 8		下伊豆野宮跡の調査を実施し、3 基の多賀城創建瓦窯跡を発見
5. 9		山王千畠田地の追加指定が官報告示
6. 8		桃生城跡の発掘調査を再開(平成 13 年度まで継続)。政庁の全貌を解明
7. 6		第 31 回指導委員会において南門・政庁間整備活用計画案承認
9.11		多賀城復元屋の解体修理および碑地下部分の発掘調査を実施
10. 6		多賀城跡の重要文化財(古文書)指定が官報告示
11. 1		東山官衙道路の史跡指定が官報告示
11. 4		東北歴史博物館の建物に移転
14. 1		「多賀城跡等の発掘調査を通して東北古代史の改名に尽くした功績」により第 51 回河北文化賞を受賞
14. 8		亀岡城跡に着手(平成 15 年度まで継続)
15. 3		「多賀城跡—発掘のあゆみー」刊行
15. 6		伊治城跡の史跡指定が官報告示
16. 5		木下川城跡の発掘調査に着手(平成 18 年度まで継続)
17. 4		多賀城跡調査研究指導委員会を廃し、宮城県条例第 13 号により多賀城跡調査研究委員会を設置
19. 8		日向山官衙道路の発掘調査に着手(平成 22 年度まで継続)
22. 3		「多賀城跡—政庁跡補遺編一」刊行
22. 9		多賀城跡調査 50 周年記念事業開催 (本研究会多賀城特別研究会合「古代東北の城壁と木版」、記念講演会・シンポジウム「多賀城と大字府」、記念フォーラム「よみがえる北の都—多賀城に生きた人々」)
22. 9		「多賀城跡—発掘のあゆみ 2010—」刊行
22.11		第 82 次調査で新たな外郭東門を発見
23. 3		多賀城跡調査研究資料Ⅱ「多賀城木簡」刊行

(2) 事業実績

1) 多賀城跡発掘調査の実績

調査面積累計	112, 333 m ²
調査費用累計	1, 080, 814 千円
指定地盤面積	約 1, 070, 000 m ²
調査面積 / 指定面積	約 10%

計画 年 度	年 度	次 数	発掘調査区	発掘 面積 (m ²)	経費 (千円)	計画 年 度	年 度	次 数	発掘調査区	発掘 面積 (m ²)	経費 (千円)
第 1 次 5 年 計 画	昭和 44	5 次	政庁地区南東部	1,980		第 5 次 5 年 計 画	昭和 45	45 次	坂下地区	70	
		6 次	政庁地区北東部	2,079	9,000			46 次	外郭西側地区	750	29,000
		7 次	外郭南辺中央部(多賀城碑付近)	264				47 次	外郭西辺中央部	1,000	
	昭和 45	8 次	外郭南辺中央部	350				48 次	外郭南門地区	800	
		9 次	政庁地区西南部	2,046	12,000			49 次	外郭北門推定地	450	
		10 次	外郭西辺中央部	495				50 次	政庁南端	900	
		11 次	外郭南辺南部	660				51 次	外郭北東隅東地区	500	
		12 次	外郭中央地区北部	3,795				52 次	大畠地区及び東端外の地区	500	
第 2 次 5 年 計 画	昭和 46	13 次	外郭南辺東門付近	1,600	12,000			53 次	外郭東門北東地区	1,000	
		14 次	外郭中央地区北部	2,086				54 次	外郭東門東地区	1,000	
		15 次	鴻ノ池周辺	112				55 次	外郭東辺中央部(作賀地区)	500	
	昭和 47	16 次	政庁地区北半部	1,320	13,000			56 次	大畠地区北半部	1,550	
		17 次	外郭東辺東・北西端	1,729				57 次	外郭東辺南半部(西沢地区)	500	
		18 次	外郭中央地域北部	2,937				58 次	大畠地区中央部	1,470	
第 3 次 5 年 計 画	昭和 48	19 次	政庁地区北西部	2,640				59 次	大畠地区中央部東側	900	
		20 次	外郭南辺中央部	990				60 次	大畠地区北半部	1,450	
		21 次	外郭南辺地区中央部	1,485	17,000			61 次	鴻ノ池地区	150	
		22 次	城内西方(高麗道跡)	3,465				62 次	大畠地区南半部	1,100	
	昭和 49	23 次	外郭東地区北部(字大畠)	3,300				63 次	大畠地区北半部	1,700	
		24 次	外郭東東隅	2,640	17,000			64 次	大畠地区北北部	3,000	35,000
第 4 次 5 年 計 画	昭和 50	25 次	多賀城壁跡南大門推定地	2,310				65 次	外郭東・北半部・現状変更に伴う発掘調査	2,200	36,000
		26 次	多賀城壁跡寺跡門前方面地区	2,310	22,000			66 次	平成 6 年度	3,000	35,000
		27 次	舟社と西陽市川大保地区	660				67 次	大畠地区北西部	3,000	39,000
	昭和 51	28 次	五万崎地区	2,310				68 次	大畠地区西・多賀城壁跡の移動軸体に伴う発掘調査	2,650	36,000
		29 次	五万崎地区	2,310				69 次	城前地区南東部	2,000	36,000
		30 次	五万崎地区	1,980				70 次	城前地区南部	2,000	37,700
第 5 次 5 年 計 画	昭和 52	31 次	政庁北方隣接地区	1,980	22,000			71 次	城前地区南部	2,000	32,300
		32 次	政庁北方隣接地区	1,000	22,000			72 次	外郭南門東側築地跡・政庁・外郭南門間道路	1,000	28,900
		33 次	外郭東地区	1,000				73 次	外郭南門東側築地跡・政庁・外郭南門間道路	1,800	26,000
	昭和 54	34 次	雀山地区南低湿地	1,300	30,000			74 次	政庁 - 外郭南門間道路跡	1,000	25,220
		35 次	鴻ノ池南地区	900				75 次	外郭北辺中央部	500	
		36 次	外郭東地区中央部作賀地区	1,800				76 次	政庁北側縦跡・後壁・北辺地区	1,640	24,463
第 6 次 5 年 計 画	昭和 55	37 次	多賀城外南地方(砂押川岸)地区	700				77 次	政庁東棟・西脇跡・南面跡	970	23,730
		38 次	作賀城南低湿地(緊急調査)	50				78 次	政庁地区・政庁南面地区・城前地区・鴻ノ池地区	2,700	16,610
		39 次	外郭東地区中央部作賀地区	2,500	35,000			79 次	政庁 - 外郭南門間道路・城前地区・鴻ノ池地区	1,350	14,168
	昭和 56	40 次	外郭南辺築地東中央部(立石地区・緊急)	80				80 次	田原塙地区・政庁南西端	930	12,752
		41 次	外郭南辺南端(田原塙東端地区)	1,200	32,000			81 次	鴻ノ池地区・政庁南西地区	900	12,064
		42 次	外郭東地区中央部(作賀地区)	500				82 次	外郭北辺伊保石地区	580	11,460
第 7 次 5 年 計 画	昭和 57	43 次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	800	32,000			83 次	外郭南辺五万崎地区(予定)	640	11,447
		44 次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	2,500				84 次	外郭南辺五万崎地区(予定)		
	昭和 58	45 次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	800	32,000			85 次	政庁正殿(予定)		
		46 次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	2,500				86 次	外郭北辺六月坂地区(予定)		

2) 多賀城跡附寺跡環境整備事業の実績

年度	対象地区	主な工事内容	面積 (m ²)	事業費 (千円)
昭和45	行政地区(第1期)	南門賀跡跡・東脇跡表示工	3,519	10,000
昭和46	行政地区(第2期)	正殿跡・墓地跡表示工	7,256	20,000
昭和47	行政地区(第3期)	西脇跡・墓地跡表示工	14,669	25,000
昭和48	行政地区(第4期)	北西門跡・墓地跡表示工	9,415	20,000
昭和49	外郭東門地区	東門跡・堅穴門跡表示工	8,326	20,000
昭和50	外郭東南隅地区(第1期)	木質過橋保存施設設置工	3,600	20,000
昭和51	外郭東南隅地区(第2期)	湿地修理工・脚踏工	6,400	10,000
昭和52	西ノ池地区(第1期)	南辺染跡跡表示工	2,000	16,000
昭和53	西ノ池地区(第2期)	多賀城跡周辺修理工	2,500	16,000
昭和54	南門地区(第1期)	南門跡・墓地跡保護工	5,200	20,000
昭和54	南門地区(第2期)	南門周辺陸地形修復工・緑化修景工	7,030	30,000
昭和55	南門地区(第3期)	開路工・便益施設工・緑化修景工	2,149	30,000
昭和56	外郭南染地区半部	緑化修景工	31,831	28,000
昭和56	南門(資料館・南門)	開路工・便益施設工・緑化修景工	54,400	30,000
昭和57	外郭南門地区(東斜面)	開路工	6,750	27,000
昭和57	作賀地区(第1期)	遺構保護塗工・緑化修景工	6,400	27,000
昭和58	作賀地区(第2期)	建物跡表示工・便益施設工・開路工・緑化修景工	6,130	27,000
昭和59	作賀地区(第3期)	土岸跡及び空堀跡表示工・便益施設工・開路工	8,260	27,000
昭和60	作賀地区(第4期)	遺構露出表示工・便益施設工・開路工・緑化修景工	6,700	27,112
行政南地区	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	11,500	30,000	
昭和61	作賀地区	便益施設工	19,000	30,000
山手地区	緑化修景工	2,900	30,000	
作賀地区北部	開路工・緑化修景工・便益施設工	5,50	35,000	
平成2	北山地区南北部	便益施設工・開路工・緑化修景工	3,120	30,000
平成3	北山地区南北部(第1期)	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	14,250	39,000
平成4	北山地区南北部(第2期)	道路跡表示工・便益施設工	805	51,000
平成4	東門・大畠地区東側部(第3期)	奈良時代刺繡跡及び遺跡表示工・便益施設工	50	51,000
平成5	東門・大畠地区東側部(第2期)	地形修復工・開路工・緑化修景工	12,500	35,000
平成6	東門・大畠地区東側部(第1期)	便益施設工	14,400	35,000
平成7	東門・大畠地区西側北半部(第1期)	道路跡復元工・墓地跡跡及び建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工	19,700	35,000
平成8	東門・大畠地区西側北半部(第2期)	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	3,800	9,300
平成9	東門・大畠地区西側北半部(第3期)	道路跡表示工・便益施設工	9,020	9,462
平成10	南門地区	多賀城跡復元解体修理工	8,266	8,514
平成11	東門・大畠地区西側北半部(第4期)	道路跡表示工・便益施設工・緑化修景工	8,266	8,514
平成12	柏木道跡(第1期)	遺構保護施工・排水工・法面保護工	15,738	31,500
平成13	柏木道跡(第2期)	法面保護工・側面削段工・植栽工・排水工	39,000	11,016
平成14	柏木道跡(第3期)	法面保護工・開路工	39,000	9,462
平成15	柏木道跡(第4期)	法面保護工・遺跡表示工・開路工・植栽工・照明設置工	13,325	8,514
平成16	柏木道跡(第5期)	開路広場工・雨水排水工・植栽工・照明設置工	13,325	8,500
平成17	案内板・柱整備	案内板柱設置工・既設樹木解説板内整備工	495	8,084
平成18	外部北辺北側の木道内整備	基盤整備工・開路広場工・自然育成工	495	8,104
平成19	外部北辺北側の木道内整備	施設撤去工・開路広場工・施設設置工・自然育成工	13,325	8,514
平成20	政令の内整備	墓地跡整備工	13,325	8,500
平成21	政令の内整備	墓地跡整備工	495	8,084
平成22	政令の内整備	追加遺構表示工・西脇跡・西横跡	495	8,084
平成23	政令の内整備	追加遺構表示工・東脇跡・西横跡	495	8,084
平成24	政令の内整備	追加遺構表示工・後御跡・政令内表土処理工(予定)	495	8,084
平成25	政令の内整備	北縞表示工・北辺整備工(予定)	495	8,084
平成26	政令の内整備	北縞表示工・北辺基盤整備工(予定)	495	8,084

3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業の実績

計 画 年 度	遺 跡 名	事 業	内 容	面積 (ml)	事業費 (千円)
昭和49年 第1次 5ヵ年 計 画	桃生城跡	地形図作成・第1次発掘調査	内都地区・外都の調査	500	2,500
	桃生城跡	第2次発掘調査	同上	850	2,500
	伊治城跡	地形図作成		1,020	1,500
	昭和52年 伊治城跡	第1次発掘調査	外都線・部内の調査	438	3,000
	昭和53年 伊治城跡	第2次発掘調査	部内の調査	780	3,000
昭和54年 第2次 5ヵ年 計 画	伊治城跡	第3次発掘調査	同上	1,000	4,000
	名生館遺跡	地形図作成・第1次発掘調査	城内地図の調査	1,650	7,000
	名生館遺跡	第2次発掘調査	同上	1,960	7,000
	名生館遺跡	第3次発掘調査	小額・内都地区の調査	1,156	7,000
	名生館遺跡	第4次発掘調査	小額地区的調査	1,020	7,000
昭和59年 第3次 5ヵ年 計 画	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地図の調査	1,800	6,300
	名生館遺跡	更開墾認調査		1,300	6,300
	白樺原窓跡	開発窓跡調査			
	衛山遺跡	第1次発掘調査	遺構の認調査	1,100	7,800
	衛山遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	1,074	7,000
平成元年 第4次 5ヵ年 計 画	衛山遺跡	第3次発掘調査	官衙中都部の把握	1,200	7,000
	衛山遺跡	第4次発掘調査	同上	562	7,000
	衛山遺跡	第5次発掘調査	同上	600	7,000
	衛山遺跡	第6次発掘調査	同上	2,200	10,000
	衛山遺跡	第7次発掘調査	同上	3,260	12,000
平成5年 第5次 5ヵ年 計 画	下伊賀野窓跡群	地形図作成・発掘調査	多賀城創建期窓跡の調査	600	14,000
	桃生城跡	第3次発掘調査	行政地区と外都線の調査	2,300	22,000
	平成7年 桃生城跡	第4次発掘調査	同上	730	20,000
	桃生城跡	第5次発掘調査	外都線の調査	800	17,000
	桃生城跡	第6次発掘調査	行政西側官衙の調査	800	17,000
平成10年 第6次 5ヵ年 計 画	桃生城跡	第7次発掘調査	同上	800	17,000
	桃生城跡	第8次発掘調査	同上	1,200	15,300
	桃生城跡	第9次発掘調査	行政西側丘陵上の調査	1,400	10,500
	桃生城跡	第10次発掘調査	同上	600	11,400
	平成14年 龟岡遺跡	第1次発掘調査	遺跡の範囲確認調査	520	6,500
平成15年 第7次 5ヵ年 計 画	龟岡遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	830	6,300
	木戸窓跡群	第1次発掘調査	A地点西側丘陵の調査	620	6,115
	木戸窓跡群	第2次発掘調査	B-C 地点の調査	300	5,932
	木戸窓跡群	第3次発掘調査	B-C 地点の調査	1,300	4,152
	六月坂遺跡	発掘調査	横六塙群の調査	1,000	3,520
平成20年 第8次 5ヵ年 計 画	日の出山窓跡群	試掘調査	A地点北側の調査	200	
	日の出山窓跡群	第1次発掘調査	F地点南側の調査	490	3,168
	日の出山窓跡群	第2次発掘調査	F地点西側の調査	620	2,994
	日の出山窓跡群	第3次発掘調査	F地点東側の調査	375	2,846
	大吉山丘窓跡	休止		0	0
平成24年 第9次 5ヵ年 計 画	大吉山丘窓跡	休止		0	0
	(予定)	多賀城創建期窓跡の調査			

4) 研究成果刊行物

① 宮城県多賀城跡調査研究所年報

「年報 1969」(第 5・6・7 次調査)	昭和 45 年 3 月	「年報 1991」(第 60・61 次調査)	平成 4 年 3 月
「年報 1970」(第 7・8・9・10・11 次調査)	昭和 46 年 3 月	「年報 1992」(第 62・63 次調査)	平成 5 年 3 月
「年報 1971」(第 12・13・14 次調査)	昭和 47 年 3 月	「年報 1993」(第 64 次調査)	平成 6 年 3 月
「年報 1972」(第 15・16・17・18 次調査)	昭和 48 年 3 月	「年報 1994」(第 65 次調査、環境整備)	平成 7 年 3 月
「年報 1973」(第 19・20・21・22 次調査)	昭和 49 年 3 月	「年報 1995」(第 66 次調査)	平成 8 年 3 月
「年報 1974」(第 23・24 次調査)	昭和 50 年 3 月	「年報 1996」(第 67 次調査)	平成 9 年 3 月
「年報 1975」(第 25・26・27 次調査、東外郭縁端部)	昭和 51 年 3 月	「年報 1997」(第 68 次調査、多賀城跡復原解説修理)	平成 10 年 3 月
「年報 1976」(第 28・29 次調査)	昭和 52 年 3 月	「年報 1998」(第 69 次調査)	平成 11 年 3 月
「年報 1977」(第 30・31 次調査)	昭和 53 年 3 月	「年報 1999」(第 70 次調査)	平成 12 年 3 月
「年報 1978」(第 32・33 次調査、環境整備)	昭和 54 年 3 月	「年報 2000」(第 71 次調査、環境整備)	平成 13 年 3 月
「年報 1979」(第 34・35 次調査、環境整備)	昭和 55 年 3 月	「年報 2001」(第 72 次調査)	平成 14 年 3 月
「年報 1980」(第 36・37 次調査)	昭和 56 年 3 月	「年報 2002」(第 73 次調査)	平成 15 年 3 月
「年報 1981」(第 38・39・40 次調査)	昭和 57 年 3 月	「年報 2003」(第 74・75 次調査)	平成 16 年 3 月
「年報 1982」(第 41・42 次調査)	昭和 58 年 3 月	「年報 2004」(第 76 次調査)	平成 17 年 3 月
「年報 1983」(第 43・44 次調査)	昭和 59 年 3 月	「年報 2005」(第 77 次調査)	平成 18 年 3 月
「年報 1984」(第 45・46・47 次調査、環境整備)	昭和 60 年 3 月	「年報 2006」(第 78 次調査)	平成 19 年 3 月
「年報 1985」(第 46・48・49 次調査)	昭和 61 年 3 月	「年報 2007」(第 79 次調査)	平成 20 年 3 月
「年報 1986」(第 49・50・51 次調査)	昭和 62 年 3 月	「年報 2008」(第 80 次調査)	平成 21 年 3 月
「年報 1987」(第 50・52・53 次調査)	昭和 63 年 3 月	「年報 2009」(第 81 次調査)	平成 22 年 3 月
「年報 1988」(第 54・55 次調査)	平成元年 3 月	「年報 2010」(第 82 次調査、環境整備)	平成 23 年 3 月
「年報 1989」(第 56・57 次調査)	平成 2 年 3 月	「年報 2011」(第 83 次調査)	平成 24 年 3 月
「年報 1990」(第 58・59 次調査)	平成 3 年 3 月		

② 多賀城跡遺跡発掘調査報告書

「桃生城跡 I」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 1 号	昭和 50 年 3 月	「研究紀要 I」	昭和 49 年 3 月
「桃生城跡 II」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 2 号	昭和 51 年 3 月	「研究紀要 II」	昭和 50 年 3 月
「伊治城跡 I」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 3 号	昭和 53 年 3 月	「研究紀要 III」	昭和 51 年 3 月
「伊治城跡 II」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 4 号	昭和 54 年 3 月	「研究紀要 IV」	昭和 52 年 3 月
「伊治城跡 III」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 5 号	昭和 55 年 3 月	「研究紀要 V」	昭和 53 年 3 月
「名生館跡 I」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 6 号	昭和 56 年 3 月	「研究紀要 VI」	昭和 54 年 3 月
「名生館跡 II」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 7 号	昭和 57 年 3 月	「研究紀要 VII」	昭和 55 年 3 月
「名生館跡 III」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 8 号	昭和 58 年 3 月		
「名生館跡 IV」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 9 号	昭和 59 年 3 月		
「名生館跡 V」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 10 号	昭和 60 年 3 月		
「名生館跡 VI」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 11 号	昭和 61 年 3 月		
「東山遺跡 I」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 12 号	昭和 62 年 3 月	「多賀城跡一政行跡図版一」	昭和 55 年 3 月
「東山遺跡 II」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 13 号	昭和 63 年 3 月	「多賀城跡一政行跡本文編一」	昭和 57 年 3 月
「東山遺跡 III」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 14 号	平成元年 3 月	「多賀城跡と古代東北」	昭和 60 年 3 月
「東山遺跡 IV」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 15 号	平成 2 年 3 月	「多賀城跡一発掘のあゆみー」	平成 15 年 3 月
「東山遺跡 V」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 16 号	平成 3 年 3 月	「多賀城跡一行政捕獲編ー」	平成 22 年 3 月
「東山遺跡 VI」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 17 号	平成 4 年 3 月	「多賀城跡一発掘のあゆみ 2010 ~」	平成 22 年 9 月
「東山遺跡 VII」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 18 号	平成 5 年 3 月	資料 II 「多賀城跡木簡 I」	平成 23 年 3 月
「下伊場野跡」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 19 号	平成 6 年 3 月		
「桃生城跡 I」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 20 号	平成 7 年 3 月		
「桃生城跡 II」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 21 号	平成 8 年 3 月		
「桃生城跡 V」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 22 号	平成 9 年 3 月		
「桃生城跡 VI」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 23 号	平成 10 年 3 月		
「桃生城跡 VII」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 24 号	平成 11 年 3 月		
「桃生城跡 VIII」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 25 号	平成 12 年 3 月		
「桃生城跡 IX」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 26 号	平成 13 年 3 月		
「桃生城跡 X」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 27 号	平成 14 年 3 月		
「龜岡跡」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 28 号	平成 15 年 3 月		
「龜岡跡 II」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 29 号	平成 16 年 3 月		
「木戸室跡群 I」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 30 号	平成 17 年 3 月		
「木戸室跡群 II」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 31 号	平成 18 年 3 月		
「木戸室跡群 III」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 32 号	平成 19 年 3 月		
「六月坂遺跡はか」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 33 号	平成 20 年 3 月		
「日の山遺跡群 I」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 34 号	平成 21 年 3 月		
「日の山遺跡群 II」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 35 号	平成 22 年 3 月		
「日の山遺跡群 III」	多賀城跡遺跡発掘調査報告書第 36 号	平成 23 年 3 月		

③ 研究記要

「桃生城跡 I」	多賀城跡と古代日本	昭和 49 年 3 月
「桃生城跡 II」	多賀城跡木簡文書	昭和 54 年 3 月
「桃生城跡 III」	多賀城跡一政行跡図版一	昭和 55 年 3 月
「桃生城跡 IV」	多賀城跡一政行跡本文編一	昭和 57 年 3 月
「桃生城跡 V」	多賀城跡と古代東北	昭和 60 年 3 月
「桃生城跡 VI」	多賀城跡一発掘のあゆみー	平成 15 年 3 月
「桃生城跡 VII」	多賀城跡一行政捕獲編ー	平成 22 年 3 月
「桃生城跡 VIII」	多賀城跡一発掘のあゆみ 2010 ~	平成 22 年 9 月
「桃生城跡 IX」	資料 II 「多賀城跡木簡 I」	平成 23 年 3 月

④ 調査報告書・資料集他

「多賀城跡と古代日本」	資料 I 「多賀城跡木簡」	昭和 54 年 3 月
「多賀城跡一政行跡図版一」	資料 II 「多賀城跡木簡文書」	昭和 55 年 3 月
「多賀城跡一政行跡本文編一」	資料 III 「多賀城跡と古代東北」	昭和 57 年 3 月
「多賀城跡と古代東北」	資料 IV 「多賀城跡一発掘のあゆみー」	昭和 60 年 3 月
「多賀城跡一発掘のあゆみー」	資料 V 「多賀城跡一行政捕獲編ー」	平成 15 年 3 月
「多賀城跡一行政捕獲編ー」	資料 VI 「多賀城跡一発掘のあゆみ 2010 ~」	平成 22 年 3 月
「多賀城跡一発掘のあゆみ 2010 ~」	資料 VII 「多賀城跡木簡 I」	平成 22 年 9 月
		平成 23 年 3 月

報告書抄録

ふりがな 書名	みやぎけんたがじょうあとちゅうさけんきゅうしょねんぽう 2011 たがじょうあと 宮城県多賀城跡調査研究所年報 2011 多賀城跡							
副書名	多賀城跡 第83次調査							
卷次	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2011							
シリーズ名	宮城県多賀城跡調査研究所年報							
シリーズ番号	2011							
編著者名	古川一明・三好秀樹・廣谷和也							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎1丁目22-1 TEL 022-368-0102 FAX 022-368-0104							
発行年月日	20120327							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
特別史跡 たがじょうあと 多賀城跡	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 いちかわ・ときしま 市川・浮島	04209	004	38 ° 18 ° 24 °	140 ° 59 ° 18 °	2011年6月14日 2011年11月8日	640 m ²	調査計画 に基づく 学術調査
世界測地系準拠 (G R S 80)								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
特別史跡 多賀城跡 第83次調査	国府／ 城柵	奈良・平安	・築地塀跡 ・整地層 ・溝状掘り込み ・掘立柱建物跡 ・柱穴列跡 ・竪穴住居跡 ・竪穴遺構 ・杭列跡 ・集石遺構 ・土壤 ・溝	弥生土器 土師器 須恵器 須恵系土器 縄釉陶器 灰釉陶器 中近世陶器 瓦質土器 近世磁器 碗 軒丸瓦・軒平瓦 丸瓦・平瓦・隅切瓦 鉄製品・鉄滓 木製品 土製品 石製品 石器	・外郭南辺の西端部で築地塀跡の存在を確認 ・五万崎地区建物群の南側への展開を把握 ・7世紀前半代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡などの存在を確認			
要約	第83次調査では、外郭南辺の西端部を対象とした発掘調査を実施し、築地塀跡の存在を確認した。その結果、未調査部分を含めた外郭南辺の区画施設はほぼ直線的に約870m延び、一貫して築地塀である可能性が高まった。この築地塀には3回もしくは4回の補修が認められるが、最初の構築期を特定することはできなかった。 また、第28次調査で検出していた建物群とはほぼ同時期の掘立柱建物跡が外郭南辺築地の内側約10mまで拡がっていることや、7世紀前半代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡などの存在を確認している。							



外郭南辺西端部の築地壠跡（東から撮影）

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2011

多賀城跡

平成24年3月27日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所

多賀城市高崎一丁目22-1

T E L (022) 368-0102

F A X (022) 368-0104

印刷所 株式会社 仙台紙工印刷
